秋田県文化財調査報告書第498集
払田柵跡調査事務所年報2014

払田柵跡

－第148次調査　関連遺跡の調査概要－

２０１５年３月

秋　田　県　教　育　委　員　会
秋田県教育庁払田柵跡調査事務所

題字　新野直吉　書

払田柵跡調査事務所年報2014

払田柵跡

ほったのさくあと

－第148次調査　関連遺跡の調査概要－

２０１５年３月

秋　田　県　教　育　委　員　会
秋田県教育庁払田柵跡調査事務所

序

国指定史跡払田柵跡は、管理団体の大仙市による環境整備事業も順調に進み、訪れる見学者も年々増加しております。史跡の実体を解明するため、調査を継続している当事務所にとっても、その成果を基に復元された史跡公園に地域の方々が集い、ふるさとの誇りとなっていることは、喜びに堪えないところであります。

平成26年度は、第９次５年計画の初年度として、長森丘陵南側の沖積地を対象に第148次調査を実施するとともに、関連遺跡の調査として、横手市雄物川町において、遺跡の試掘調査を行いました。また当事務所による学術調査40周年を迎えるにあたり、記念講演会及び企画展を開催することができました。

第148次調査は142・144・146次調査に引き続いて大路地区北東側の沖積地を調査し、外郭南門東方官衙域における、９世紀代の地表面の詳細を確認することができました。また懸案であった北西側の沖積地を初めて調査し、大路西建物の西側においても、広い範囲が盛土造成され、丘陵裾部との間には大溝が構築されていることが確認されました。この造成面上には、鍛冶炉を始めとする様々な遺構も確認され、大路西建物と一体をなす施設群が、背後に広がることが想定されます。

平成19年度から実施している関連遺跡の調査としては、本年度も、横手市雄物川町造山地区を対象に調査を行い、雄物川を臨む台地の西端部から奈良・平安時代の竪穴建物跡や板塀跡が確認され、一昨年度新発見された蝦夷塚北遺跡が、さらに西側へ広がることが確認されました。

本書は以上のような調査成果とともに、史跡調査に関する普及活動などの成果をまとめたものであり、御活用いただければ幸いと存じます。

最後に、発掘調査並びに本書作成にあたって指導と助言を賜りました、文化庁記念物課、宮城県多賀城跡調査研究所に感謝申し上げますとともに、史跡管理団体である大仙市・大仙市教育委員会、並びに美郷町・美郷町教育委員会の御協力に対し、厚く御礼申し上げます。また、関連遺跡の調査においては、土地所有者の方々及び横手市教育委員会にも多大な御協力をいただきました。感謝申し上げます。

平成27年３月

秋田県教育庁払田柵跡調査事務所
所　長　京　　久　夫

例　言

1　本年報は、秋田県教育庁払田柵跡調査事務所が平成26年度に実施した調査研究事業である、払田柵跡第148次調査、関連遺跡の調査、及び調査成果の普及と関連活動の成果を収録したものである。第４章には関連遺跡の調査として実施した、横手市雄物川町造山地区の調査成果を収載した。

2　第３章第３節の自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した分析結果を収載したものである。

3　本報告書に使用した地形図等は、国土地理院発行25,000分の１地形図「六郷」（第１図）である。そのほか第４章において、横手市教育委員会提供の管内図等を使用した。

4　発掘調査並びに本年報作成にあたり、史跡払田柵跡調査指導委員である秋田大学名誉教授・秋田県立博物館名誉館長　新野直吉氏、国立歴史民俗博物館名誉教授　岡田茂弘氏、富山大学名誉教授　黒崎直氏、秋田大学名誉教授　熊田亮介氏から指導を賜った。

5　本年報を作成するにあたり、次の方々より有益な教示をいただいた。記して謝意を表する。

近江俊秀・中井將胤（文化庁記念物課）　小田裕樹（奈良文化財研究所）　渡部育子（秋田大学）　根岸洋（国際教養大学）　伊藤武士・神田和彦（秋田城跡調査事務所）　山崎文幸・熊谷直栄・齊藤浩志・佐藤健太郎（大仙市教育委員会）　亀井崇晃（美郷町教育委員会）　島田祐悦・佐藤知也（横手市教育委員会）

以上　順不同・敬称略

6　調査に係る全ての資料は、秋田県教育委員会が保管している。

7　本年報は当事務所長の指導のもと、五十嵐一治が作成し、編集を行った。また遺構図の作成に際しては、伊豆俊祐の協力を得た。

凡　例

1　遺構等の実測図は、世界測地系（測地成果2000）による平面直角座標系第Ｘ座標系を基準に作成した。実測図・地形図中の方位は座標北を示し、磁北はこれよりＮ７°30′00″Ｗ　であり、真北はＮ０°10′38″Ｅである。詳細は『払田柵跡調査事務所年報2005』（2006年３月刊）の第３章第３節２を参照いただきたい。

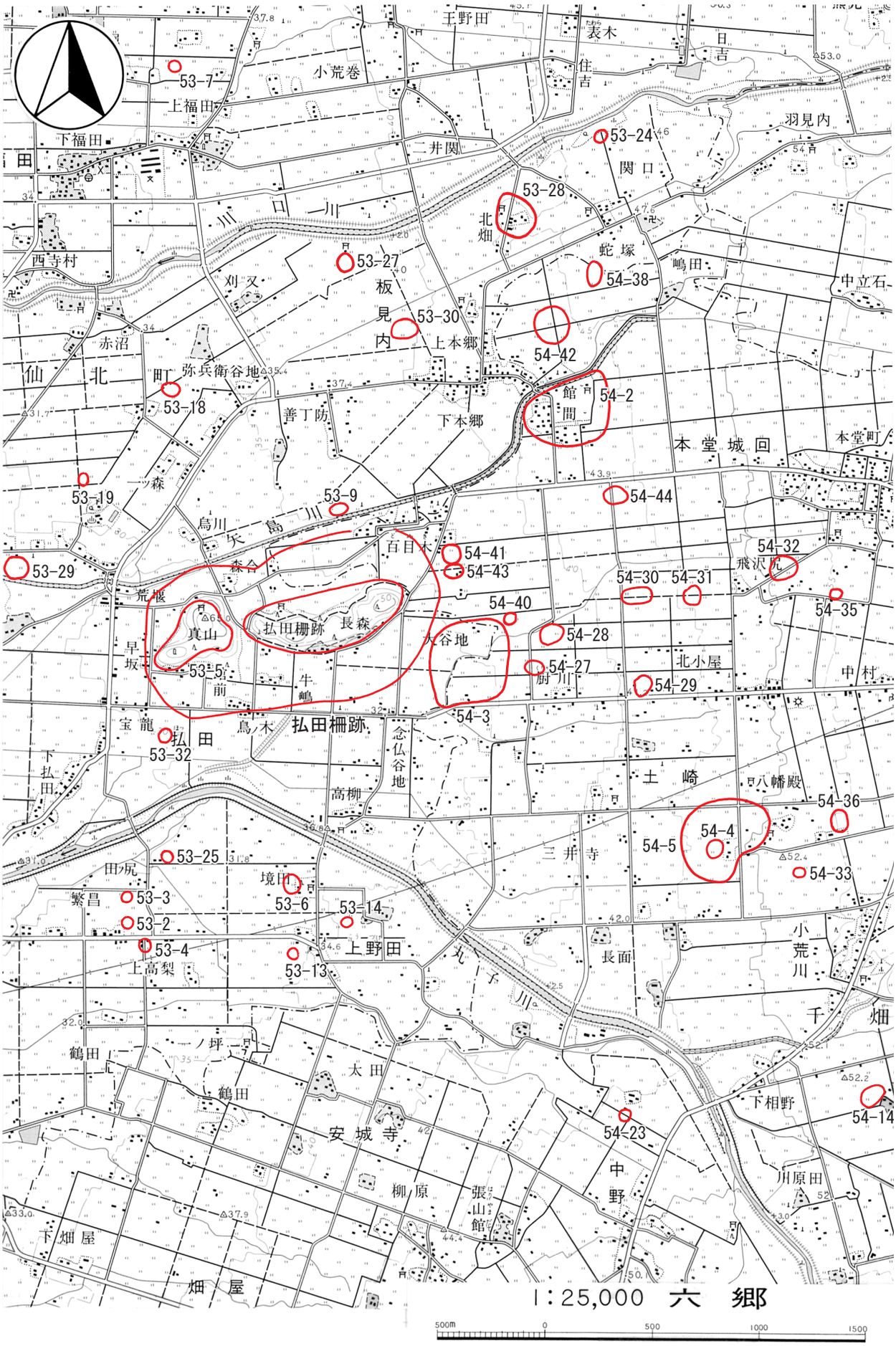
2　土層断面図等の土色の表記は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』（19版1997年）に拠ったが、本書の記述にあたり、土質（性）を重視して記載した。表記にあたり基本層序は、ローマ数字（Ⅰ、Ⅱ･･･）、遺構堆積土はアラビア数字（１、２･･･）を使用した。

目　次

序
例言・凡例
第１章　遺跡の概要 …… 1
第２章　調査研究事業の計画と実績
　第１節　第９次５年計画の概要 …… 4
　第２節　本年度事業の計画と実績 …… 5
第３章　第148次調査の概要
　第１節　調査の目的と調査区 …… 7
　第２節　検出遺構と遺物 …… 9
　第３節　自然科学分析 …… 27
　第４節　小結 …… 33
第４章　関連遺跡の調査
　第１節　調査に至る経過 …… 41
　第２節　調査の概要 …… 43
第５章　調査成果の普及と関連活動 …… 56

挿図目次

第１図　払田柵跡周辺の古代～近世の遺跡 …… iv
第２図　払田柵跡調査実施位置図 …… 6
第３図　東側調査区　トレンチ・遺構配置略図 … 8
第４図　第１トレンチ　平面図 …… 12
第５図　第１トレンチ　断面図 …… 13
第６図　第２トレンチ　平面図 …… 14
第７図　第２トレンチ　断面図 …… 15
第８図　ＳＸ2002盛土整地地業　出土遺物（１）…… 19
第９図　ＳＸ2002盛土整地地業　出土遺物（２）…… 20
第10図　ＳＸ2002盛土整地地業　出土遺物（３）…… 21
第11図　ＳＸ2002盛土整地地業　出土遺物（４）…… 22
第12図　ＳＸ2002盛土整地地業　出土遺物（５）…… 23
第13図　ＳＸ2141盛土整地地業　出土遺物 …… 24
第14図　遺構内出土遺物 …… 25
第15図　遺構外出土遺物 …… 26
第16図　植物珪酸体含量 …… 29
第17図　外郭南門外側の官衙域と遺構分布 …… 34
第18図　造山地区　調査実施位置図
　トレンチ配置図 …… 42
第19図　Ｌ地区　トレンチ配置図 …… 44
第20図　Ｌ－１トレンチ　平・断面図 …… 46
第21図　Ｌ－２・３トレンチ　平・断面図 …… 47
第22図　Ｌ－４トレンチ　平・断面図 …… 48
第23図　Ｌ地区　出土遺物（１）…… 49
第24図　Ｌ地区　出土遺物（２）…… 50
第25図　外柵西門北側における現状変更
　立会調査成果 …… 59



第１図　払田柵跡周辺の古代～近世の遺跡

第１章　遺跡の概要

払田柵跡は、秋田県大仙市（だいせん）払田（ほった）・仙北郡美郷（みさと）町本堂城回（ほんどうしろまわり）に所在する古代城柵官衙遺跡である。遺跡は雄物川の中流域に近く、大仙市大曲地区の東方約６㎞、横手盆地北側の仙北平野中央部に位置する。遺跡は、第三紀硬質泥岩からなる真山・長森の小丘陵を中心として、北側を川口川・矢島川（烏川）、南側を丸子川（鞠子川、旧名：荒川）によって挟まれた沖積低地に立地する。遺跡は、明治35・36年（1902・03）の千屋村（現美郷町）坂本理一郎による溝渠開削の際や、明治39年（1906）頃から開始された高梨村（現大仙市）耕地整理事業の際に土中に埋もれ木があると知られたことが端緒となっている。その後、この埋もれ木について地元の後藤寅之助（宙外）・藤井東一（甫公）らが注目し、氏らによって歴史的遺産と理解された。

昭和５年３月に高梨村が調査を実施したが、その中心となったのは後藤寅之助であった。さらに同年10月に文部省嘱託上田三平によって学術調査が行われ、遺跡の輪郭が明らかにされた。この結果に基づき、昭和６年３月30日付けで秋田県最初の国史跡の指定を受け、昭和63年６月29日付けで史跡の追加指定がなされ、現在に至っている。史跡指定面積は899,380.97㎡である。

払田柵跡周辺においては、1973（昭和48年）に「新農村基盤総合整備パイロット事業」が計画され、史跡内の農道拡幅・新設・舗装、丘陵の公園化などが計画された。しかし文化庁からは、史跡内容が未解明であり、許可判断の目安すらない状況であることから、指定地内の現状変更について不許可方針が示され、同時に県が主体となり史跡内容を確認するため学術調査を継続することが不可欠であることが指導された。幸いにも地元管理団体である仙北村及び地域の人々の深い理解により、史跡指定地内は開発計画から除外され、以後協議を重ねて県・村・国の三者による役割分担が行われた。第一に秋田県は史跡の実体を解明するため、「秋田県払田柵跡調査事務所」（昭和61年４月「秋田県教育庁払田柵跡調査事務所」と改称）を設置し、計画的に発掘調査を進める。これは史跡が２つの自治体（旧仙北村および旧千畑村）に跨がって所在する点、および高度な行政判断を伴う専門性を考慮した国の指導である。第二に地元仙北村（後の仙北町、現大仙市）は、史跡の重要な箇所を保護するために公有化を進めるとともに、学術的な調査成果に基づいた史跡公園として整備する。第三に国（文化庁）は、村による土地公有化・環境整備事業、および県による学術調査事業について、長期的な計画として指導するとともに、国庫補助事業として承認する。このように、地元自治体により公有化された史跡の重要箇所が調査地として提供され、その調査成果の蓄積が環境整備事業に反映されるとともに、地域住民や県民、ひいては国民に活用される形で還元されるという、埋蔵文化財保護のモデルともいえる体制がつくられたのである。

史跡は長森・真山を囲む外柵と、長森を囲む外郭線からなり、長森丘陵中央部には政庁がある。政庁は板塀で区画され、正殿・東脇殿・西脇殿や付属建物群が配置されている。これら政庁の建物には５時期（第Ⅰ～Ⅴ期）の変遷があり、創建は９世紀初頭、終末は10世紀後半である。政庁の調査成果は昭和60年に報告書『払田柵跡Ⅰ　－政庁跡－』として公刊された。

一方、区画施設である外柵は、真山・長森の二つの丘陵を囲むようにしてあり、東西1,370m、南北780mの長楕円形で、標高32 ～ 37m、総延長約3,600m、外柵によって囲まれる遺跡の総面積は約

878,000㎡である。外柵は１時期の造営で杉角材による材木塀が一列に並び、東西南北に八脚門が開く。外郭は、長森を取り囲むようにしてあり、東西765m、南北320mの長楕円形で、面積約163,000㎡、最高地は標高53mである。外郭線の延長は約1,760mで石塁（南門脇）、築地塀（東・西・南の山麓）と材木塀が連なり、東西南北に八脚門を配する。外郭線は全体に４時期（Ａ～Ｄ期）にわたる造営が認められる。なお外柵・外郭は、従来それぞれ外郭線・内郭と呼称されていたが、それまでの調査成果を踏まえ、平成７年から呼び替えたものである。これら区画施設の調査成果は、平成11年に報告書『払田柵跡Ⅱ　－区画施設－』として公刊された。

外郭を構成する長森地区各所の官衙域については、政庁の東側に実務官衙域、西側には２か所の鍛冶工房域の存在が明らかとなり、また長森丘陵北側の調査成果と合わせ、平成21年に報告書『払田柵跡Ⅲ　－長森地区－』として公刊された。

出土品には、須恵器・土師器・瓦質土器・緑釉陶器・灰釉陶器・青磁（越州窯系）・瓦・硯などのほか、紡錘車・坩堝・羽口・支脚などの土製品、石帯・砥石・金床石などの石製品、鉄鏃・鎌・刀子・釘・紡錘車などの鉄（銅）製品・鉄（銅）滓類、斎串・曲物・挽物・鋤・楔・絵馬（２点）などの木製品、漆紙文書（６点）・木簡・墨書土器（朱書もあり）・箆書土器などの文字資料がある。

木簡（刻字のある柵木15点を含む）は108点確認されており、「飽海郡少隊長解申請」「十火大粮二石八斗八升」「嘉祥二年正月十日」などと記された文書・貢進用木簡があり、「別當子弟大伴寧人」「鹿毛牡馬者」「矢田部弓取」「北門」「狄藻」（以上墨書）、「山本」「最上」「最上四」「禰木田」「一三□木二」「全二」「行」（以上刻字）などの文字もある。

墨書・箆書土器は590点出土・採集されており、一少隊御前下・大津郷・鷹空上・懺悔・小勝・音丸・北門・北預・厨家・靫大・中大・中万・厨・官・舎・館・麿・宅・新・吉・秋・郡・千・主・長・酒・安・賀・全・成・前・伴・部・左・文・名・上・下・矢・車・工・益・山・就・立・生・平・延・圓・集・大・木・中・仲・犬・方・継・廰・春・又・十・七・没（以上墨書）、「出羽［　］郡□男賀凡酒坏」（箆書）などの文字が認められる。

管理団体である大仙市は、昭和54年度から保存管理計画による遺構保護整備地区の土地買い上げ事業を進めており、昭和57年度からは調査成果に基づいて環境整備事業を実施している。さらに平成３年度から「ふるさと歴史の広場」事業により、外柵南門跡や大路東建物跡、河川跡・橋梁の復元整備、ガイダンス施設（払田柵総合案内所）の設置などを行い、さらに平成７年度からは「ふれあいの史跡公園」事業により、政庁東方の官衙建物跡の整備などを実施した。10～12年度には外郭西門跡の門柱及びこれに取り付く材木塀跡の復元整備を、13年度からは外郭北門から東門周辺の整備事業を開始しており、本年度は外郭北門周辺の盛土整地を実施している。また、18年度より外郭北門周辺の低地部には埋没遺材の保護管理を目的として水位計を６か所設置しており、継続的な水位の観察が続けられている。

なお、平成25年度までに実施した過去39年間の発掘調査面積は、秋田県埋蔵文化財センター（第102・128・131・134・138・143・145・147次）・大仙市（旧仙北町）、美郷町（旧千畑町）調査分を含めて、延べ55,426㎡（重複調査分を差し引くと実質52,459㎡）であり、史跡指定総面積のうちの5.8％にあたる。

第１表　払田柵跡周辺の主な古代・中世・近世遺跡一覧（第１図に対応）

地図番号	遺跡名	所在地	備考	註
212-53-1 434-54-1	払田柵跡	大仙市払田 美郷町本堂城回	古代城柵官衙遺跡（９世紀初頭～10世紀後半）集落（縄文）、墓地（中世）、城館（堀田城）	
212-53-2	繁昌Ⅰ遺跡	大仙市高梨	遺物包含地（木製品）：古代	1
212-53-3	繁昌Ⅱ遺跡	大仙市高梨	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
212-53-4	上高梨遺跡	大仙市高梨	遺物包含地（須恵器）	1
212-53-5	堀田城跡	大仙市払田	真山丘陵を利用した中世城館跡	2・8
212-53-6	境田城跡	大仙市払田	中世城館跡：天正18年（1590）破却	2
212-53-7	杉ノ下Ⅰ遺跡	大仙市横堀	遺物包含地（須恵器）	1
212-53-9	鍛冶屋敷遺跡	大仙市板見内	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
212-53-13	四十八遺跡	大仙市上野田	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
212-53-14	中村遺跡	大仙市上野田	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
212-53-18	弥兵谷地遺跡	大仙市板見内	遺物包含地（須恵器）	1
212-53-19	一ツ森遺跡	大仙市板見内	遺物包含地（須恵器系陶器壺）	1
212-53-24	堰口遺跡	大仙市板見内	遺物包含地（鉄滓）	15
212-53-25	田ノ尻遺跡	大仙市払田	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
212-53-27	観音堂遺跡	大仙市板見内	近世集落跡、掘立柱建物跡、井戸等検出	10
212-53-28	北畑遺跡	大仙市北畑	中世集落・墓地、火葬墓、2005年発掘調査	11
212-53-29	一ツ森Ⅱ遺跡	大仙市堀見内	遺物包含地（須恵器）、2003年発見	11
212-53-30	八幡堂遺跡	大仙市板見内	遺物包含地（土師器、中近世陶器）	11
212-53-32	下川原遺跡	大仙市払田	遺物包含地（土師器）、1995年発見	14
434-54-2	本堂城跡	美郷町本堂城回	本堂氏の居館跡、2004年～確認調査	18･20･21
434-54-3	厨川谷地遺跡	美郷町土崎	埋蔵銭出土地(1915年≪大正４≫出土)古代祭祀遺跡、2001年発掘調査	3・7
434-54-4	中屋敷Ⅰ遺跡	美郷町土崎	寺院跡	1
434-54-5	中屋敷Ⅱ遺跡	美郷町土崎	縄文・古代集落跡、2002・03年発掘調査	5・12
434-54-14	内村遺跡	美郷町千屋	古代集落跡、1980年発掘調査、中国産青磁出土	4・16
434-54-23	砂館跡	美郷町中野	城館跡	2
434-54-27	厨川谷地Ⅱ遺跡	美郷町土崎	中世以降？、2000年発見	9
434-54-28	厨川谷地Ⅲ遺跡	美郷町土崎	古代、2001年発見	9
434-54-29	下中村遺跡	美郷町土崎	古代、2002年発見、墨書土器出土	9
434-54-30	飛沢尻遺跡	美郷町土崎	古代、2002年発見、墨書土器・和鏡出土	9
434-54-31	下飛沢遺跡	美郷町土崎	古代、2002年発見	9
434-54-32	上飛沢遺跡	美郷町土崎	古代、2003年発掘調査、掘立柱建物跡検出	6
434-54-33	上館遺跡	美郷町土崎	中近世城館跡か、2002年発見	13
434-54-35	松ノ木遺跡	美郷町土崎	中世～近世、2003年の確認調査で柱穴確認	9
434-54-36	八幡殿遺跡	美郷町土崎	古代集落跡か、2003年確認調査	9
434-54-38	西館遺跡	美郷町本堂城回	縄文・古代、2005年発見	13
434-54-40	森崎Ⅰ遺跡	美郷町本堂城回	古代、2006年発見、墨書土器出土	19
434-54-41	城方小屋遺跡	美郷町本堂城回	古代集落跡、2007年発掘調査、柵列跡、土坑墓	17
434-54-42	北館遺跡	美郷町本堂城回	近世集落跡、2006年発見	13
434-54-43	森崎Ⅱ遺跡	美郷町本堂城回	古代集落跡、2007年発掘調査、竪穴住居跡	17
434-54-44	田町遺跡	美郷町本堂城回	古代遺物散布地、2007年発見	13

※地図番号の212は大仙市管内、53は旧仙北町域を示し、434は美郷町管内、54は旧千畑町域を示す。

【第１表の註】

1　秋田県教育委員会 1987『秋田県遺跡地図（県南版）』
2　秋田県教育委員会 1981『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第86集
3　千畑町 1986「古銭発掘由来記」『千畑町郷土史』
4　秋田県教育委員会 1981『内村遺跡』秋田県文化財調査報告書第82集
5　千畑町教育委員会 2004『中屋敷Ⅱ遺跡』千畑町文化財調査報告書第６集
6　千畑町教育委員会 2004『十二遺跡・上飛沢遺跡』千畑町文化財調査報告書第７集
7　秋田県教育委員会 2005『厨川谷地遺跡』秋田県文化財調査報告書第383集
8　今村義孝校注 1966『奥羽永慶軍記（上）（下）』人物往来社
9　美郷町教育委員会 2005『町内遺跡詳細分布調査報告書』美郷町文化財調査報告書第１集
10　山崎文幸 2004「秋田・観音堂遺跡」『木簡研究』第26号　木簡学会
11　大仙市教育委員会からの情報提供による。
12　秋田県教育委員会 2005『中屋敷Ⅱ遺跡』秋田県文化財調査報告書第384集
13　美郷町教育委員会からの情報提供による。
14　秋田県教育委員会 1996『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第267集
15　秋田県教育委員会 2007『秋田県遺跡地図（仙北地区版）』
16　島田祐悦・高橋学 2007「内村遺跡」『横手市史 資料編 考古』
17　美郷町教育委員会 2008『城方小屋遺跡・森崎Ⅱ遺跡』美郷町埋蔵文化財調査報告書第６集
18　美郷町教育委員会 2007『本堂城跡』美郷町埋蔵文化財調査報告書第５集
19　美郷町教育委員会 2008『町内遺跡詳細分布調査報告書』美郷町埋蔵文化財調査報告書第７集
20　美郷町教育委員会 2011『本堂城跡』美郷町埋蔵文化財調査報告書第11集
21　山形博康 2012「秋田・本堂城跡」『木簡研究』第34号　木簡学会

第２章　調査研究事業の計画と実績

第１節　第９次５年計画の概要

秋田県は、史跡払田柵跡の解明にあたるため、昭和49年４月に秋田県払田柵跡調査事務所を開設し（昭和61年４月「秋田県教育庁払田柵跡調査事務所」と改称）、同年から５年で１単位の中期計画を立案して継続的な発掘調査を毎年実施している。

第１～２次５年計画（昭和49～58年度）では、主に「中枢施設の全面発掘」を行い、政庁域の建物や区画施設（板塀跡）の配置、変遷を明らかにした。第３～５次５年計画（昭和59～平成10年度）では、外柵・外郭の区画施設（築地・材木塀跡）や門跡、長森丘陵部東側の官衙域、外郭低地（主に外郭南門～外柵南門跡間や南北大路周辺）の調査を行った。このように第１～５次の５年計画による25年間の発掘調査では、城柵官衙遺跡の中枢ともいえる政庁域と門跡を含む区画施設の様相把握、及び柵内の一部地区（主に長森丘陵部東側、南北大路周辺）における遺構内容の解明が進められた。

第６次５年計画（平成11～15年度）は、過去25年間の調査成果と派生する課題を踏まえ、その後の調査や環境整備に資することを目的に、主に長森丘陵の各場にどのような施設が存在するのかを足早に把握しようとした。調査は長森丘陵部西側から開始したが、調査にあたり、トレンチ法を採用したことで結果的には、少ない調査面積で多くの情報を得ることができた。第６次５年計画で採用した調査手法は、長森丘陵部における場の使われ方を予測することと、払田柵跡を適切に保存・管理し、活用するためにも有効であることを再確認した。

第７次５年計画（平成16～20年度）では、「払田柵跡の各地区における遺構内容及び場の機能の調査」として、トレンチ法を用いて実施した。その中での重点区は、長森丘陵部北側、外柵地区南東部（沖積地）、真山丘陵部であった。また、「払田柵跡関連遺跡の現況調査及び情報収集」という柵外にも視野を広げた計画を掲げ、平成19年度には、横手市雄物川町造山地区で試掘調査を実施した。

第８次５年計画（平成21～25年度）では、引き続き「払田柵跡の各地区における遺構内容及び場の機能の調査」として、トレンチ法を用いて実施した。その中での重点区は、外柵地区（沖積地・微高地部）の調査で、外郭南門東方官衙域及び南西官衙域周辺、並びに外郭北西部のほか、外柵地区東部・北部の沖積地を調査した。また払田柵跡関連遺跡の調査として、引き続き平成21・23・24・25年度に、横手市雄物川町造山地区で試掘調査を実施した。

過去40年間の実績を踏まえ、払田柵内外の各地区における場の使われ方と詳細な遺構内容を把握し、歴史的意義や特色を明確にすることを目指し、第９次５年計画では次の調査を行う。

（１）払田柵跡の各地区における遺構内容及び場の機能の調査

調査対象地区は、払田柵跡内全域ではあるが、特に外柵地区と真山地区を重点地区として進める。

①外柵地区（沖積地・微高地部）の調査

沖積地・微高地部の調査は、区画施設等の重要遺構及び柵内南東部域を除き、ほとんど行われて来なかった。第８次５年計画で調査を進めたところ、長森丘陵裾部には一定の広さの微高地が広がっており、外郭線の外側においても、比較的長い時間幅を持つ官衙域を形成されていること

が明らかとなった。しかし水田として作付けが行われている地区であることから制限されることも多く、対象範囲も広大なため、引き続き「場の機能」解明のため、地権者の同意を得た上でトレンチ調査を実施する。そのなかでも、長森丘陵部南辺の沖積地を重点地区とする。

②真山地区の調査

払田柵跡創建期の内容解明にとって重要な真山地区の調査を実施する。小規模ではあるが遺構内容確認調査を行う。

（２）払田柵跡関連遺跡の試掘調査等

払田柵跡の解明には指定地内の調査に加え、指定地外の同時代関連遺跡の調査が必要である。そのために、関連資料・情報の収集、現地踏査を踏まえた上で可能であれば試掘調査を実施する。

また、一連の作業・調査を通じて県内各市町村との連携を深め、当事務所が蓄積している史跡発掘調査・研究についての実践的な技術指導、史跡の保存・活用に関する情報の提供等を行う。

当面は近年のほ場整備対応調査により奈良時代の集落遺跡が多数確認され、また瓦・硯など官衙関連遺物の出土も確認されている、横手市雄物川町造山地区周辺を対象とし、一定の成果蓄積を目指す。また南接する雄勝郡羽後町等において踏査を実施するとともに調査目的の周知及び働きかけを進め、以後の試掘調査等につなげていく。

第２節　本年度事業の計画と実績

払田柵跡調査事務所が平成26年度に実施した事業は、第９次５年計画等に基づき、下記の項目を設定し、実施・活動した。

（１）払田柵跡の発掘調査　　（２）関連遺跡の調査　　（３）調査成果の普及と関連活動

本節では（１）についての調査計画及び実績の概要を記し、詳細は第３章に記録する。（２）は第４章、（３）は第５章にそれぞれの概要を収載する。

本年度の発掘調査は、次のような「平成26年度払田柵跡調査計画」を立案して調査を実施した。発掘調査事業費は、総経費4,941千円であり、うち国庫補助額2,470千円（50％）、県一般財源2,471千円（50％）である。

第２表　平成26年度払田柵跡調査計画表

調査次数	調査地区	調査内容	調査面積	調査期間・備考
第148次	大路地区 （大仙市払田字仲谷地　地内）	遺構内容確認調査	250㎡	６月２日～８月１日 ※文化庁補助事業
合　計	１地区		250㎡	

本年度調査の実績は第３表のとおりである。

第３表　平成26年度払田柵跡調査実績表

調査次数	調査地区	調査内容	調査面積	調査期間・備考
第148次	大路地区 （大仙市払田字仲谷地　地内）	遺構内容確認調査	126㎡	６月２日～８月15日 ※文化庁補助事業
合　計	１地区		126㎡	

第148次調査は、外郭南門外の沖積地に位置する東方官衙域の南側、及び南西官衙域の西側における遺構分布状況を確認する調査である。

第２図　払田柵跡調査実施位置図

第３章　第148次調査の概要

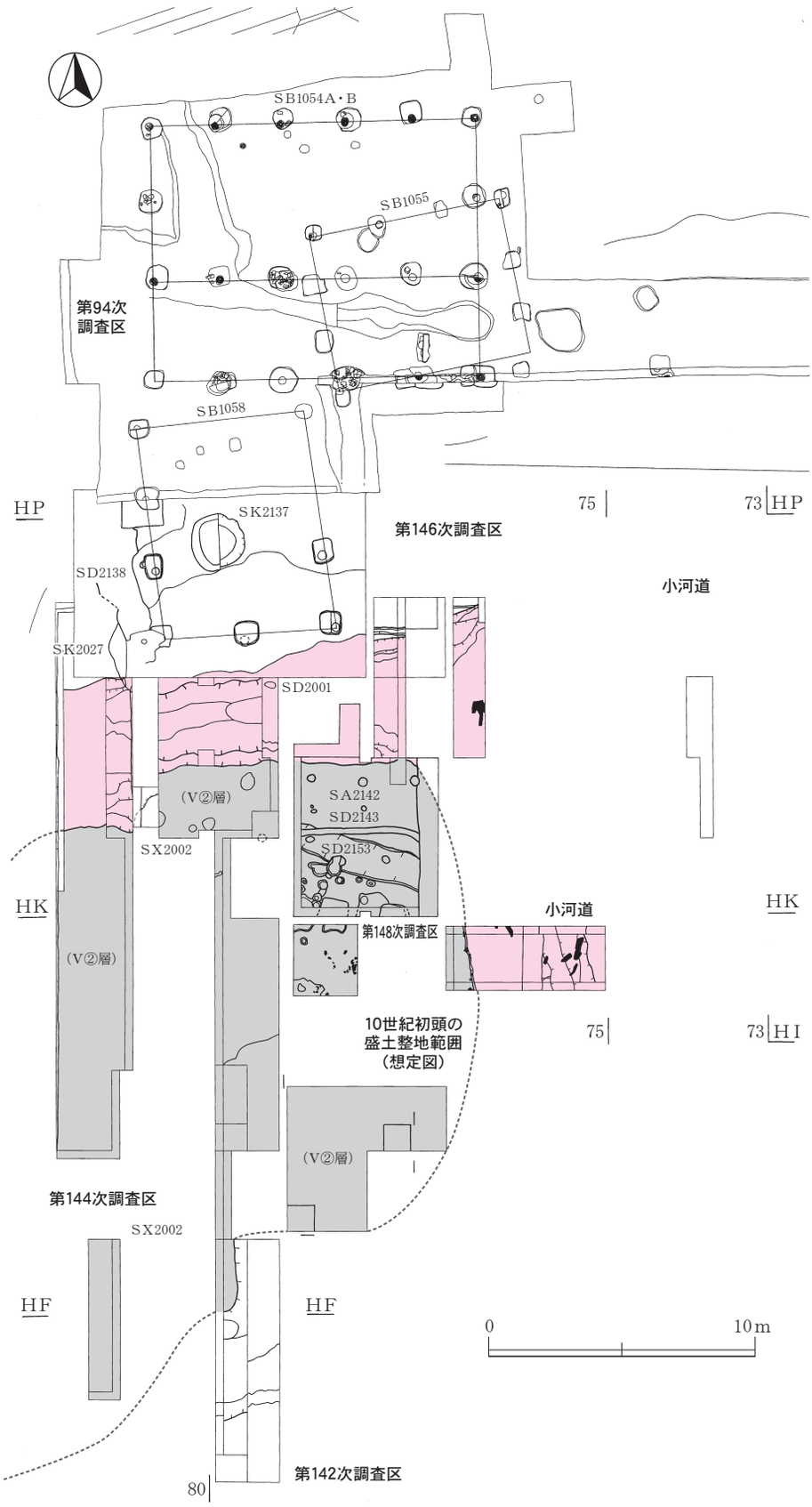
第１節　調査の目的と調査区

本調査は、第９次５年計画で示した「外柵地区（沖積地・微高地部）の調査」として実施した。調査区は大路地区の中央北側、外郭南門の外側東方60mに大路東建物として復元されたＳＢ1054掘立柱建物跡の南側に隣接する沖積地である。当該地区は、平成５年に実施された第94次調査において、南庇が付く桁行５間×梁行３間の東西棟掘立柱建物跡が確認され、大路西建物（ＳＢ1060掘立柱建物跡）とともに、外郭南門外側の長森丘陵裾部微高地に広がる官衙域として認識されている。そして平成23年に実施された第142次調査において、この掘立柱建物跡の南側で東西方向に延びるＳＤ2001溝跡と、その南側に広がるＳＸ2002盛土整地地業が確認され、平成25年に実施された第146次調査において、南北棟となる桁行３間×梁行２間のＳＢ1058掘立柱建物跡が明らかとなった。本年度は、これら建物跡と溝跡の南側を覆う10世紀初頭の嵩上げ造成土を除去し、創建期における地表面の詳細を確認することを目的とした（第３～５図）。また調査着手を数年間見送ってきた西側調査区についても、丘陵裾部から地形的に連続する沖積地の遺構分布状況を調査すべく、十字形に直交するトレンチを設定し調査した（第６・７図）。

調査区は旧水田で標高は33mほどである。調査を始めるにあたり、ＳＤ2001溝跡南側に隣接する４グリッドについて、ＳＸ2002盛土整地地業による整地層を取り除きながら、下位の創建期地表面（Ⅴ③層）を精査した。その結果、創建期地表面に複数の遺構が確認されたものの、造成土で一括埋め戻しされた一群については、造成に先行する附帯作業の痕跡と考えられた。また西側調査区では、旧水田耕作土を除去した直下に広く盛土造成された面が確認され、特に大路西建物よりのトレンチ東部で固く整地された部分では、鍛冶炉等が確認された。そして丘陵裾部と造成土との間に幅４m弱の大溝が確認され､その時期も10世紀初頭の構築と確認された。盛土整地地業の時期は未確認であるが、地形改変の状況としては東側調査区と類似し、南大路を挟んだ東西で同時期に造営された可能性も考えられる。この点については、来年度の調査で確認したい。

調査の経過は次のとおりである。

６月２日、調査開始。器材を搬入し、東側調査区をトラロープで囲み安全確保。３日、グリッド杭を設置し、第１トレンチの粗掘開始。過年度の確認層準と比較しながら進める。４日、10世紀初頭の造成土である、ＳＸ2002盛土整地地業の上面まで到達。直上の旧耕作土より渡来銭が出土。６日、トレンチの西・南側にサブトレンチを設定。造成土を掘り下げ、30㎝程度で下位の創建期地表面を確認。10日、トレンチ北端でＳＤ2001溝跡を確認。11日、西側調査区へグリッド杭を設置し、第２トレンチを設定。16日、現場での実測作業のため、水準測量を実施。17日、西側調査区で粗掘を開始した第２トレンチで、耕作土直下に造成土を確認。ＳＸ2141盛土整地地業とした。18日、第１トレンチで掘り下げが進む造成土下部で、完形の土師器坏が面的に出土する状況を確認。第２トレンチを直交させて東西に拡張。23日、第１トレンチで造成土下位と創建期地表面との境に完形土器が多く出土していることを確認。盛土造成に係る段階での祭祀か。24日、第１トレンチを南側に１グ



第３図　東側調査区　トレンチ・遺構配置略図

リッド（ＨＪ78）拡張。25日、第２トレンチＨＧ17グリッド付近では、ＳＸ2141盛土整地地業の上面が固く叩き締められており、鍛冶炉と思われる還元面を確認。焼土・炭化物のほか鉄滓・鍛造剝片も確認。30日、第１トレンチ北辺に確認されたＳＤ2001溝跡の南岸に沿う柱穴３基を確認。西接する第142次調査でも、同じ間隔を保つ１基の柱穴プランを確認しており、大溝南側を区画するＳＡ2142柵列とした。７月２日、第１トレンチの造成土下位、創建期地表面から掘り込まれたＳＤ2143溝跡が、盛土造成時に一括埋め戻しされている状況を確認。造成前の湧水処理のために掘削された排水溝か。第２トレンチＨＧ22グリッドのサブトレンチ内で、表土下50㎝から十和田ａ火山灰と思われる火山灰層を確認。10世紀初頭に係る溝跡か。３日、第２トレンチＨＧ22グリッドで確認された溝跡覆土の上面から灰釉陶器壺底部を確認。７日、第１トレンチＨＫライン付近で、創建期地表面から掘り込まれた複数の遺構を確認したが、整地前に埋め戻されている模様。第２トレンチで確認の造成土が、地形的に下がりながら南～西側にも広がる状況を確認。16日、第２トレンチＨＧ22グリッドで確認した溝跡をＳＤ2154溝跡とする。ＳＸ2141盛土整地地業の時期は未確認だが、東側調査区のＳＸ2002盛土整地地業に似る。18日、西側調査区におけるＳＤ2154溝跡の位置を概ね確認。長森丘陵裾部の微高地と沖積地部を盛土造成するＳＸ2141盛土整地地業との間に位置し、東側調査区と同じ遺構構成か。23日、第１トレンチ拡張部で、創建期地表面直上にかまどと思われる焼礫・炭化物と、焼土遺構、柱穴などを確認。25日、秋田大学による教員免許更新講習の一環として、20名の教員が渡部育子教授とともに来跡。教材化について現場を実見しながら実習。28日、第１トレンチの精査終了箇所から埋め戻し開始。30日、慶應大学文学部、中島圭一教授以下ゼミ生16名による巡検。30日、秋田大学渡部育子教授ゼミによる巡検。午後、秋田大学神居隆教授、大学院生とともに見学。秋田大学名誉教授肥田登氏、外柵北辺に係る地下水調査指導。８月７日、払田柵跡調査を主題として、秋田県広報番組「あきたびじょんプラス」収録。15日、調査区を現状復原し、器材撤収。調査の全工程を終了した。

第２節　検出遺構と遺物

１　基本層序

過年度実施した第142・144・146次調査地区と同様の基本土層となる。トレンチ位置や堆積土中の水分等により若干の変移はあるが、第１トレンチ西壁における層相は次のとおりである。西側調査区についても、概ね東側調査区と同様の層相・層準であることが確認できたため緩用した。

第Ⅰ層　　10YR ３／３ 暗褐色シルト、水田耕作土、客土

第Ⅱ層　　10YR ３／３ 暗褐色シルト、鉄分多量含む、グライ化大、鋤床層、客土

第Ⅲ層　　10YR ３／４ 暗褐色シルト、炭中粒少量含む、植物片多量含む、近世耕作土か

第Ⅳ層　　7.5Y ５／１ 灰色砂質粘土、洪水堆積物

第Ⅴ①層　　Ⅴ②層（整地層）の二次堆積した層

第Ⅴ②層　　7.5YR2.1 黒色シルト、地山大～中ブロック多量含む、炭大粒多量含む、焼土中粒多量含む、土器片多量含む、ＳＸ2002盛土整地地業による造成土

第Ⅴ③層　　2.5Y ２／１ 黒色粗粒砂、創建期の旧表土

第Ⅴ④層　　5Ｙ 3／2 オリーブ褐色砂、植物片多量含む、漸移層か
第Ⅵ層　　2.5GY 5／1 オリーブ灰色粗粒砂、砕屑物多く含む地山土

2　検出遺構と遺物

東側調査区の第１トレンチでは、ＳＤ2001溝跡・ＳＸ2002盛土整地地業のほか、柵列１条・溝跡２条・土坑３基・柱穴様ピット７基が新たに確認された。そして南側へ拡張したＨＪ78グリッドでは、かまどの可能性がある焼土などが検出された。また西側調査区の第２トレンチでは、盛土整地地業１か所・溝跡１条が確認された。丘陵裾部の創建期地表面上に複数の柱穴プラン、ＳＸ2141盛土整地地業上に鍛冶炉・柱穴などが検出されたが、精査には至っていない。

（１）第１トレンチの遺構と遺物

ＳＤ2001溝跡及びＳＸ2002盛土整地地業については、昨年度までに概略を報告済みであるが、第148次調査における新たな知見等について改めて記載する。

ＳＤ2001溝跡（第３～５図）

第１トレンチのＨＬ77・78グリッドにおいて南岸を検出し、トレンチ西側を一部掘り下げ断面観察を行った。ＳＸ2002盛土整地地業により南岸を約30㎝嵩上げ盛土し、北岸と高さを合わせていることが、昨年度までに確認されている。十和田ａ火山灰を覆土の下位に含み、10世紀初頭に構築された後、降灰後そう時間を経ずに開口した状態のまま洪水堆積物（Ⅳ層）で覆われている。

遺物は須恵器坏・壺・甕、内黒土師器坏、土師器坏・甕、加工木が出土した。

ＳＸ2002盛土整地地業（第３～５図）

第１トレンチはＳＤ2001溝跡以南、ほぼ全域がＳＸ2002盛土整地地業による造成を受けており、ＨＫ・Ｌ77・78グリッドでは造成前の旧地表面の詳細を確認するために面的に掘り下げた。過年度の調査により北側のＳＤ2001溝跡及び造成範囲外となる南側の沖積地には、火山灰が流れ込み二次堆積した状況が確認されており、また造成土中に９世紀初頭～ 10世紀初頭の遺物を包含することから、ＳＤ2001溝跡とともに、10世紀初頭に構築されたものと考えられている。今回の調査で造成土を掘り下げた結果、造成土中～旧表土から火山灰は検出されず、過年度の調査成果と調和的である。

ＳＸ2002盛土整地地業の上面から、ＳＤ2001溝跡の南岸に沿うようにＳＡ2142柵列が検出された。また下位に確認されたＳＤ2143・2153溝跡は、本造成土により一括埋め戻しされており、本地業に附帯する土木作業によるものと考えられる。詳細は各項で説明する。

本遺構からの出土遺物は、第148次調査第１トレンチからの出土遺物の大半を占める。造成土中には多量の遺物が包含されているが、特に下部からは完形土師器坏等が多く出土し、祭祀に伴い埋置されたものと考えられる。遺物は縄文土器、削器、須恵器蓋・双耳坏・高台付坏・坏・壺・甕、刻文土器、黒色土器高台付坏、内黒土師器蓋・高台付坏・坏、土師器蓋・皿・坏・甕・鍋・非ロクロ成形甕、平瓦、塼？、鉄滓、焼粘土塊、焼礫、箸・燃えさし・加工木、種子類、近世陶磁器が出土した。

ＳＡ2142柵列（第３～５図）

ＳＤ2001溝跡の南側に沿う第１トレンチ北辺、ＨＬ77･78グリッドで、ＳＸ2002盛土整地地業上に、３基（Ｐ１～３）の柱穴列として確認された。西接する第142次調査区では、この柱穴列に連なるもう１基の柱穴プラン（Ｐ０）が確認されており、最低でも４基の柱穴列で構成される３間規模の柵列

と考えられる。Ｐ１は30㎝の円形で深さ30㎝、Ｐ２は30㎝の円形で深さ44㎝、Ｐ３は長径34㎝の略円形で深さ60㎝である。３基とも造成土上面の撹乱層（Ｖ①層）の下から確認されたため、本来の深さは若干失われていると思われる。Ｐ２を半截したところ、柱並びの方向と直交する板材が検出され、北秋田市胡桃館遺跡で確認された、板状の柱材を組み合わせる板塀様の構造が想定される。柱間隔はＰ０～１間が2.45m、Ｐ１～２間が1.92m、Ｐ２～３間が1.94mとなる。

遺物は須恵器坏、土師器坏・甕が出土した。

ＳＤ2143溝跡（第４・５図）

ＳＸ2002盛土整地地業より古く、下位の創建期の地表面（Ｖ③層）上、ＨＫ・Ｌ77･78グリッドをほぼ東西に横切るようにＳＤ2153溝跡とともに重複して確認され､本溝跡が新しい。開口幅20～30㎝、最大深さ18㎝である。ＳＸ2002盛土整地地業の造成土により一括埋め戻しされている。底面レベルの観察により、東方を南流する小河道に開口すると考えられる。

本遺構内から須恵器高台付坏・坏、土師器坏・甕が出土したが、ＳＸ2002盛土整地地業に伴うものと考えられる。

ＳＤ2153溝跡（第４・５図）

ＳＸ2002盛土整地地業より古く、下位の創建期の地表面（Ｖ③層）上、ＨＫ・Ｌ77･78グリッドを西北西から東南東方向へ横切るようにＳＤ2143溝跡とともに重複して確認され、本溝跡が古い。開口幅0.9～1.4m、最大深さ19㎝である。底面にＳＫＰ2149柱穴を伴い、ＳＸ2002盛土整地地業の造成土により一括埋め戻しされている。底面レベルの観察により、東方を南流する小河道に開口するものと考えられる。

本遺構内から遺物は出土したが、前記したようにＳＸ2002盛土整地地業に伴うものと考えられる。

ＳＫ2144土坑（第４・５図）

ＨＪ・Ｋ77グリッド、第１トレンチの南壁断面で確認された。直径約1.2mの楕円形と思われ、深さは45㎝以上である。創建期地表面に構築された土坑で覆土は一括埋め戻しである。上面を覆うＳＸ2002盛土整地地業による上からの撹乱によりプランが不明瞭で、断面精査の段階で確認された。ＳＸ2002盛土整地地業より古く、ＳＫ2145土坑と重複して新しい。

遺物は土師器坏が出土した。

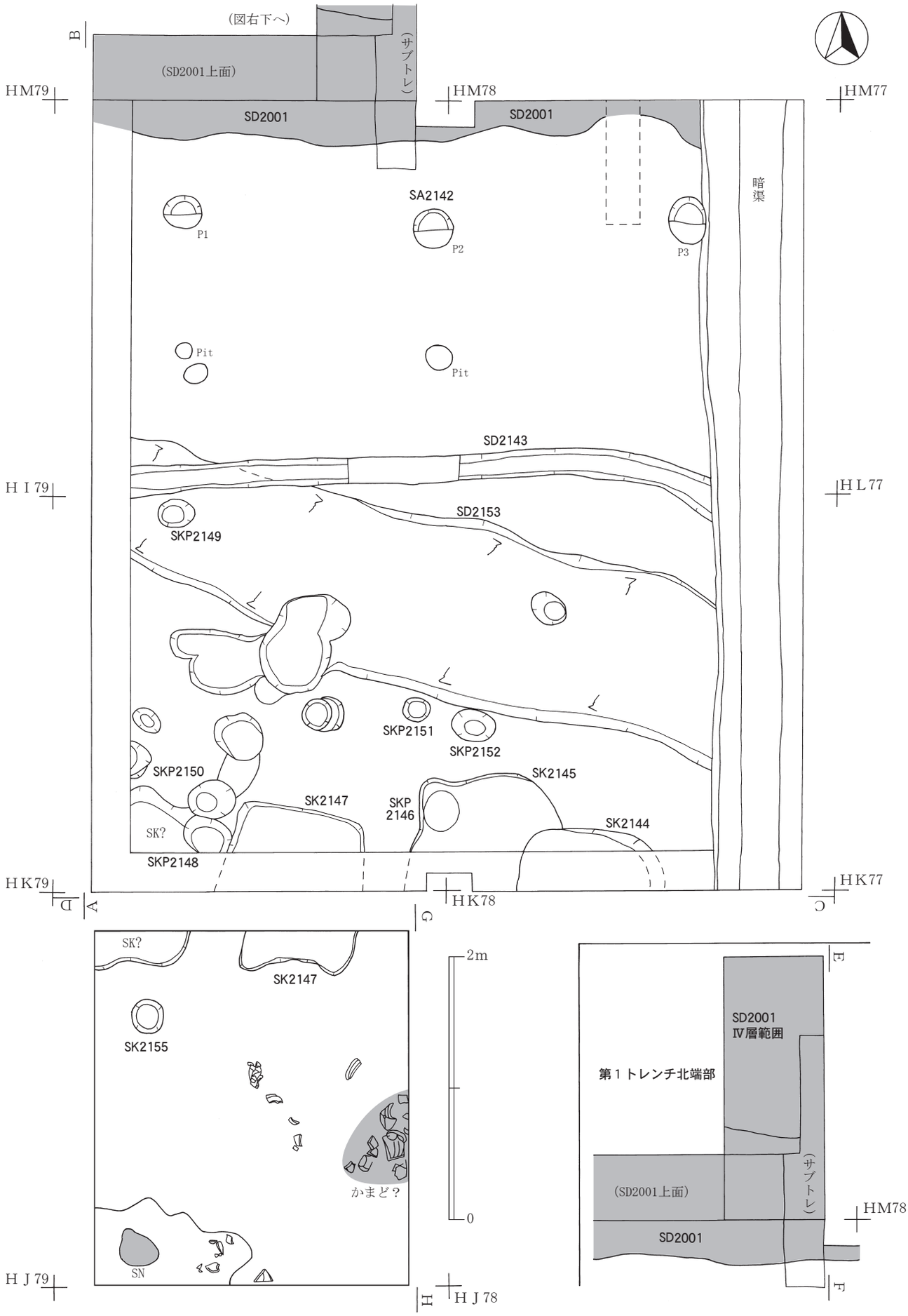
ＳＫ2145土坑（第４・５図）

ＨＪ・Ｋ77グリッド、第１トレンチの南壁断面で一部が確認された。確認直径1.3m以上の楕円形と思われ、深さは45㎝以上である。創建期地表面に構築された土坑で覆土は一括埋め戻しである。上面を覆うＳＸ2002盛土整地地業による上からの撹乱によりプランが不明瞭で、断面精査の段階で確認された。ＳＸ2002盛土整地地業より古く、ＳＫＰ2146柱穴と重複して新しく、ＳＫ2144土坑と重複して古い。

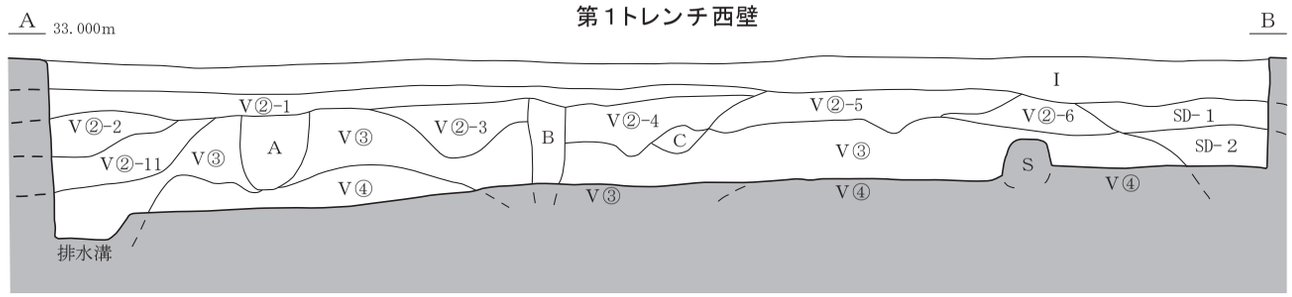
遺物は土師器坏が出土した。

ＳＫ2147土坑（第４・５図）

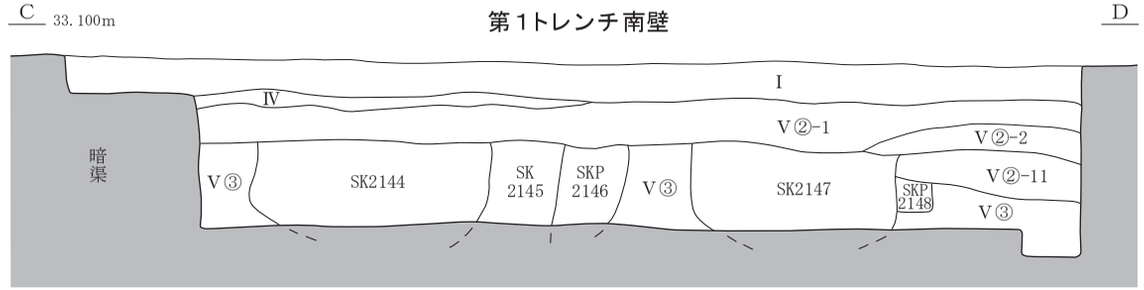
ＨＪ・Ｋ78グリッド、第１トレンチの南壁断面及びＨＪ78グリッドで確認された。長軸約1.3m、短軸約１.1mの不整形で、深さは46㎝以上である。創建期地表面に構築された土坑で覆土は一括埋め戻しである。上面を覆うＳＸ2002盛土整地地業による上からの撹乱によりプランが不明瞭で、断面



第４図　第１トレンチ　平面図



第１トレンチ西壁
Ⅰ　10YR3/3 暗褐色シルト 水田耕作土
Ⅱ　10YR3/3 暗褐色シルト 鋤床層 Ⅰ層下に部分的に存在 Ⅰ層下位が直接ＳＸ2002盛土整地地業となる場合には少ない
Ｖ②-1　7.5YR2/1 黒色シルト 地山大～中ブロック多量含む 炭大粒多量含む 焼土中粒多量含む 土器片多量含む ＳＸ2002盛土整地地業
Ｖ②-2　2.5Y3/1 黒褐色粘土 地山小ブロック多量含む 炭大粒中量含む 焼土中粒少量含む 土器片中量含む ＳＸ2002盛土整地地業
Ｖ②-3　2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト 地山中粒中量含む 炭小粒多量含む 焼土岱粒中量含む ＳＸ2002盛土整地地業
Ｖ②-4　10YR3/2 黒褐色シルト 地山大粒多量含む 炭中粒中量含む ＳＤ2143･2153、ＳＫＰ2149を埋める ＳＸ2002盛土整地地業 粘性大
Ｖ②-5　10YR2/2 黒褐色シルト 炭小粒多量含む ＳＸ2002盛土整地地業
Ｖ②-6　10YR2/2 黒褐色シルト 地山中粒中量含む 炭大粒少量含む 焼土大粒多量含む ＳＤ2001の南岸を固めた整地か ＳＸ2002盛土整地地業
Ｖ②-11　2.5Y3/2 黒褐色粘質シルト 地山大粒多量含む 炭大粒中量含む 焼土中粒中量含む 土坑覆土か
Ｖ③　2.5Y2/1 黒色粗粒砂 創建期表土
Ｖ④　5Y3/2 オリーブ褐色砂 植物片多量含む 漸移層か
Ａ　10YR3/2 黒褐色シルト 地山中粒多量含む 炭大粒少量含む 柱穴様ピットか
Ｂ　10YR2/2 黒褐色シルト 地山中粒多量含む 炭中粒多量含む 柱穴様ピットか
Ｃ　10YR2/2 黒褐色シルト 地山小粒多量含む 炭中粒少量含む 本来はＶ②－４層の一部（ブロック）か
SD-1　10YR2/3 黒褐色シルト 地山大粒中量含む 炭中～小粒中量含む
SD-2　10YR2/2 黒褐色シルト 炭小粒中量含む 下位に火山灰小ブロック含む



第１トレンチ南壁
Ⅳ　2.5Y5/2 暗黄褐色砂質粘土 洪水堆積物
Ｖ②-１　10YR3/2 黒褐色粘質シルト 地山中粒多量含む 炭中粒多量含む 焼土大粒中量含む （Ｖ②c）
Ｖ②-２　5Y3/1 オリーブ褐色粘質シルト 地山中粒多量含む 炭大粒多量含む ラミナ状 （Ｖ②d）
Ｖ②-11　5Y4/2 オリーブ褐色粘質シルト 地山中粒多量含む 炭大粒少量含む ラミナ状 （Ｖ②e） 土坑覆土か
Ｖ③　7.5YR1.7/1 黒色泥炭質シルト 鉄分含む

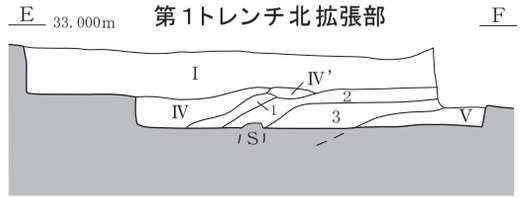
SK2144　2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト 地山大粒～中ブロック多量含む 炭大粒多量含む 焼土中粒中量含む 白色粘土中ブロック含む

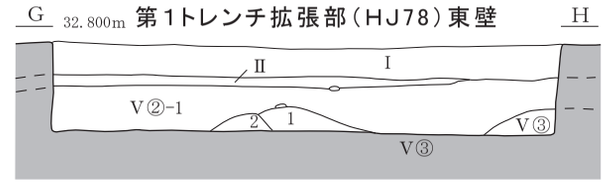
SK2145　2.5Y2/1 黒色シルト 地山中粒多量含む 炭中粒中量含む

SKP2146　10YR2/1 黒色シルト 地山大粒多量含む 炭中粒少量含む ラミナ状（裏込め土か）

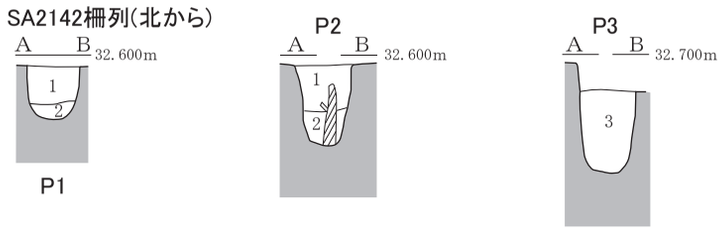
SK2147　2.5Y3/2 黒褐色シルト 地山大粒多量含む 炭大粒少量含む

SKP2148　5Y3/2　オリーブ褐色シルト 地山大粒（Ｖ④層）多量含む





第１トレンチ拡張部（HJ78）東壁
Ⅰ　10YR3/3 暗褐色シルト 水田耕作土
Ⅱ　10YR3/4 暗褐色シルト 鋤床層 鉄分多量含む
Ｖ②-1　10YR3/1 黒褐色シルト 地山中～大粒多量含む 炭大粒多量含む 焼土中粒中量含む ＳＸ2002盛土整地地業 鉄分多量含む
Ｖ③　10YR2/1 黒色粘質シルト 地山中粒中量含む 創建期表土 鉄分多量含む
1　10YR3/1 黒褐色シルト 地山中粒中量含む 炭大粒多量含む 焼土大粒多量含む かまど内堆積土か
2　7.5YR5/4 にぶい褐色粘質シルト 地山大粒多量含む 炭小粒多量含む 焼土小粒多量含む かまど袖か



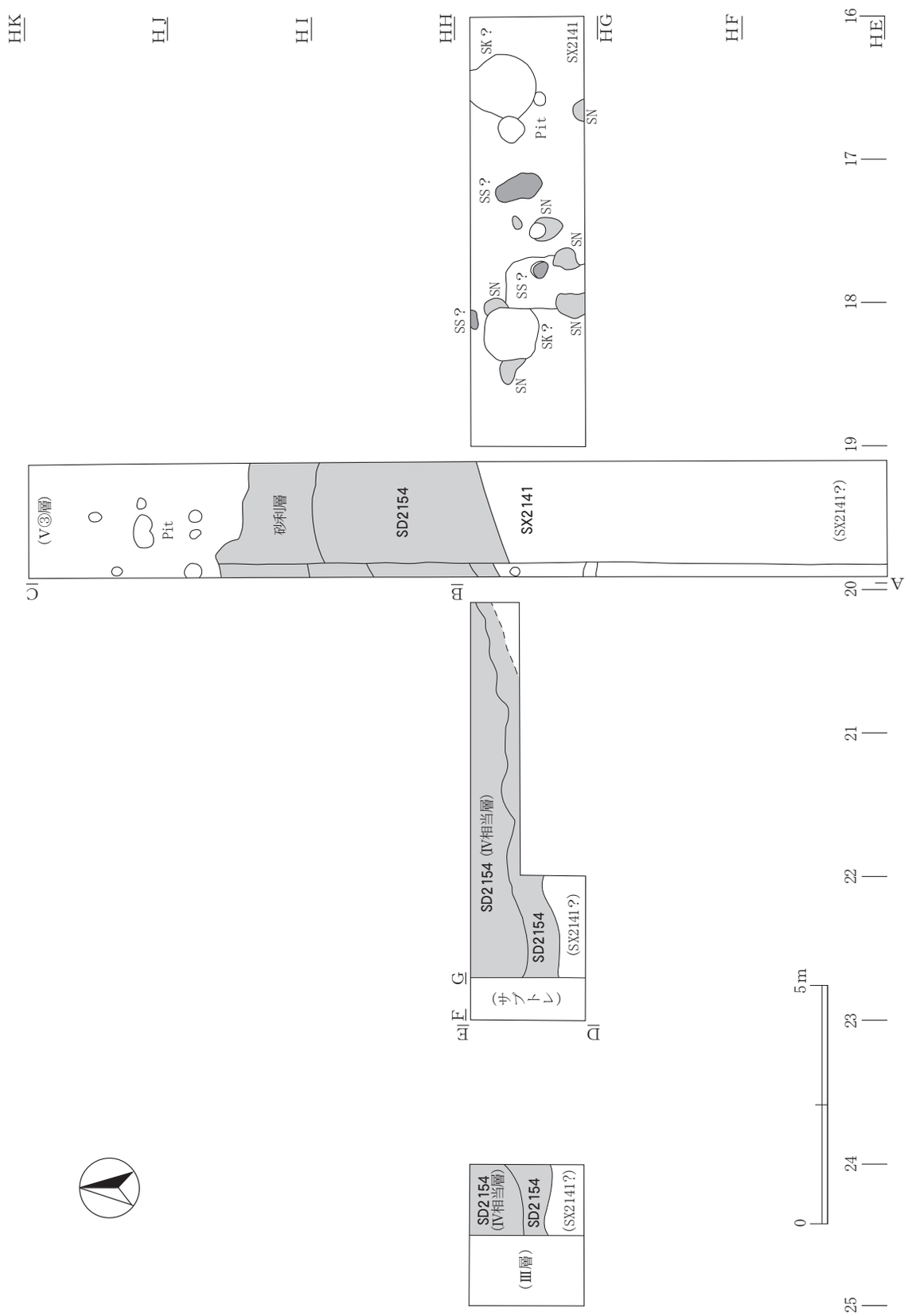
第１トレンチ北拡張部
Ⅰ　10YR3/4 暗褐色シルト 水田耕作土
Ⅳ　7.5Y5/1 灰色砂質粘土 洪水堆積物
Ⅳ'　7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト Ⅳ層と1層との混合層
Ⅴ　10YR2/1 黒色砂質シルト 上面から撹乱を受けたＶ③層 鉄分多量含む

1　5YR3/1 オリーブ黒色シルト 炭小粒少量含む Ⅳ層大粒少量含む
2　10YR3/1 黒褐色シルト 地山大～中粒多量含む 炭中粒中量含む
3　10YR2/2 黒褐色シルト 地山小粒中量含む 炭中粒中量含む 火山灰少量含む

SA2142
1　5Y3/2 オリーブ褐色シルト 地山中粒多量含む 炭中粒多量含む Ｖ②層由来の覆土
2　2.5Y2/1 黒色砂 地山中粒少量含む Ｖ③層にＶ②層が混入した覆土
3　5Y3/2 オリーブ褐色シルト 地山大粒多量含む 1層より地山粒大きく粘性大きい

0　2m

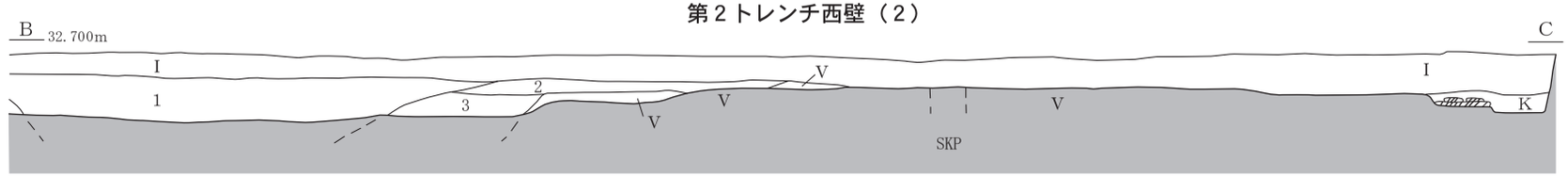
第５図　第１トレンチ　断面図



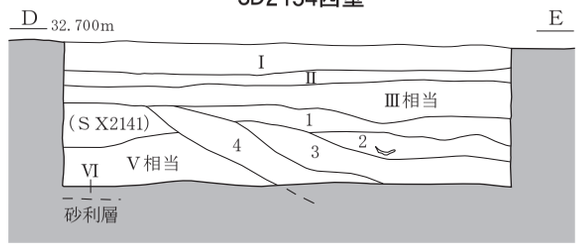
第６図　第２トレンチ　平面図

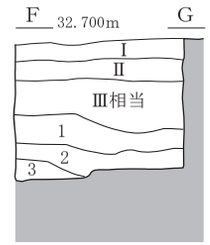
第２トレンチ西壁（１）

第２トレンチ西壁（２）



SD2154西壁





第２トレンチ西壁
Ⅰ　10YR3/2 黒褐色シルト 細礫中量含む 水田耕作土
Ⅲ　10YR3/2 黒褐色シルト 地山中粒少量含む 炭中粒少量含む 旧水田耕作土か
Ⅴ　10YR2/2 黒褐色砂質シルト 細礫中量含む
1　10YR3/3 暗褐色シルト 炭小粒多量含む 鉄分多量含む ＳＤ2154
2　10YR4/4 褐色粗粒砂 焼土中粒多量含む 築地塀崩壊土起源か ＳＤ2154
3　10YR3/1 黒褐色シルト 炭大粒中量含む 焼土中粒少量含む ＳＤ2154
4　10YR2/2 黒褐色シルト 地山小粒少量含む 炭小粒少量含む 焼土小粒少量含む ＳＤ2154
11　10YR3/1 黒褐色シルト 地山大粒～小ブロック多量含む 炭大粒中量含む 焼土中粒中量含む ラミナ状 遺物細片多量含む ＳＸ2142
12　10YR2/1 黒色シルト 地山小粒多量含む 炭中粒少量含む 遺物細片多量含む ＳＸ2142
13　10YR3/1 黒褐色シルト 地山中粒中量含む 炭中粒少量含む 焼土大粒多量含む ラミナ状 11層に似る 遺物細片多量含む ＳＸ2142
14　10YR3/1 黒褐色シルト 地山中粒多量含む 炭中粒多量含む 焼土と粒多量含む 遺物細片多量含む ＳＸ2142
15　10YR4/1 褐灰色シルト 炭中粒中量含む 焼土中粒少量含む 白色粘土ラミナ状に挟む 遺物細片多量含む ＳＸ2142
16　10YR3/3 暗褐色シルト 細礫中量含む 炭中粒多量含む 焼土岱粒中量含む 遺物細片多量含む ＳＸ2142

SD2154
Ⅰ　10YR3/2 黒褐色シルト 細礫中量含む 水田耕作土
Ⅱ　10YR2/2 黒褐色シルト 鋤床層 鉄分中量含む 硬くしまる
Ⅲ相当　10YR3/4 暗褐色シルト 炭中粒少量含む 植物片多量含む
1　2.5Y2/1 黒褐色砂質シルト 粗粒砂～細礫がラミナ状に入る 炭大粒少量含む 洪水堆積物か 第１トレンチⅣ層に相当か
2　10YR2/2 黒褐色シルト 炭大粒多量含む 植物片多量含む 完形土器入る 1層堆積前の開口面
3　10YR3/2 黒褐色砂質シルト 炭大粒中量含む 4層との境界に白色火山灰入る
4　10YR2/2 黒褐色シルト 炭大粒中量含む ＳＸ2142の二次堆積か
（SX2141）　7.5YR2/2 黒褐色シルト 炭大粒少量含む 遺物含む （仮Ⅳ層）
Ⅴ相当　10YR2/1 黒色砂質シルト 細～小礫中量含む 第１トレンチのⅤ③層に相当か
Ⅵ　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂礫 地山か

0　2m

第７図　第２トレンチ　断面図

精査の段階で確認された。南半のＨＪ78グリッドでは撹乱が少ない。ＳＸ2002盛土整地地業より古く、ＳＫＰ2148柱穴と重複して新しい。

遺物は須恵器坏、土師器坏・甕が出土した。

ＳＫＰ2146柱穴（第４・５図）

ＨＫ78グリッドで確認された。直径約40㎝以上の略円形～不整形と思われ、柱痕跡付近の深さは26㎝である。創建期地表面に構築された柱穴で覆土は一括埋め戻しである。上面を覆うＳＸ2002盛土整地地業による上からの撹乱によりプランが不明瞭で、ＳＫ2145土坑と同時に確認された。ＳＸ2002盛土整地地業より古く、ＳＫ2145土坑と重複して古い。

遺物は内黒土師器坏、土師器坏・甕・非ロクロ成形壺が出土した。

ＳＫＰ2148柱穴（第４・５図）

ＨＫ78グリッドで確認された。直径約36㎝の略円形、深さは31㎝で、創建期地表面に構築された柱穴である。ＳＫ2147土坑と同時に断面精査の段階で確認された。ＳＸ2002盛土整地地業より古く、ＳＫ2147土坑と重複して古い。

遺物は出土しなかった。

ＳＫＰ2149柱穴（第４図）

ＨＫ78グリッド、ＳＤ2153溝跡の底面で確認された。直径約30㎝の略円形、深さは26㎝である。上面を覆うＳＸ2002盛土整地地業の覆土により覆われ、ＳＤ2153溝跡と同時に確認された。ＳＸ2002盛土整地地業より古く、ＳＤ2153溝跡と重複するが、新旧は不明である。

遺物は須恵器坏、土師器坏が出土した。

ＳＫＰ2150柱穴（第４図）

ＨＫ78グリッドで確認された。直径約35㎝の略円形、深さは34㎝で、創建期地表面に構築された柱穴である。上面を覆うＳＸ2002盛土整地地業による上からの撹乱によりプランが不明瞭で、ＳＫ2147土坑と同時に確認された。ＳＸ2002盛土整地地業より古い。

遺物は土師器坏が出土した。

ＳＫＰ2151柱穴（第４図）

ＨＫ78グリッドで確認された。直径約22㎝の略円形、深さは16㎝で、創建期地表面に構築された柱穴である。上面を覆うＳＸ2002盛土整地地業による上からの撹乱によりプランが不明瞭で、ＳＫ2145土坑と同時に確認された。ＳＸ2002盛土整地地業より古い。

遺物は土師器甕が出土した。

ＳＫＰ2152柱穴（第４図）

ＨＫ77グリッドで確認された。直径約34㎝の略円形、深さは17㎝で、創建期地表面に構築された柱穴である。上面を覆うＳＸ2002盛土整地地業による上からの撹乱によりプランが不明瞭で、ＳＫ2145土坑と同時に確認された。ＳＸ2002盛土整地地業より古い。

遺物は土師器甕が出土した。

ＳＫＰ2155柱穴（第４図）

ＨＪ78グリッドで確認された。直径約25㎝の略円形、深さは17㎝で、創建期地表面に構築された柱穴である。ＳＸ2002盛土整地地業の下位に確認された、古い柱穴である。

遺物は須恵器壺・甕、土師器甕が出土した。

（２）第２トレンチの遺構と遺物

ＳＸ2141盛土整地地業（第６・７図）

第148次調査西側調査区沖積地の大半を覆う盛土整地地業として、ＨＥ～Ｉ16～24グリッドの範囲から、第２トレンチ表土（水田耕作土）の直下で確認された。南北方向の西壁にサブトレンチを設定したところ、長森丘陵裾部から丘陵南側を南西流する河川氾濫原に向かい下がっていく原地形に対し、裾部の創建期地表面（Ｖ③層に相当）と高低差無く補整するように盛土造成された状況であった。また外郭南門付近から続く微高地が一段下がるＨＦ19グリッド以南及びＨＧ21グリッド以西においても、旧耕作土と思われるⅢ層を挟むものの、その下位に造成土が広がっている。この点については今後の調査で当該層準を精査し、ＳＸ2141盛土整地地業としてのプライマリーな造成土か、一段低い面への二次堆積かを検証する必要がある。トレンチ東側のＨＧ16～18グリッド付近は、特に固く叩き締められており、鍛冶炉と思われる還元面や焼土の広がりが複数確認された。

サブトレンチ及び造成土上面から、造成時に埋置されたと考えられる完形土師器坏が複数確認された。概ね10世紀初頭までの遺物と考えられることから、該期に係る造成と思われるが詳細は不明であり、今後精査を進めたい。

遺物は石鏃、剥片、須恵器坏・壺・甕、内黒土師器高台付坏・坏、土師器高台付皿・皿・坏・甕、塼、フイゴ羽口、鍛造剥片、鉄滓、加工木が出土した。

ＳＤ2154溝跡（第６・７図）

丘陵裾部微高地の南辺に沿うように、ＨＧ～Ｉ19～24グリッドで確認された。つまり本遺構の北側は丘陵裾部に広がる創建期の地表面（Ｖ③層）、南側はＳＸ2141盛土整地地業となっており、南側が裾部とほぼ同じ標高となるように盛土造成され、補整された状況を呈している。一部にサブトレンチを入れたのみで詳細は不明であるが、確認面での開口幅は3.5m程度、深さは40㎝以上の規模を有する。またＨＧ22グリッドの断面観察により覆土下位に十和田ａ火山灰を含むことから、10世紀初頭に構築されたものと考えられる。この点で大路東建物南側における、丘陵裾部微高地と造成地との間に構築されたＳＤ2001溝跡と類似するが詳細は不明であり、今後精査を進めたい。

遺物は須恵器坏・壺・甕、黒色土器坏、内黒土師器坏、土師器坏・甕・鍋が出土した。

（３）遺構外出土遺物（第15図）

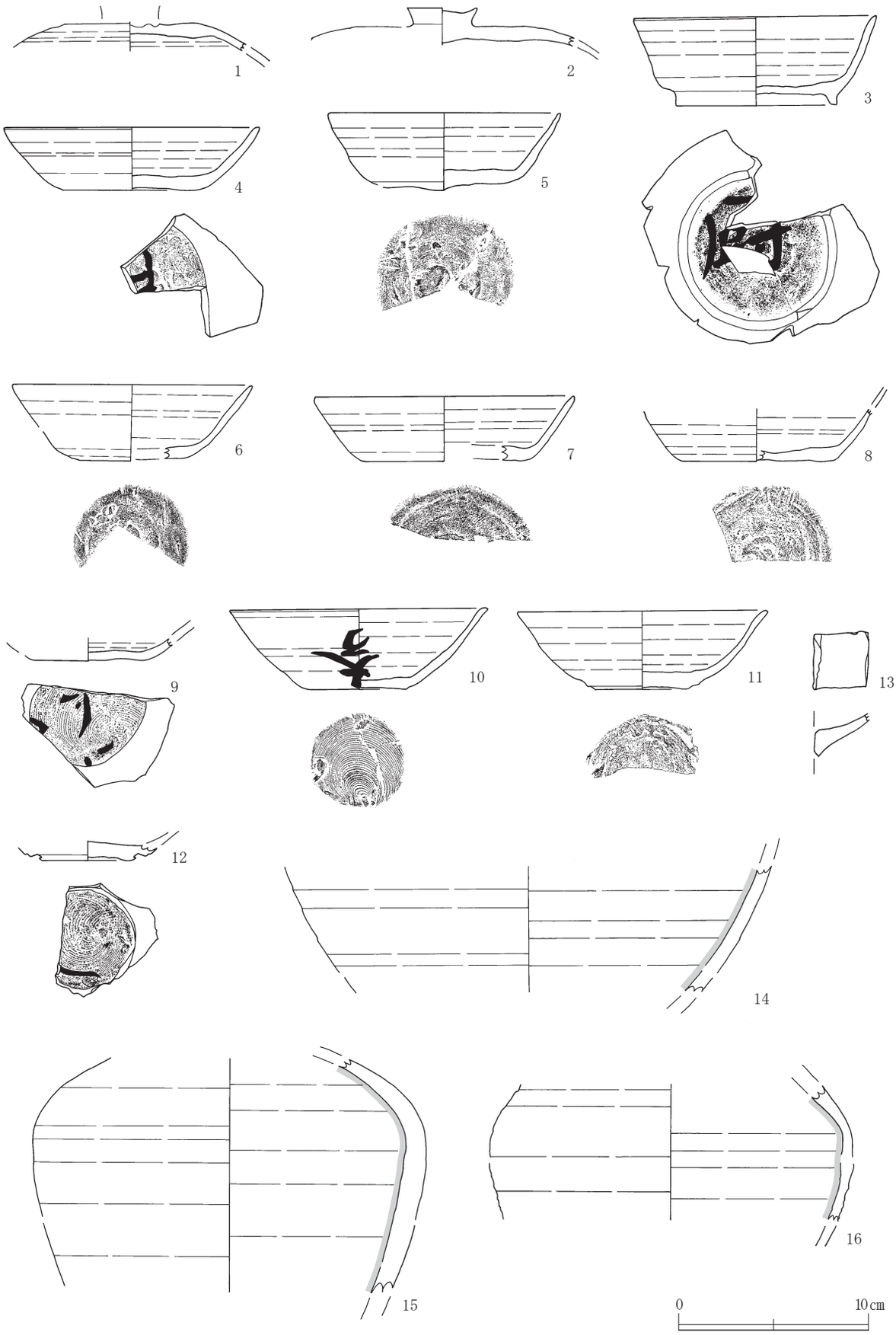
第１トレンチからの出土遺物としては、縄文土器、須恵器高台付坏・坏・壺・甕、黒色土器坏、内黒土師器高台付坏・坏、土師器坏・甕・鍋、平瓦、焼礫、箸・曲物・燃えさし・加工木、種子類、銭貨、近世陶磁器が出土した。第２トレンチからの出土遺物としては、縄文土器、石鎗、剥片、灰釉陶器壺・瓶・椀・皿、須恵器蓋・坏・壺・甕、黒色土器高台付坏、内黒土師器高台付坏・坏、土師器坏・甕、二面硯、箸・燃えさし・加工木、鉄製品、鉄滓、骨、種子類、青磁皿、銭貨、近世陶磁器が出土した。

挿図No.	出土位置		層位等	種別	器種	外面調整	内面調整	底面調整	外面色調	口径	底径	器高	備考
第8図 1	SX2002	(HL78)	V②層	須恵器	蓋	ロクロ	ロクロ	−	黄灰色	−	−	−	
第8図 2	SX2002	(HJ78)	V②層	須恵器	蓋	ロクロ	ロクロ	−	灰白色	−	−	−	
第8図 3	SX2002	(HJ78)	V②層	須恵器	高台付坏	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り	灰白色	(12,8)	(8,4)	4,8	底部墨書「厨」
第8図 4	SX2002	(HK78)	V②層	須恵器	坏	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り	灰色	(13,4)	(7,4)	3,3	底部墨書「□」
第8図 5	SX2002	(HK78)	V層	須恵器	坏	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り	灰白色	(12,2)	(6,4)	4,1	
第8図 6	SX2002	(HL78)	V②層	須恵器	坏	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り	褐灰色	(12,6)	(5,6)	4,1	
第8図 7	SX2002	(HJ78)	V層上面	須恵器	坏	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り	灰白色	(13,6)	(9,0)	3,4	
第8図 8	SX2002	(HK78)	V②層	須恵器	坏	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り	灰色	−	(7,8)	−	
第8図 9	SX2002	(HK78)	V②層	須恵器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	灰色	−	(6,2)	−	底部墨書「□」
第8図 10	SX2002	(HK77)	RP21	須恵器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	灰白色	(13,2)	5,0	4,2	体部墨書「大万」
第8図 11	SX2002	(HK78)	V②層	須恵器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	灰黄褐色	(13,2)	(5,2)	4,1	
第8図 12	SX2002	(HL77)	V②層	須恵器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	灰白色	−	(5,0)	−	底部墨書「□」
第8図 13	SX2002	(HL78)	V層上面	須恵器	把手付坏	−	−	−	にぶい黄橙色	−	−	−	把手
第8図 14	SX2002	(HK78)	サブトレV層	須恵器	壺？	ロクロ	ロクロ	−	灰色	−	−	−	内面墨痕有り
第8図 15	SX2002	(HK78)	RP32	須恵器	壺	ロクロ	ロクロ	−	灰色	−	−	−	転用硯（内面）
第8図 16	SX2002	(HK77)	RP12	須恵器	壺	ロクロ	ロクロ	−	灰色	−	−	−	転用硯（内面）

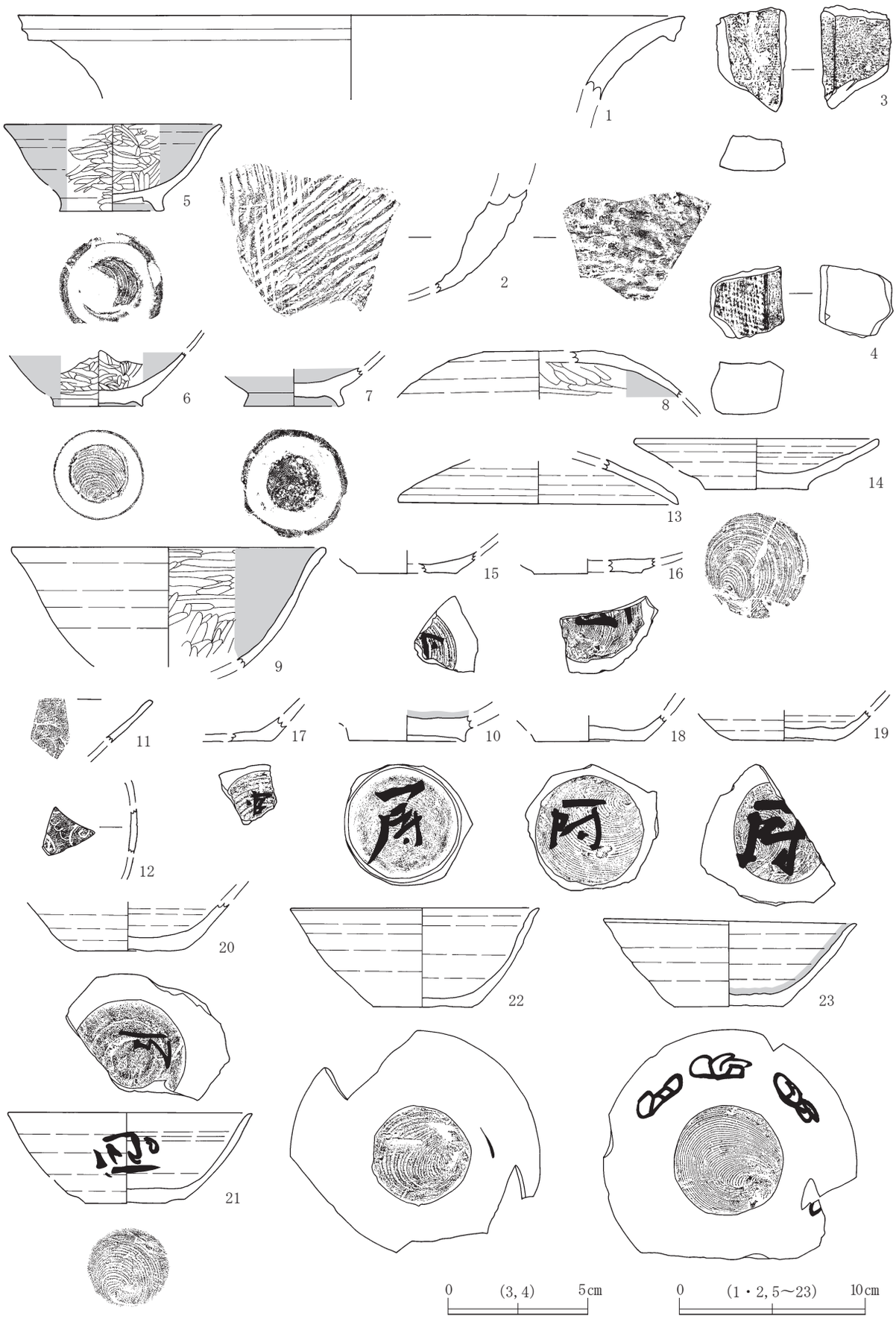
挿図No.	出土位置		層位等	種別	器種	外面調整	内面調整	底面調整	外面色調	口径	底径	器高	備考
第9図 1	SX2002	(HJ78)	RP4	須恵器	甕	ロクロ	ロクロ	−	灰色	(35,4)	−	−	
第9図 2	SX2002	(HK78)	V②層	須恵器	甕	平行タタキ	−	−	灰白色	−	−	−	
第9図 3	SX2002	(HK77)	V②層	瓦	平瓦	ヘラケズリ	布目	−	灰色	−	−	−	
第9図 4	SX2002	(HJ78)	V②層	瓦	平瓦	ナデ？	布目	−	にぶい黄橙色	−	−	−	
第9図 5	SX2002	(HK78)	V②層	黒色土器	高台付坏	ロクロ→ミガキ	ロクロ→ミガキ	回転糸切り	黒色	(11,6)	(5,5)	4,6	
第9図 6	SX2002	(HL78)	V②層	黒色土器	高台付坏	ロクロ→ミガキ	ロクロ→ミガキ	回転糸切り	黒色	−	4.8	−	
第9図 7	SX2002	(HL77)	V②層	黒色土器	高台付坏	ロクロ→ミガキ	ロクロ→ミガキ	回転糸切り	黒色	−	5,4	−	
第9図 8	SX2002	(HK78)	サブトレV層	内黒土師器	蓋	ロクロ	ロクロ→ミガキ	−	にぶい褐色	−	−	−	
第9図 9	SX2002	(HJ78)	RP13	内黒土師器	坏	ロクロ	ロクロ→ミガキ	−	灰黄褐色	(16,8)	−	−	
第9図 10	SX2002	(HK78)	暗渠下V②層	内黒土師器	高台付坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい黄橙色	−	6,2	−	底部墨書「厨」
第9図 11	SX2002	(HK78)	サブトレV層	刻文土器	坏？	ロクロ→刻書	ロクロ→ミガキ	−	褐灰色	−	−	−	体部刻文（花模様？）
第9図 12	SX2002	(HK78)	V②層	刻文土器	坏？	ロクロ→刻書	ロクロ	−	にぶい黄橙色	−	−	−	体部刻文（花模様？）
第9図 13	SX2002	(HK78)	V②層	土師器	蓋？	ロクロ	ロクロ	−	浅黄色	(15,0)	−	−	
第9図 14	SX2002	(HJ78)	RP5	土師器	皿	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	灰白色	(13,0)	5,6	2,7	
第9図 15	SX2002	(HK78)	V②層	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい黄橙色	−	(5,4)	−	底部墨書「□」(厨カ)
第9図 16	SX2002	(HK77)	V①層	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい黄橙色	−	(5,8)	−	底部墨書「□」(厨カ)
第9図 17	SX2002	(HK77)	V②層	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	橙色	−	−	−	底部墨書「官」
第9図 18	SX2002	(HK77)	V②層	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい黄橙色	−	5,8	−	底部墨書「厨」
第9図 19	SX2002	(HK77)	V②層	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	灰白色	−	(5,4)	−	底部墨書「厨」
第9図 20	SX2002	(HK78)	V②層	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り→ナデ	にぶい橙色	−	(6.4)	−	底部墨書「□」
第9図 21	SX2002	(HK77)	V②層	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい橙色	(13.0)	4.4	4.8	体部墨書「□」(厨カ)
第9図 22	SX2002	(HK77)	RP22	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい橙色	(13,2)	5,2	5,3	体部墨書「一」
第9図 23	SX2002	(HK77)	RP2	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい黄橙色	(13,6)	5,8	4,4	体部墨書（花模様）、内面墨塗布

挿図No.	出土位置		層位等	種別	器種	外面調整	内面調整	底面調整	外面色調	口径	底径	器高	備考
第10図 1	SX2002	(HK78)	V②層	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい黄橙色	−	−	−	底部墨書「□」
第10図 2	SX2002	(HK77)	V②層	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい黄橙色	−	(6,2)	−	底部墨書「□」
第10図 3	SX2002	(HK77)	V②層	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい黄橙色	−	(5,2)	−	底部墨書「□」
第10図 4	SX2002	(HK77)	V②層	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り	灰白色	−	(6.6)	−	底部墨書「□」
第10図 5	SX2002	(HK78)	V層	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい黄橙色	−	(4,4)	−	底部墨書「□」
第10図 6	SX2002	(HK78)	V②層	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい黄橙色	−	(6.0)	−	底部墨書「□」
第10図 7	SX2002	(HK78)	V②層	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい橙色	(13,2)	−	−	
第10図 8	SX2002	(HK77)	RP1,13	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい黄橙色	(13,4)	(6,0)	5,7	
第10図 9	SX2002	(HK77)	V②層	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	明褐色	(12,0)	5,2	5,5	
第10図 10	SX2002	(HK77)	RP11	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい黄橙色	(15,4)	(6,2)	6,7	
第10図 11	SX2002	(HK77)	RP16	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい褐色	(12,0)	5.6	4.6	
第10図 12	SX2002	(HK77)	RP10	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	橙色	13,9	5,6	4,6	
第10図 13	SX2002	(HK78)	V②層	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい橙色	(14.0)	5.4	4.8	灯明皿
第10図 14	SX2002	(HK78)	サブトレV層	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい橙色	(13,2)	(6,0)	5,1	
第10図 15	SX2002	(HK78)	V②層	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい橙色	(12.6)	5.6	4.7	
第10図 16	SX2002	(HK78)	RP27	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい黄橙色	(13,0)	5,6	5,1	灯明皿、形代？

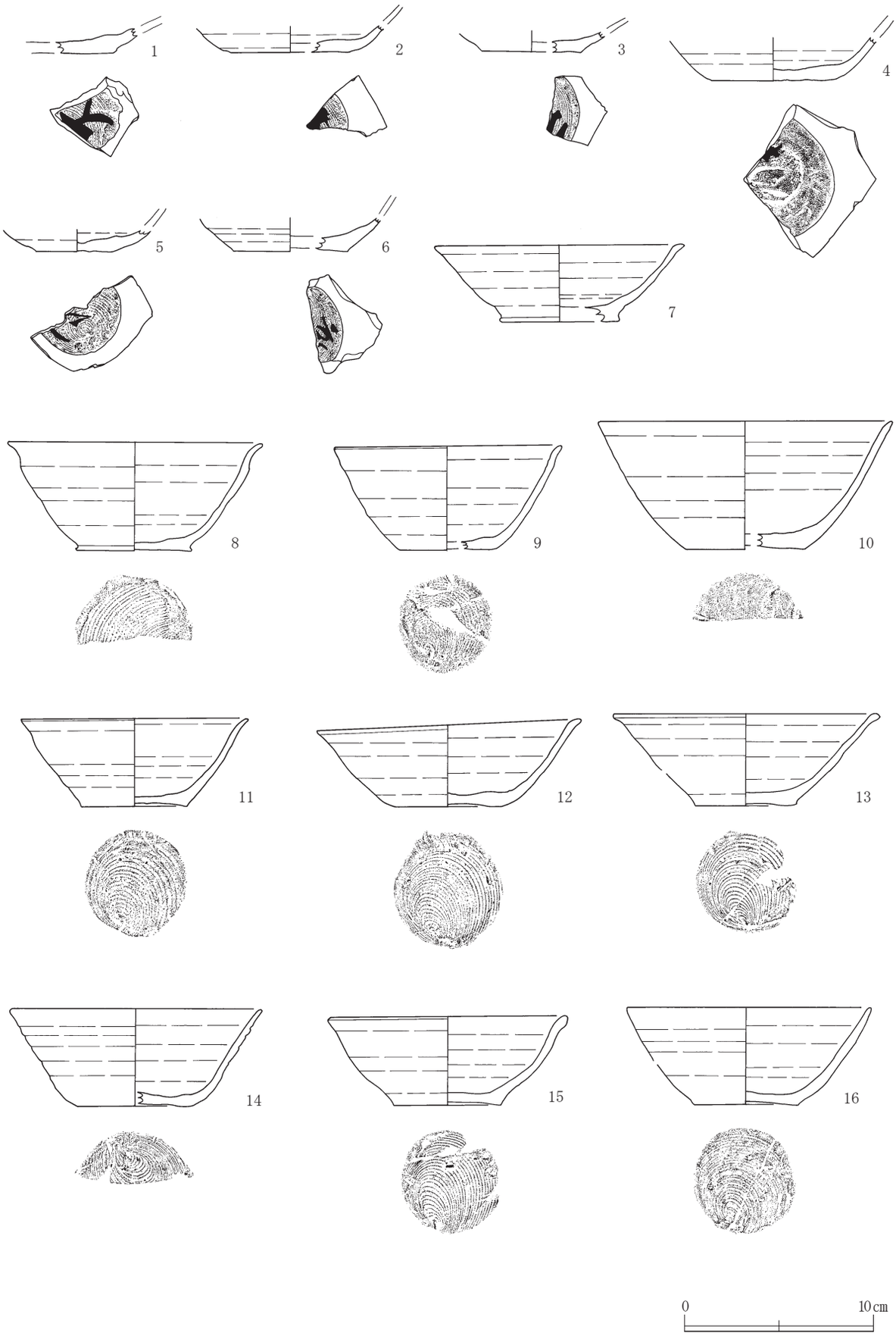
挿図No.	出土位置		層位等	種別	器種	外面調整	内面調整	底面調整	外面色調	口径	底径	器高	備考
第11図 1	SX2002	(HK78)	RP25	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい黄橙色	(12,6)	5,7	5,1	
第11図 2	SX2002	(HK78)	RP26	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい橙色	(12,2)	5,2	4.7	灯明皿、形代？
第11図 3	SX2002	(HK78)	RP15	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	灰黄褐色	(12,8)	(4,6)	4,0	
第11図 4	SX2002	(HK78)	RP13	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい黄橙色	12.4	5.6	3.5	灯明皿
第11図 5	SX2002	(HK78)	RP12	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい黄橙色	(11,8)	4,0	4,2	灯明皿
第11図 6	SX2002	(HK78)	RP7	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	灰褐色	(12,6)	(5,0)	4,1	灯明皿
第11図 7	SX2002	(HK78)	サブトレV層	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	灰色	(14,4)	5,0	4,7	
第11図 8	SX2002	(HK77)	V②層	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	明褐灰色	(12,0)	4,9	4,7	灯明皿
第11図 9	SX2002	(HK77)	RP22	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	橙色	(14.4)	6.4	5.5	
第11図 10	SX2002	(HK77)	RP15	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	明褐灰色	(13,2)	5,0	5,0	灯明皿
第11図 11	SX2002	(HK78)	RP31	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい橙色	(14.4)	5.8	6.4	灯明皿、形代？
第11図 12	SX2002	(HK77)	RP17,19	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい褐色	(14,2)	5,8	6,4	
第11図 13	SX2002	(HK77)	V②層	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	明褐灰色	−	(4.8)	−	
第11図 14	SX2002	(HK78)	サブトレV層	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り→ナデ	橙色	−	6.2	−	
第11図 15	SX2002	(HJ78)	V②層	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい黄橙色	−	(7,0)	−	



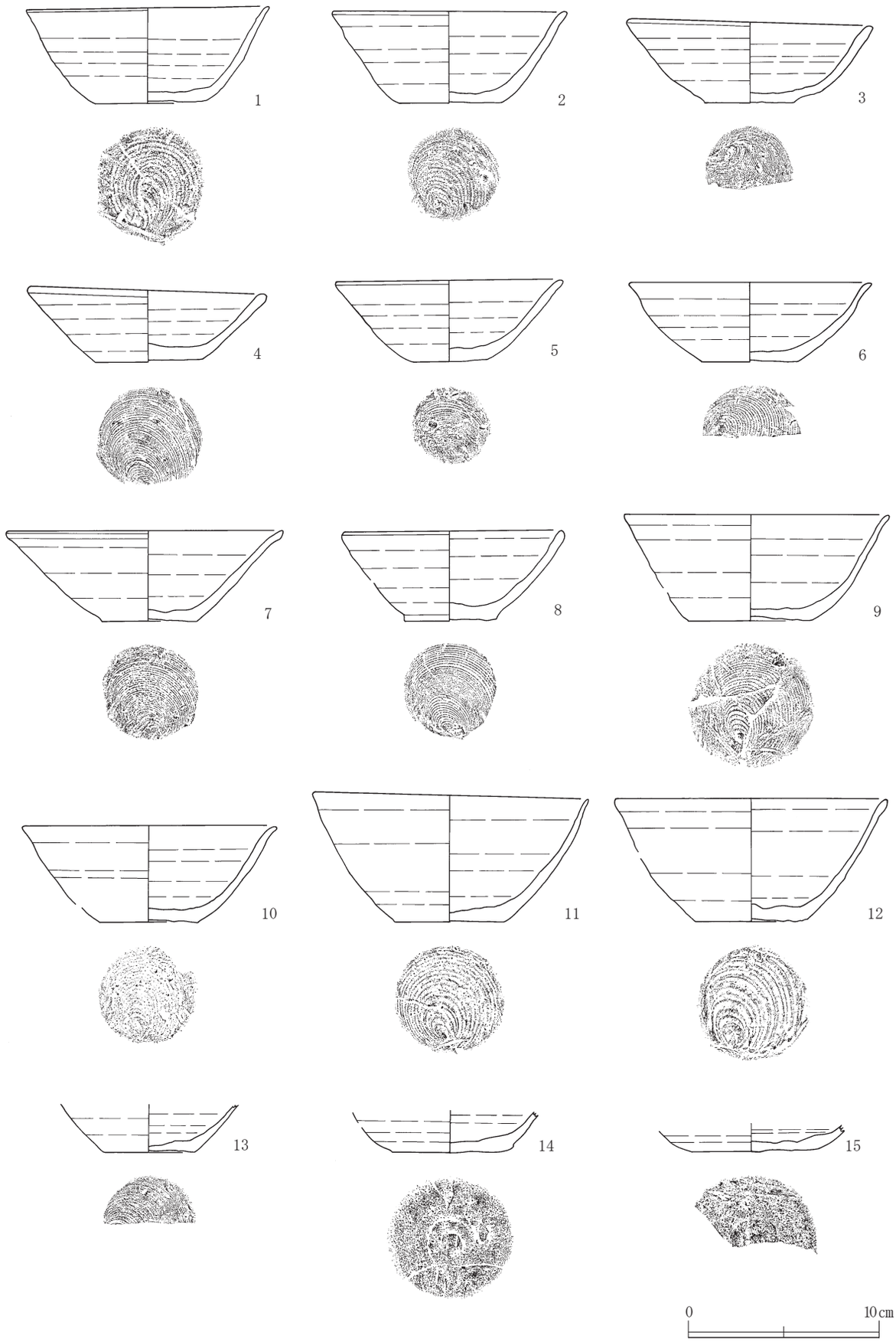
第８図　ＳＸ2002盛土整地地業　出土遺物（１）



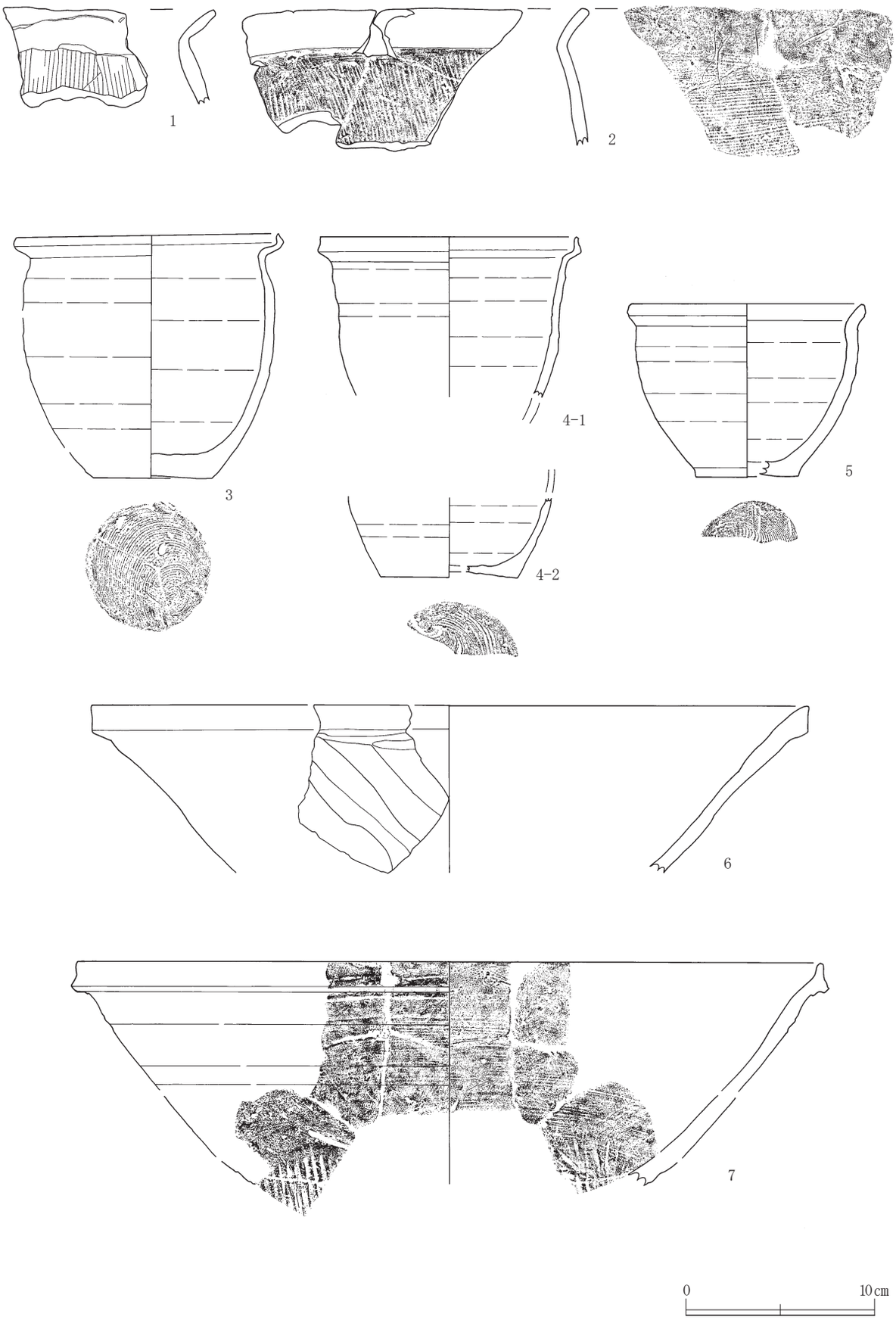
第９図　ＳＸ2002盛土整地地業　出土遺物（２）



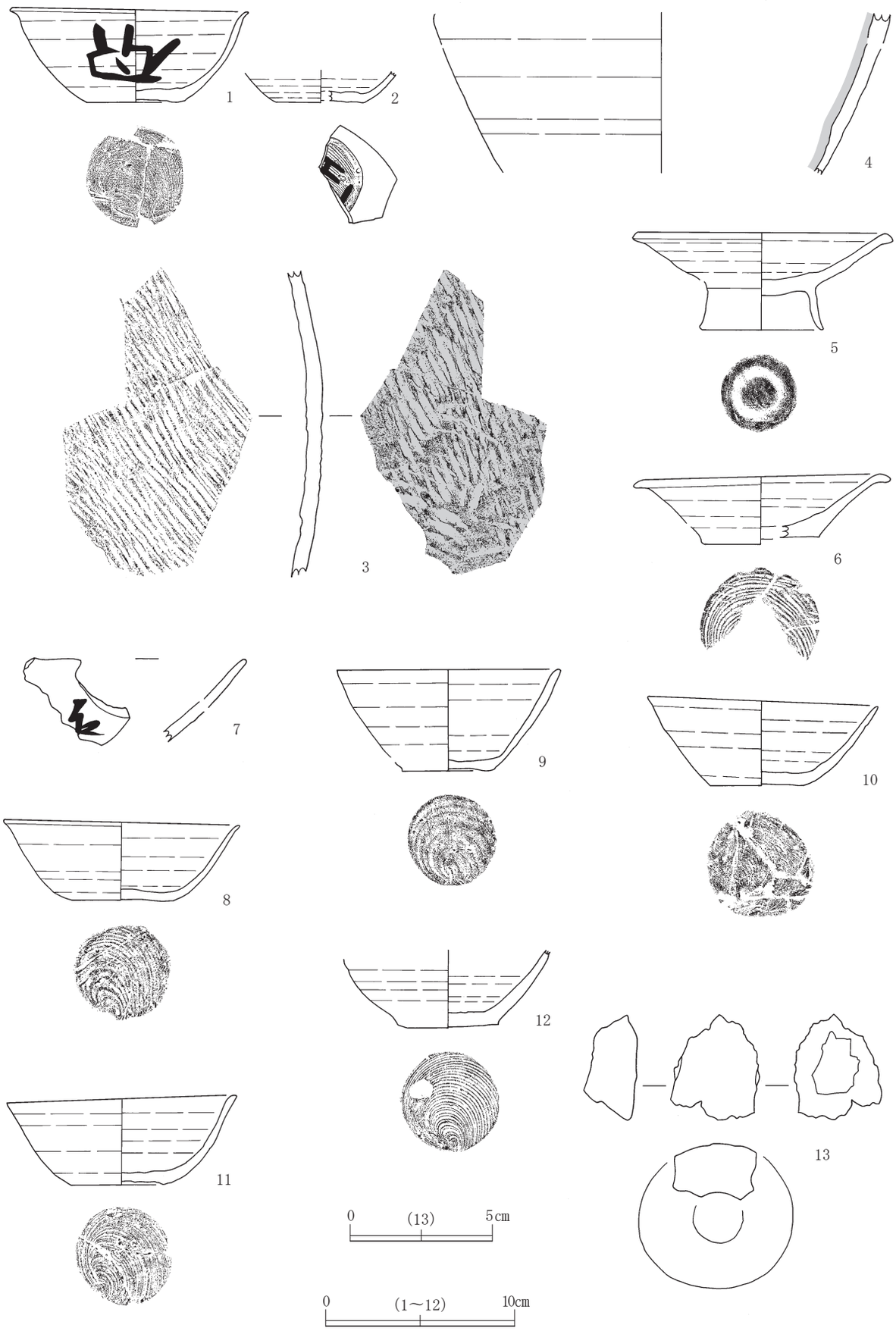
第10図　ＳＸ2002盛土整地地業　出土遺物（３）



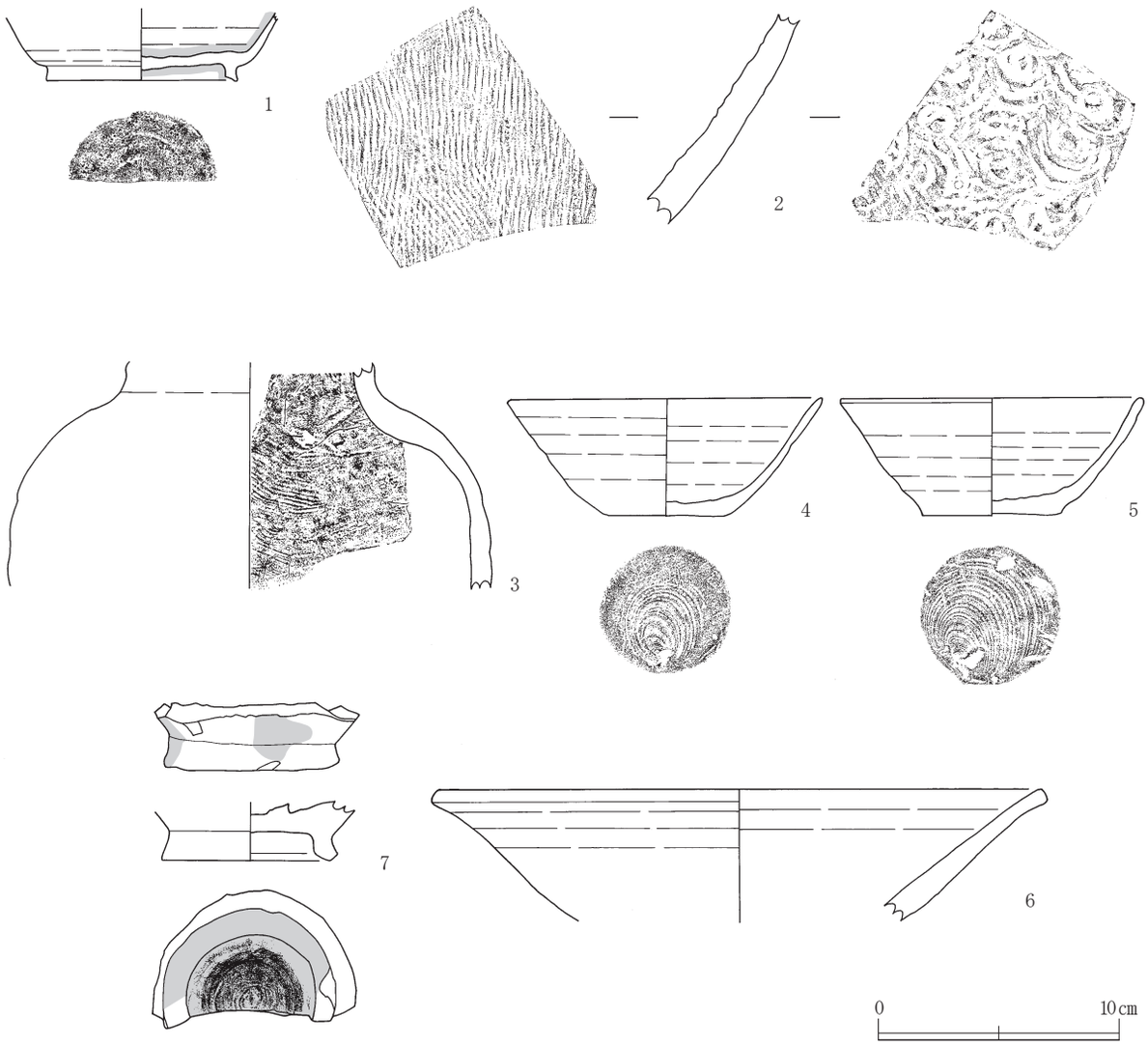
第11図　ＳＸ2002盛土整地地業　出土遺物（４）



第12図　ＳＸ2002盛土整地地業　出土遺物（５）



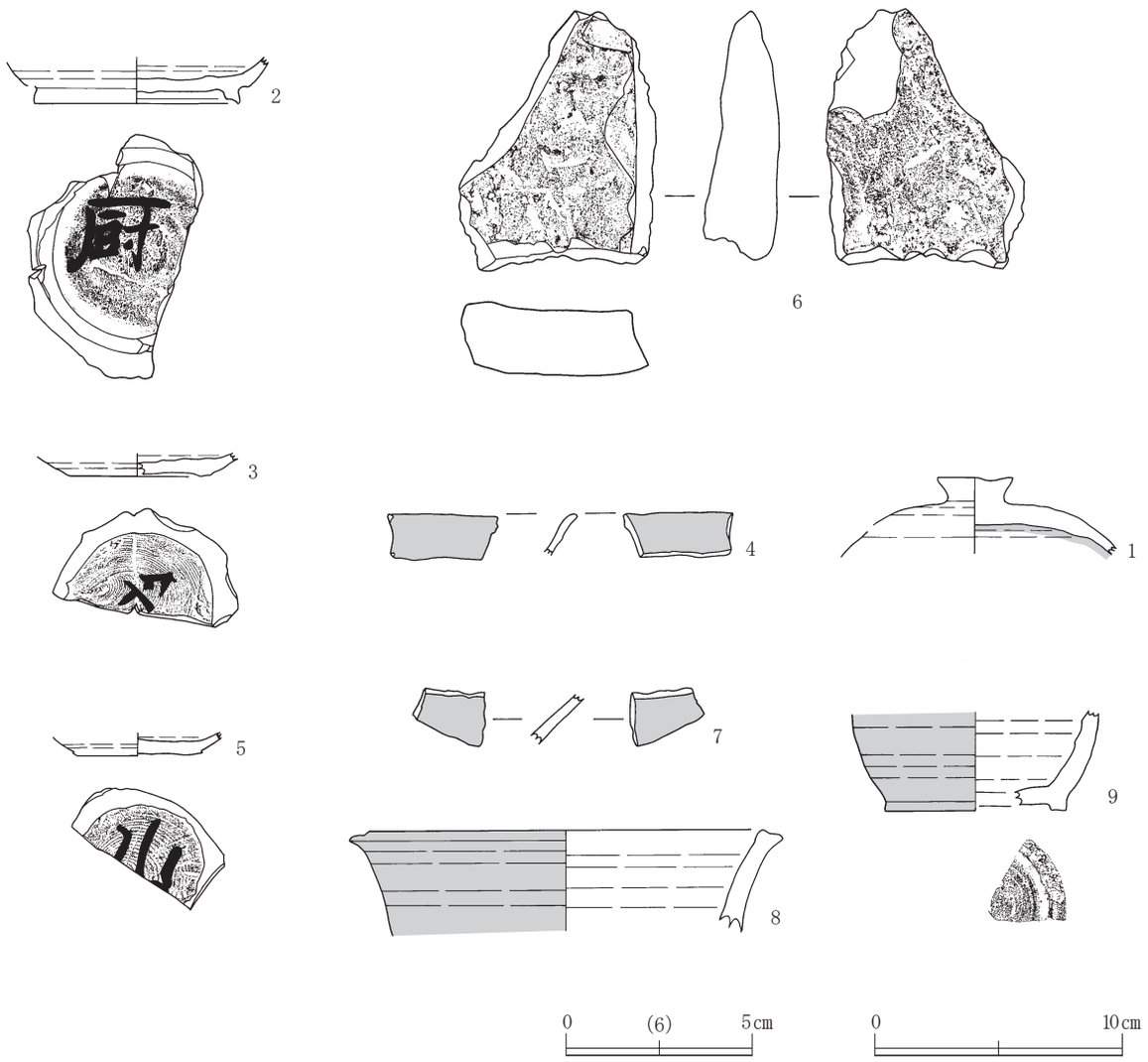
第13図　ＳＸ2141盛土整地地業　出土遺物



第14図　遺構内出土遺物

挿図No.		出土位置	層位等	種別	器種	外面調整	内面調整	底面調整	外面色調	口径	底径	器高	備考
第12図 1		SX2002 (HK78)	Ⅴ②層	土師器	甕	ナデ→ハケメ	ナデ	－	にぶい黄橙色	－	－	－	非ロクロ成形
第12図 2		SX2002 (HJ78)	Ⅴ②層	土師器	甕	ナデ→ハケメ	ナデ→ハケメ	－	にぶい橙色	－	－	－	非ロクロ成形、ナデ布目残る
第12図 3		SX2002 (HK77)	RP20	土師器	甕	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	褐灰色	(13.7)	6.4	12.9	
第12図	4-1	SX2002 (HK77)	RP15	土師器	甕	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	灰褐色	(13.6)	－	－	同一個体
	4-2		Ⅴ②層							－	(7.2)	－	
第12図 5		SX2002 (HJ78)	RP14	土師器	甕	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい黄橙色	(12.4)	(5.4)	9.1	
第12図 6		SX2002 (HK78)	RP2	土師器	鍋	ロクロ →ヘラケズリ	ロクロ	－	黄灰色	(37.8)	－	－	
第12図 7		SX2002 (HK77)	Ⅴ②層	土師器	鍋	ロクロ →平行タタキ	ロクロ→ハケメ →平行アテ具	－	にぶい黄橙色	(39.0)	－	－	

挿図No.	出土位置	層位等	種別	器種	外面調整	内面調整	底面調整	外面色調	口径	底径	器高	備考
第13図 1	SX2141 (HG18)	RP1	須恵器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	灰色	12.6	5.2	5.0	体部墨書「口」
第13図 2	SX2141 (HG18)		須恵器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	灰白色	－	(4.6)	－	底部墨書「口」
第13図 3	SX2141 (HJ19)	Ⅰ層	須恵器	甕	平行タタキ	平行アテ具	－	灰色	－	－	－	転用硯（内面）
第13図 4	SX2141 (HE19)	上面	須恵器	壺？	ロクロ	ロクロ →ヘラケズリ	－	灰色	－	－	－	転用硯（内面）
第13図 5	SX2141 (HF19)		土師器	高台付皿	ロクロ	ロクロ	－	にぶい橙色	(13.6)	6.6	5.1	
第13図 6	SX2141 (HG16)	RP1	土師器	皿	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい黄橙色	(13.4)	(6.2)	3.7	
第13図 7	SX2141 (HF19)	(サブトレ) 上面	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	－	にぶい黄橙色	－	－	－	体部墨書「口」
第13図 8	SX2141 (HI19)	RP1	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい橙色	12.4	5.0	4.2	
第13図 9	SX2141 (HG20)	RP1	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい橙色	11.7	4.8	5.3	
第13図 10	SX2141 (HF19)	RP2	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り →ナデ	にぶい橙色	(12.1)	5.4	4.2	
第13図 11	SX2141 (HF19)	RP1	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい黄橙色	(12.0)	5.2	4.7	
第13図 12	SX2141 (HG16)	RP1	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい黄橙色	－	5.4	－	
第13図 13	SX2141 (HF19)	サブトレ	フイゴ羽口		－	－	－	－	－	－	－	フイゴ羽口



第15図　遺構外出土遺物

挿図No.	出土位置	層位等	種別	器種	外面調整	内面調整	底面調整	外面色調	口径	底径	器高	備考
第14図 1	SD2143	埋土	須恵器	高台付坏	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り	灰色	－	(7.8)	－	転用硯（内面・高台内）
第14図 2	SKP2145	RP1	須恵器	甕	平行タタキ	青海波アテ具	－	灰色	－	－	－	
第14図 3	SKP2146		土師器	壺	ナデ	ハケメ	－	にぶい褐色	－	－	－	非ロクロ成形
第14図 4	SD2154	RP2	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい橙色	13.0	5.2	4.9	
第14図 5	SD2154	RP1	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい橙色	12.6	5.8	4.9	
第14図 6	SD2154		土師器	鍋	ロクロ	ロクロ	－	にぶい黄橙色	(25.4)	－	－	
第14図 7	SD2154	上面 RP1	灰釉陶器	瓶？	ロクロ→釉	ロクロ	－	灰白色	－	(7.2)	－	刷毛塗り、高台内・高台も施釉

挿図No.	出土位置	層位等	種別	器種	外面調整	内面調整	底面調整	外面色調	口径	底径	器高	備考
第15図 1	HE19	Ⅲ層	須恵器	蓋	ロクロ	ロクロ	－	灰色	－	－	－	転用硯（内面）
第15図 2	HL78	Ⅲ層	須恵器	高台付坏	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り	灰白色	－	(8.2)	－	底部墨書「厨」
第15図 3	HE19	Ⅲ層	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	灰黄色	－	(5.8)	－	底部墨書「□」
第15図 4	HE19	Ⅲ層	灰釉陶器	椀	ロクロ→釉	ロクロ→釉	－	灰色	－	－	－	刷毛塗り
第15図 5	HG19	Ⅱ層	須恵器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	灰色	－	(5.0)	－	底部墨書「□」（巾か）
第15図 6	HK77	Ⅱ層	瓦	平瓦	ヘラケズリ	ヘラケズリ	－	黄灰色	－	－	－	
第15図 7	HI19	Ⅰ層	灰釉陶器	皿？	ロクロ→釉	ロクロ→釉	－	灰色	－	－	－	刷毛塗り
第15図 8	HH19	Ⅰ層	灰釉陶器	瓶？	ロクロ→釉	ロクロ	－	灰色	(17.4)	－	－	刷毛塗り
第15図 9	HH19	Ⅰ層	灰釉陶器	壺？	ロクロ→ヘラケズリ→釉	ロクロ	－	灰黄色	－	(7.2)	－	刷毛塗り

第３節　自然科学分析

はじめに

払田柵跡（秋田県大仙市払田・美郷町本堂城回地内）は、横手盆地の北側、仙北平野中央部に位置しており、真山･長森丘陵を中心として、川口川や丸子川などが形成した扇状地扇端付近の沖積地（真昼川釜渕川合成扇状地前延扇状構造低地；関,1988）に立地する。

払田柵跡は、これまでの調査により９世紀初頭から10世紀後半まで存続した施設とされており、Ⅰ～Ⅴ期までの変遷が明らかとされている。第148次調査は、払田柵跡外郭南門外（大路地区）東方の官衙域の南庇を有する大形建物跡南側の遺構分布確認調査として実施されており、払田柵跡創建期の地表面より土坑や柱穴様のピット、かまどの可能性がある遺構や焼土遺構が確認されている。

本報告では、払田柵跡創建期頃における古植生に関する情報を得ることを目的として、旧地表面とされる堆積層や同堆積層上面より検出された遺構の埋積物を対象に植物珪酸体分析と花粉分析を実施した。

１　試料

試料は、第148次調査区（DHT148）東側のＨＪ78より採取された土壌４点である。内訳は、かまど遺構（かまどの袖？）と考えられる遺構埋積物より採取された土壌２点（ＨＪ78かまど１層；試料番号１、ＨＪ78かまど２層；試料番号２）と、同遺構の南西に近接して確認された焼土遺構より採取された土壌１点（ＨＪ78南西側焼土；試料番号３）、さらに上記した遺構が構築された旧地表面を構成する堆積層より採取された土壌１点（ＨＪ78Ⅴ③層；試料番号４，５、試料番号４，５は同一試料）である。なお、これらの試料は、ＨＪ78かまど１層（試料番号１）が炭化物が混じる暗褐灰～暗灰褐色泥（シルト～粘土)、ＨＪ78かまど２層（試料番号２）が炭化物や灰～黄灰色シルトの偽礫が混じる褐色泥、ＨＪ78南西側焼土（試料番号３）が褐色泥、ＨＪ78Ⅴ③層（試料番号４，５）が黒泥様を為す黒色泥からなる。

本分析では、上記した試料のうち、試料番号１～４の４点を対象に植物珪酸体分析、試料番号５の１点を対象に花粉分析を実施した。

２　分析方法

（１）植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理･化学処理を行い、植物珪酸体を分離･濃集する。これをカバーガラス上に滴下･乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し､その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下､短細胞珪酸体）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下､機動細胞珪酸体）を､近藤（2010）の分類を参考に同定、計数する。また、分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作製に用いた分析残渣量を正確に計量し、乾土１ｇあたりの植物珪酸体含量（同定した数を乾土１ｇあたりの

個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量と珪化組織片の産状を一覧表で示す。その際、各分類群の含量は100単位として表示し、100個/g未満は「<100」で表示する。また、植物珪酸体含量と珪化組織片の産状を図示する。

（２）花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定･計数する。同定は､当社保有の現生標本や島倉（1973)､中村（1980)、三好ほか（2011）等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。表中で複数の種類を－（ハイフォン）で結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。

３　結果

（１）植物珪酸体分析

結果を第４表、第16図に示す。各試料からは植物珪酸体が産出するものの、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められるなど、保存状態は概して悪い。植物珪酸体（珪化組織片を含む）の産状は、かまど遺構（試料番号１，２）では珪化組織片（植物珪酸体から構成される細胞列等の組織構造が壊れずに残存したもの）の産出が特徴的であり、Ⅴ③層（試料番号４）は植物珪酸体含量が他の試料に比べて高いという特徴を示す。以下、かまど遺構と焼土遺構、Ⅴ③層とに分けて産状を記す。

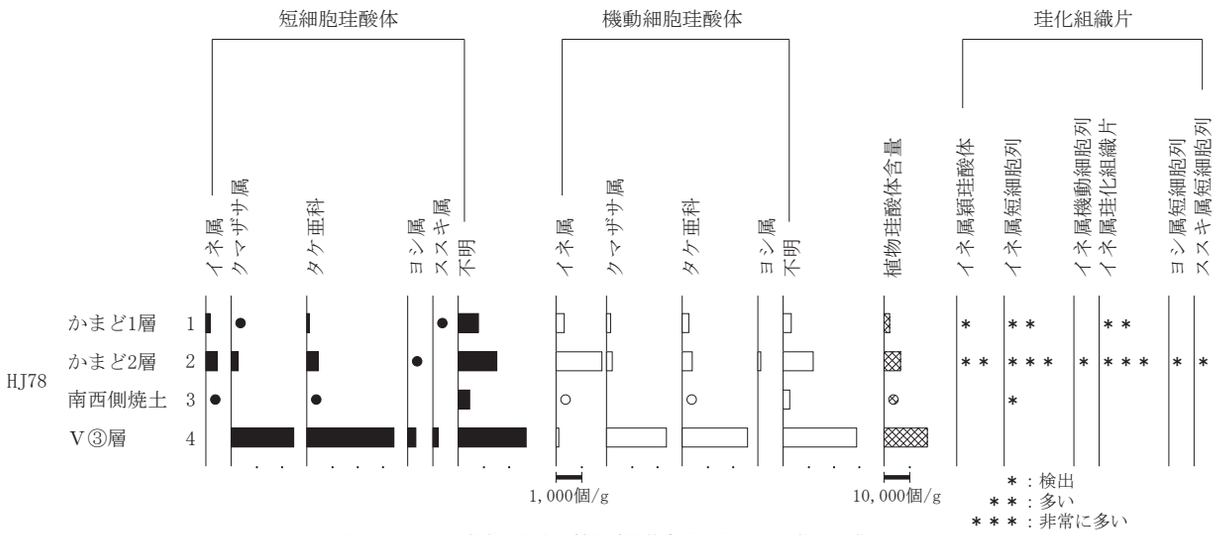
１）かまど遺構・焼土遺構（試料番号１～３）

植物珪酸体含量は、かまど遺構（試料番号１,２）が2,200～6,500個/g、焼土遺構（試料番号３）が1,000個/gである。

検出された分類群についてみると、３試料からはいずれも栽培植物のイネ属の葉部に由来する植物珪酸体が産出する。その含量は、かまど遺構（試料番号１，２）の短細胞珪酸体が200～500個/g、機動細胞珪酸体が300 ～ 1,800個/gである。焼土遺構（試料番号３）は短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体のいずれも100個/g未満である。栽培植物のイネ属を除く分類群は、クマザサ属を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属が産出するものの全体的に含量が低い。とくに焼土遺構（試料番号３）ではタケ亜科が認められる程度であり、その含量は100個/g未満と極めて低い。

また、これらの３試料からは珪化組織片が検出される。珪化組織片の産状は、かまど遺構（試料番号１，２）ではイネ属の葉部に由来する短細胞列や機動細胞列および珪化組織片（イネ属と思われるが、短細胞珪酸体や機動細胞列珪酸体などが明確に認められない組織片)、籾（穎）に形成される穎珪酸体などが認められ、とくにかまど２層（試料番号２）において多く検出される傾向にある。さらに、かまど２層からはヨシ属やススキ属の短細胞列も検出される。一方の焼土遺構（試料番号３）はイネ属の短細胞列が検出されるのみである。

２）Ⅴ③層（試料番号４）



乾土1gあたりの個数で示す。植物珪酸体含量の⊗は1,000個/g未満、
他の●○は100個/g未満を定性的に示す。

第16図　植物珪酸体含量

第４表　植物珪酸体含量　(個/g)

分類群	HJ78 かまど1層 1	HJ78 かまど2層 2	HJ78 南西側焼土 3	HJ78 Ｖ③層 4
イネ科葉部短細胞珪酸体				
イネ属	200	500	<100	–
クマザサ属	<100	300	–	2,500
タケ亜科	100	500	<100	3,500
ヨシ属	–	<100	–	300
ススキ属	<100	–	–	200
不明	800	1,500	500	2,700
イネ科葉身機動細胞珪酸体				
イネ属	300	1,800	<100	100
クマザサ属	200	200	–	2,400
タケ亜科	300	400	<100	2,600
ヨシ属	–	100	–	–
不明	300	1,200	300	2,900
合　計				
イネ科葉部短細胞珪酸体	1,100	2,800	600	9,200
イネ科葉身機動細胞珪酸体	1,100	3,700	400	8,000
植物珪酸体含量	2,200	6,500	1,000	17,200
珪化組織片				
イネ属顆珪酸体	＊	＊＊	–	–
イネ属短細胞列	＊＊	＊＊＊	＊	–
イネ属機動細胞列	–	＊	–	–
イネ属珪化組織片	＊＊	＊＊＊	–	–
ヨシ属短細胞列	–	＊	–	–
ススキ属短細胞列	–	＊	–	–

註１）「<100」：100個/g未満.
註２）珪化組織片の産状　－：未検出. ＊：検出. ＊＊：多い. ＊＊＊：非常に多い.

第５表　花粉分析結果

種類	HJ78 Ｖ③層 5
木本花粉	
マツ属	1
ハンノキ属	6
ブナ属	1
コナラ属コナラ亜属	1
ニレ属－ケヤキ属	1
草本花粉	
イネ科	10
キク亜科	2
不明花粉	
不明花粉	3
シダ類胞子	
シダ類胞子	37
合　計	
木本花粉	10
草本花粉	12
不明花粉	3
シダ類胞子	37
合計（不明を除く）	59

Ｖ③層の植物珪酸体含量は17,200個/ｇであり、上記した３試料に比べ含量が高い。本試料からも栽培植物のイネ属が産出するが、その含量は機動細胞珪酸体のみ100個/ｇである。また、栽培植物を除く分類群では、クマザサ属を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属が産出し、これらの分類群ではクマザサ属やタケ亜科の含量が高い。

（２）花粉分析

結果を第５表に示す。Ｖ③層（試料番号５）は、花粉化石の産出が少なく、保存状態も全体的に悪い。花粉化石は、木本花粉ではマツ属、ハンノキ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属、草本花粉ではイネ科、キク亜科などが検出されるほか、シダ類胞子もわずかに認められる。

なお、分析残渣中には、微細な炭化植物片（いわゆる微粒炭）が多量含まれる。これらの微粒炭の多くは母材不明のタイプであるが、壁孔等の木材組織を有するタイプや、イネ科葉部に由来するとされる波状構造を持つタイプ（小椋，2007，2008など）も認められた。

４　考察

（１）古植生

払田柵跡創建期の旧地表とされるⅤ③層における花粉化石は産状が悪く、マツ属、ハンノキ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属などの木本類や、イネ科やキク亜科などの草本類がわずかに検出された程度であった。

払田柵跡では、これまでにも古植生（周辺植生）や土地利用を明らかとするため、花粉分析や植物珪酸体分析が実施されている（パリノ・サーヴェイ株式会社，2009；2010；2011）。このうち、長森丘陵北端のホイド清水付近（第130次調査区）の堆積層を対象とした花粉分析結果を参考とすると、十和田ａテフラ（To-a）のブロックが混じるⅥ層と下位のⅦ層層準では、冷温帯性落葉広葉樹林の主要構成種であるブナ属やコナラ亜属、二次林等に生育するコナラ亜属やクリ、河畔林の構成種であるハンノキ属をはじめとして河川沿いや湿地等に生育する分類群が確認されており、とくにⅥ層～Ⅶ層を境としてスギ属の増加やコナラ亜属の減少等の消長が捉えられている。（パリノ・サーヴェイ株式会社，2009）。今回の試料は上述したように花粉化石の産状が悪く、詳細な検討には至らないが、いずれも上記した調査において比較的多く確認されている分類群であることから、周辺域に分布した森林や草地に由来するものと考えられる。

また、植物珪酸体分析では、クマザサ属やタケ亜科などが検出され、他の３試料と比較してその含量も比較的高いという特徴が認められた。クマザサ属（チシマザサを含む））は、上記したブナ属等を構成種とする冷温帯性落葉広葉樹林の林床等に生育するほか、タケ亜科は林縁等の明るく開けた場所に生育する。また、タケ亜科の植物珪酸体は、他のイネ科と比較して風化に強く、生産量が多い（近藤，1982；杉山・藤原，1986）ことから、他の種類より残留しやすい。おそらく今回検出されたクマザサ属やタケ亜科は、調査地周辺に生育したイネ科植生を反映すると考えられるが、これまでに明らかとされている払田柵跡の沖積地の微地形等を踏まえると、後背山地や丘陵を集水域とする河川により供給された堆積物中に含まれる植物珪酸体の影響も考慮する必要がある。

（２）植物利用

上記したⅤ③層より検出されたかまど遺構や焼土遺構の植物珪酸体分析の結果、各試料より栽培植物のイネ属が検出された。イネ属の産状は試料により差異があるものの、かまど遺構（試料番号１，２）からはイネ属の珪化組織片が多く産出する傾向にあり、とくに葉部に由来する短細胞列やその可能性がある組織片、さらに籾（穎）に由来する穎珪酸体が多く認められた。植物珪酸体を有する組織構造は、土壌中に取り込まれた後、ほとんどが土壌化や擾乱などの影響により分離し単体となるが、植物遺体や植物が燃えた後の灰には組織構造が珪化組織片などの形で残される場合がある。これらの状況や試料の由来等を考慮すると、かまどの袖の資材あるいはかまど使用時の燃料材としてイネの植物体の利用が推定される。また、かまど２層（試料番号２）からはヨシ属やススキ属の珪化組織片も検出されており、これらの植物体の利用も想定される。

引用文献

近藤錬三，1982，Plantopal分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究．昭和56年度科学研究費（一般研究Ｃ）研究成果報告書，32p.

近藤錬三，2010，プラント･オパール図譜．北海道大学出版会，387p.

三好教夫・藤木利之・木村裕子，2011，日本産花粉図鑑．北海道大学出版会，824p.

中村　純，1980，日本産花粉の標徴　Ⅰ　Ⅱ（図版）．大阪市立自然史博物館収蔵資料目録　第12，13集，91p.

小椋純一，2007，微粒炭の母材植物特定に関する研究．植生史研究，15，p．85–95.

小椋純一，2008，釧路湿原北東陸地部における微粒炭分析．日本植生史学会第23回大会講演要旨集，46–47

パリノ・サーヴェイ株式会社，2009，長森周辺の古植生と土地利用．払田柵跡Ⅲ－長森地区－本編，秋田県文化財調査報告書第448集，秋田県教育委員会・秋田県教育庁払田柵跡調査事務所，158–163.

パリノ・サーヴェイ株式会社，2010，第3節　自然科学的分析．払田柵跡　－第139次・第140次調査関連遺跡の調査－，秋田県文化財調査報告書第457集　払田柵跡調査事務所年報2009，秋田県教育庁払田柵跡調査事務所・秋田県教育委員会，17–21.

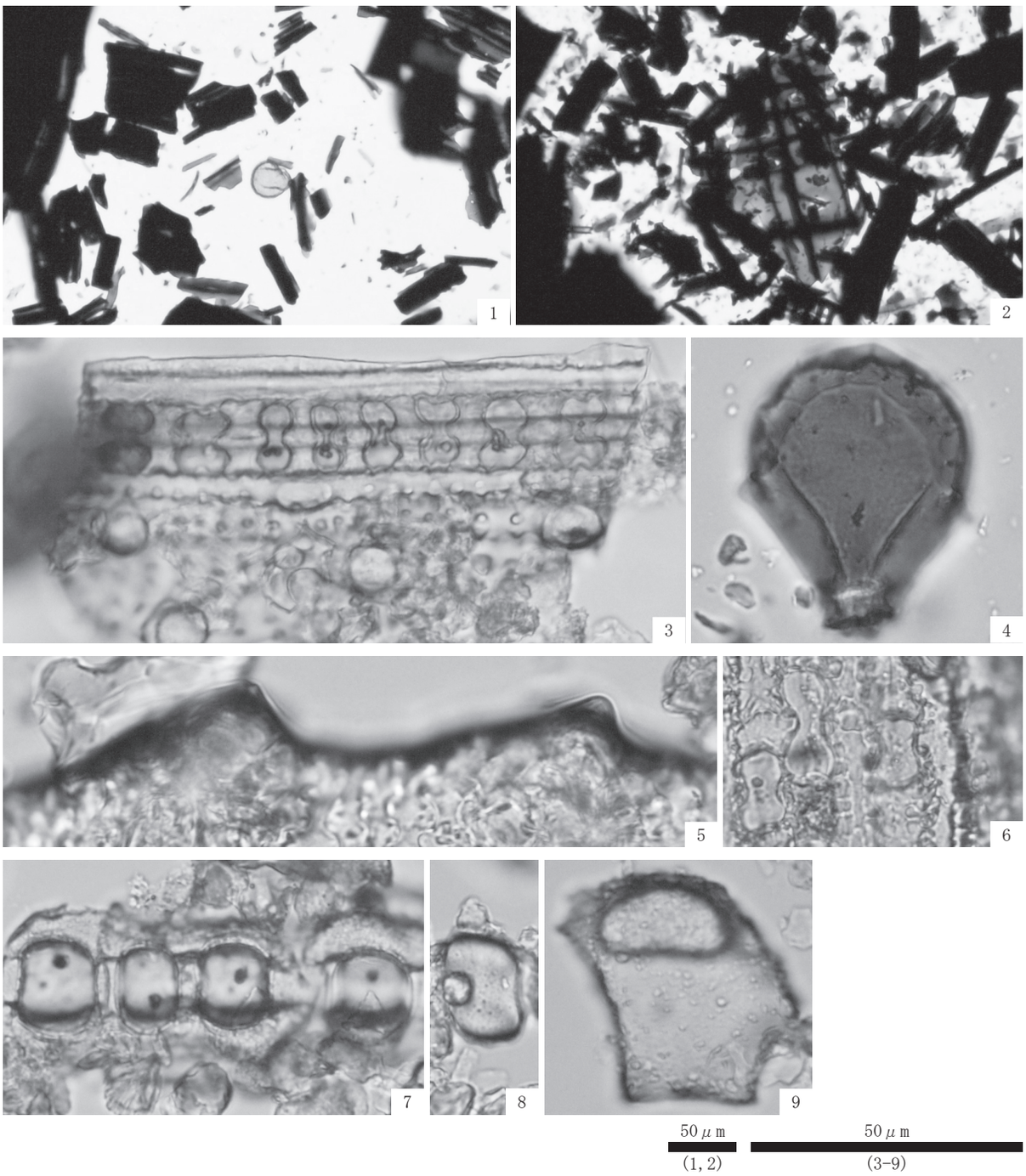
パリノ・サーヴェイ株式会社，2011，第3節　自然科学的分析．払田柵跡　－第141次調査概要－，秋田県文化財調査報告書第466集　払田柵跡調査事務所年報2010，秋田県教育庁払田柵跡調査事務所・秋田県教育委員会，13–19.

島倉巳三郎，1973，日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録　第5集，60p.

杉山真二・藤原宏志，1986，機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－．考古学と自然科学，19，69–84.

図版1

花粉分析プレパラート内の状況・珪化組織片・植物珪酸体



1. 花粉分析プレパラート内の状況（HJ78 Ⅴ③層;5）
2. 花粉分析プレパラート内の状況（HJ78 Ⅴ③層;5）
3. イネ属短細胞列を含む珪化組織片（HJ78 かまど2層;2）
4. イネ属機動細胞珪酸体（HJ78 かまど2層;2）
5. イネ属穎珪酸体（HJ78 かまど2層;2）
6. ススキ属短細胞列（HJ78 かまど2層;2）
7. ヨシ属短細胞列（HJ78 かまど2層;2）
8. クマザサ属短細胞珪酸体（HJ78 Ⅴ③層;4）
9. クマザサ属機動細胞珪酸体（HJ78 Ⅴ③層;4）

第４節　小結

東側調査区について

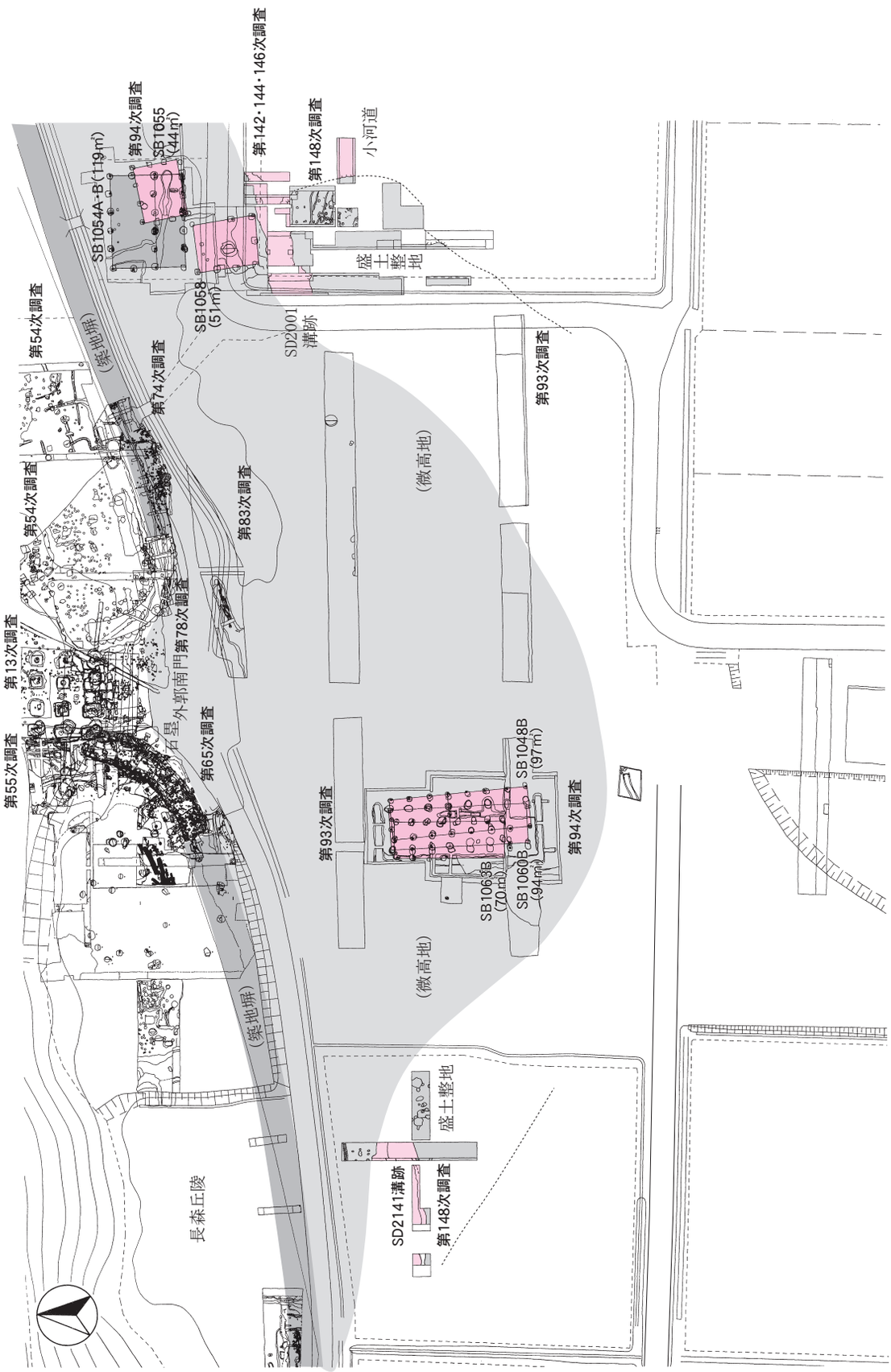
第１トレンチ北辺のＳＤ2001溝跡南岸に沿うように検出されたＳＡ2142柵列は、今回確認された３基の柱穴のほか、第142次調査区でプランが確認された１基も含め、少なくとも３間の規模を有する板塀と想定される。東西への広がりは不明であるが、東側に隣接して小河道が南流することが確認されており、ＳＤ2001溝跡もすぐ開口することから、東側へ延伸する可能性は低いと思われる。ＳＸ2002盛土整地地業のＶ②層上で確認されたことから、造成と同時に構築されたと考えられるＳＤ2001溝跡に関連する工作物、例えば溝の南岸（造成地の北縁）を区画する板塀の可能性も考えられるが、ＳＤ2001溝跡の西限の確認と柵列の延伸、あるいは北縁を大溝、東縁を小河道により区画される造成地を囲み込む構造等、その性格の詳細については今後の課題としたい。

10世紀初頭の造成土と考えられるＳＸ2002盛土整地地業を掘り下げ、造成により埋没したＶ③層の上面を精査した。この層準は丘陵裾部からの地山との間に漸移層を挟むのみであり、10世紀初頭にＳＸ2002盛土整地地業による造成が行われるまで、創建期以来の旧表土として存在した層準と考えられる。層相の検討でも、第94次調査確認のＳＢ1054Ａ・Ｂ及び1055掘立柱建物跡、並びに第146次調査確認のＳＢ1058掘立柱建物跡の確認面に相当し、創建期の文化面といえる。

９世紀前半代には南庇を有するＳＢ1054Ａ・Ｂ掘立柱建物跡が南面する間、建物の正面南側は広場として一体的に使用されたことが想定される。そのため本調査区の旧地表面の状況は、管理され整った平坦面と予想していたが、確認された旧地表面には溝跡や土坑、柱穴様ピット等の撹乱を受け、凹凸に富んでいた。

ＳＤ2143・2153溝跡は、緩い傾斜を保ちながら東～東南東へと下がるごく浅い溝跡である。断面及び堆積土の土層観察により、ＳＸ2002盛土整地地業の造成土により同時に埋め戻されたことが確認されたことから、10世紀初頭の造成の際には開口した状態にあり、それが盛土造成に際して一括埋め戻しされたことが明らかになった。ＳＤ2001溝跡の性格については、丘陵裾部からの湧水を滲出させて東方の小河道へ排水するため掘削された排水溝と考えられ、裾部微高地からＳＸ2002盛土整地地業により造成した平場の維持管理のために必要不可欠な施設として設けられたものと考えられている。いっぽうＳＸ2002盛土整地地業の造成に際しても既に湧水が生じていたことは容易に予測でき、この湧水を処理せずに盛土造成を実施することは困難であったと考えられる。これらの溝跡は造成に際し丘陵裾部の湧水を滲出させるとともに、東側の小河道へ湧水を導くために、附帯する土木作業として掘削された仮設の排水溝であった可能性が高い。つまり造成に先がけて湧水をまとめて排水処理し、地盤の乾燥・固化を調整しながら一気に盛土造成を進めたことが想定される。その後、造成土の北側に沿うように、つまり丘陵裾部と造成地との間に大溝を設け、恒久的に湧水を処理するとともに造成地の湿潤化を防ぐための維持管理がなされたのであろう。

これらの溝跡の南側、トレンチ南側の断面を精査したＨＫライン付近では、創建期の地表面から掘り下げられた土坑等が集中して確認された。上面が造成土により撹乱されて不明瞭であったため、断面精査の段階で確認されたものがほとんどであるが、覆土はほぼ一括埋め戻しであった。つまり前記した溝跡とは異なり、ＳＸ2002の造成時には既に埋め戻されていたことになる。また南側に拡張し



第17図　外郭南門外側の官衙域と遺構分布

たＨＪ78グリッドでは、創建期の地表面上に焼土及びかまど袖の可能性がある焼礫が並んで確認され、簡易な厨舎等の施設が存在したとも想定される。自然科学分析では、かまど（袖）の構築に際して稲藁やヨシ・ススキ等が混和された可能性、また焚きつけ等燃焼材としても使用された可能性が示唆されている。しかしこれらはＳＢ1054Ａ・Ｂ掘立柱建物跡の正面に位置するため、この建物が機能した９世紀前半代に存在したとは考えがたく、むしろＳＢ1055及び1058の二棟一対の建物へと改修され、正面広場が西へ変遷した、９世紀後半代に至り構築された可能性が高いと思われる。

ＨＫ77･78グリッドには古い段階の土坑が集中しているが、ＨＪ78グリッドに至ると撹乱は少なく、旧地表面のＶ③層も概ねフラットな状態で確認された。創建期の地表面であるＶ③層は概ね南に向かって下がる状況であり、丘陵裾部からの湧水を滲出させるためには、ＨＫ～ＨＬライン付近を掘削することが必要かつ適切な位置であったとも考えられる

西側調査区

第２トレンチでは、耕作土の直下に古代の文化面が確認された。丘陵裾部に創建期の旧表土（Ｖ③層）が認められたが、以南の沖積地面にはＳＸ2141盛土整地地業により広範囲に造成されていることが確認された。また丘陵裾部と造成地との間、つまり造成地の北側に沿うように幅約3.5mに及ぶ大溝、ＳＤ2154溝跡が確認された。ＳＤ2154溝跡の覆土下位に十和田ａ火山灰を含むことから、10世紀初頭の構築と考えられる。

ＳＸ2141盛土整地地業は、大路西建物の背後となるトレンチ東側（ＨＧ16 ～ 18付近）が特に固く叩き締められており、付近からは鉄滓や鍛造剥片とともに鍛冶炉と思われる還元面や焼土の広がりが複数確認された。またトレンチの南・西側では原地形が一段下がるものの、地形を踏襲したまま造成土の広がりが確認されており、高低の面を有しながら造成面がさらに広がる可能性も考えられる。

トレンチ東側のＨＧ16 ～ 18で確認された複数の鍛冶炉については、低湿な沖積面を盛土整地した条件の悪い立地となるが、仮に10世紀初頭の構築であれば、近接する大路西建物造営に係る臨時的な工房であることも想定される。しかし造成面が広く、また丘陵裾部の創建期地表面にも複数の柱穴様ピット等のプランが確認されたことから、大路西建物背後となる西側調査区の一帯に、何らかの施設群が広がる可能性が高いと思われる。つまり外郭南門南西官衙域が大路西建物だけで構成されるのではなく、東方官衙域にかかる東側調査区と同様、複数の施設群が展開することが想定される。

この点、昨年度までの成果から導かれた仮説と調和的であり、例えば厨舎等の施設が大路西建物の周辺に存在する可能性についても、今後の調査で検証していきたい。

長森丘陵は外郭南門付近で大きく南側に張り出す形状をとっていることから、丘陵裾部には扇形に微高地が形成されており、西側調査区においては、おおよそ北東から南西へ傾斜する地形を呈している。地形の転換点となる裾部微高地の南辺にはＳＤ2154溝跡が構築されており、大路東建物南側（東側調査区）で確認された地形改変（遺構構成）と類似している（第17図）。今後、ＳＸ2141盛土整地地業の精査を進めるにあたっては、この点に留意して比較検討しながら、慎重に調査を進めたい。

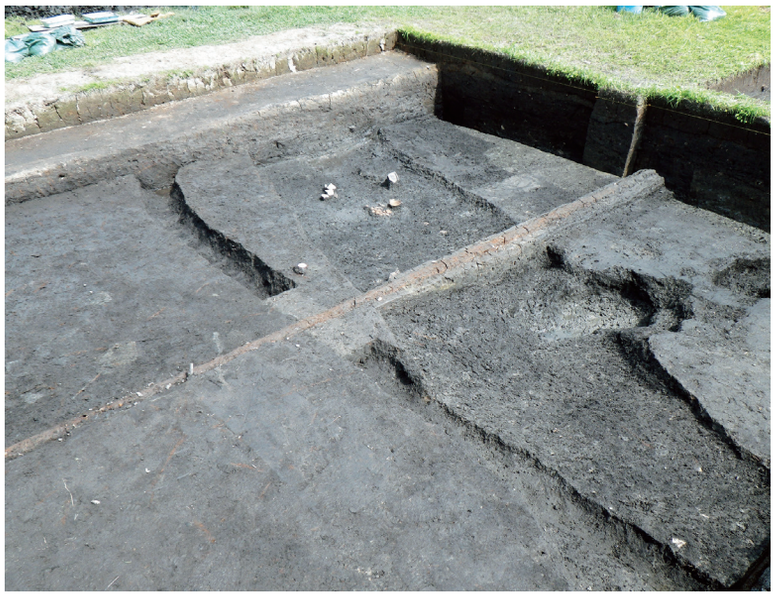
図版２

ＳＤ2001溝跡　確認状況
（南西から）
第１トレンチ北辺で溝跡の南岸を確認した。長森丘陵裾部とＳＸ2002盛土整地地業との間に構築されており、嵩上げ造成地の湿潤化を防ぐため、丘陵裾部からの湧水を滲出させ排水するための施設と考えられる。

ＳＡ2142柵列（Ｐ２）　半截状況
（北から）
ＳＤ2001溝跡の南岸に沿うように３基の柱穴列が確認された。過年度確認のものと合わせ、最低でも４基、３間規模の柵列となる。Ｐ２から柱並びに直交する板材が検出されたため、板柱で構成される板塀跡と考えられる。

ＳＸ2002盛土整地地業　精査状況
（北から）
10世紀初頭に30cm程度嵩上げされた盛土（丘陵裾部からの削土？）中に包含される多量の遺物は、摩滅し接合もほとんどしない。下部からまとまりをもって出土する完形土師器坏の一群は、地鎮等、祭祀の目的で埋置されたものと考えられる。

創建期地表面の確認状況
（北から）
造成土を掘り下げると創建期以来の地表面（Ⅴ③層）が現れる。HK77・78グリッドは大きく撹乱された状況が確認され、上位の造成土と同様の土で埋められていた。東西に貫く２条の溝跡が確認された。



ＳＤ2143・2153溝跡　掘り下げ状況
（北西から）
２条の溝跡は北西から南東方向に、勾配を保ちながら掘削され、この溝中にも土器が埋置されていた。第１トレンチの東側には小河道が南流しており、この河道に開口すると考えられる。調査中は常に丘陵裾部からの湧水が滲出し、流れ出ていた。

第１トレンチ西壁　断面状況
（東から）
堆積土の精査により、直下で確認されたSD2143・2153溝跡は、ＳＸ2002盛土整地地業と同時に一括埋め戻しされていることが確認された。10世紀初頭の造成に際し、丘陵裾部からの湧水を処理するために仮設された排水溝であった可能性が高い。

図版4

ＨＫ78グリッド　完掘状況（北東から）
ＨＫライン付近には一括埋め戻しされた土坑等が集中するが、盛土造成される段階では既に埋め戻されていたことが確認された。これらは大路東建物の正面となる時期に開口していたとは考えがたく、９世紀中頃以降、西側を正面とする建物へと変遷する段階で構築されたと思われる。

ＨＪ78グリッド　創建期地表面状況（西から）
第１トレンチを南側に拡張したところ、焼土及びかまどと思われる遺構が確認された。上屋の有無は不明だが、やはり９世紀中頃以降に使用された可能性が高い。

第１トレンチ　完掘状況（北から）
原地形である創建期の地表面は、丘陵裾部にあたる北側から南側へ緩やかに下がる地形を呈する。地表面に湧水が滲出してくる辺りに排水溝を仮設したうえで、大規模な盛土整地地業を実行したと考えられる。

東側調査区　状況（南から）
創建期に造営された大路東建物は南庇を有し、南側に広がる沖積地を広場として使用したと考えられる。10世紀初頭には、盛土造成により丘陵裾部の微高地から平場を東側に拡張するとともに、造成地の湿潤化を防ぐため、その間に恒久的な排水溝として大溝を構築し、造成地の維持管理を行ったと考えられる。

西側調査区　状況（南西から）
西側調査区は大路西建物の西側沖積地となり、十字形に直交する第２トレンチを設定して表土下の状況を確認した。丘陵裾部に創建期地表面、南側にはＳＸ2141盛土整地地業が広がり、その間にはＳＤ2154溝跡が確認された。

第２トレンチ　表土完掘状況（東から）
表土下の原地形は、南～西側に向かい一段下がる地形を呈する。外郭南門付近から微高地が扇形に広がっており、東・西側調査区ともにその縁辺と考えられる。大路西建物に近いトレンチ東側（写真手前）は固く整地され、焼土等が多く確認された。

図版6

ＨＧ17グリッド　鍛冶炉確認状況（南から）
大路西建物背後となるＨＧ16～18グリッド付近では、ＳＸ2141盛土整地地業の上面が特に固く叩き締められていた。付近には鍛冶炉と思われる還元面や焼土が多く分布し、フイゴ羽口のほか、鉄滓、鍛造剥片等が多量出土した。

ＳＸ2141盛土整地地業　掘り下げ状況（東から）
第２トレンチの大半がＳＸ2141盛土整地地業による造成を受けていた。今年度はサブトレンチによる試掘に留めたため造成時期は不明であるが、東側調査区のＳＸ2002盛土整地地業同様、完形土師器坏の埋置が認められる。

ＳＤ2154溝跡　断面状況（東から）
ＳＸ2141盛土整地地業の北側にＳＤ2154溝跡が確認された。覆土下位に十和田ａ火山灰を含むため、10世紀初頭の構築と考えられる。丘陵裾部と造成地との間に構築されることから、当該期において外郭南門南側の微高地拡張に伴う大規模な地形改変が東西で行われたことも想定される。

第４章　関連遺跡の調査

第１節　調査に至る経過

平成21年度に始まる第８次５年計画では、払田柵跡内の調査に加え、「払田柵跡関連遺跡の試掘調査等」も実施することを掲げている（第２章参照）。これは第７次５年計画（平成16 ～ 20年度）において初めて、「払田柵跡関連遺跡の現況調査」として明文化したもので、関連遺跡とは、払田柵跡の実体解明には欠くことのできない「雄勝城」をはじめ、附属寺院・官衙・集落・生産施設・墓地などである。

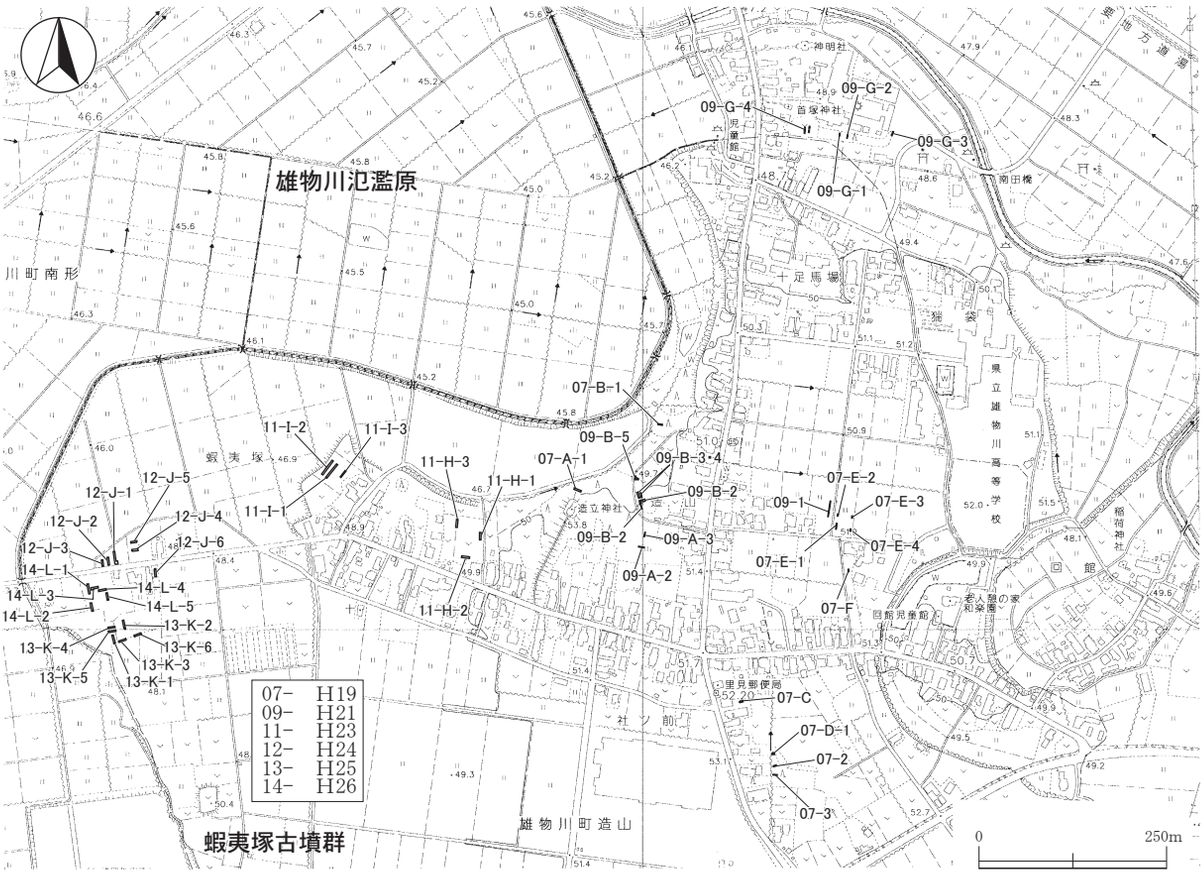
具体的な調査としては平成17年度の実地踏査に始まり、雄勝郡・旧平鹿郡のうち羽後町と横手市雄物川町を対象とした。この地区には、雄勝城が造営された８世紀代の古墳・須恵器窯跡・集落跡が集中しており、平成17年度に雄物川町末館地区、18年度には羽後町上鴨巣地区および雄物川町内山・矢神・造山地区周辺の踏査を実施した。そして19年度には雄物川町造山地区を対象とし、初めて試掘調査を実施した。調査の結果、造山字十足馬場地内から新たに８世紀後半代の集落跡を発見し、十足馬場南遺跡として新規登録・周知し、『払田柵跡調査事務所年報2007』に「関連遺跡の現況調査及び試掘調査」として報告した。

平成20年度は、正報告書『払田柵跡Ⅲ　－長森地区－』刊行を控えていたことから、試掘調査は行わず踏査と資料・情報収集を予定していた。５月に羽後町田沢字川向地区を対象に１日間踏査を実施し、資料・情報収集作業は通年、断続的に実施した。ところが、横手市雄物川町におけるほ場整備事業に係り、市教委が立ち会い調査を実施した町屋敷遺跡において、規模の大きな総柱の掘立柱建物跡が検出された。この件について、横手市教育委員会および県教育庁生涯学習課文化財保護室から調査協力の要請を受け、急遽、関連遺跡の調査として同遺跡の内容確認調査を実施することになった。その調査結果は、『払田柵跡調査事務所年報2008』に「関連遺跡の内容確認調査－町屋敷遺跡」として報告した。

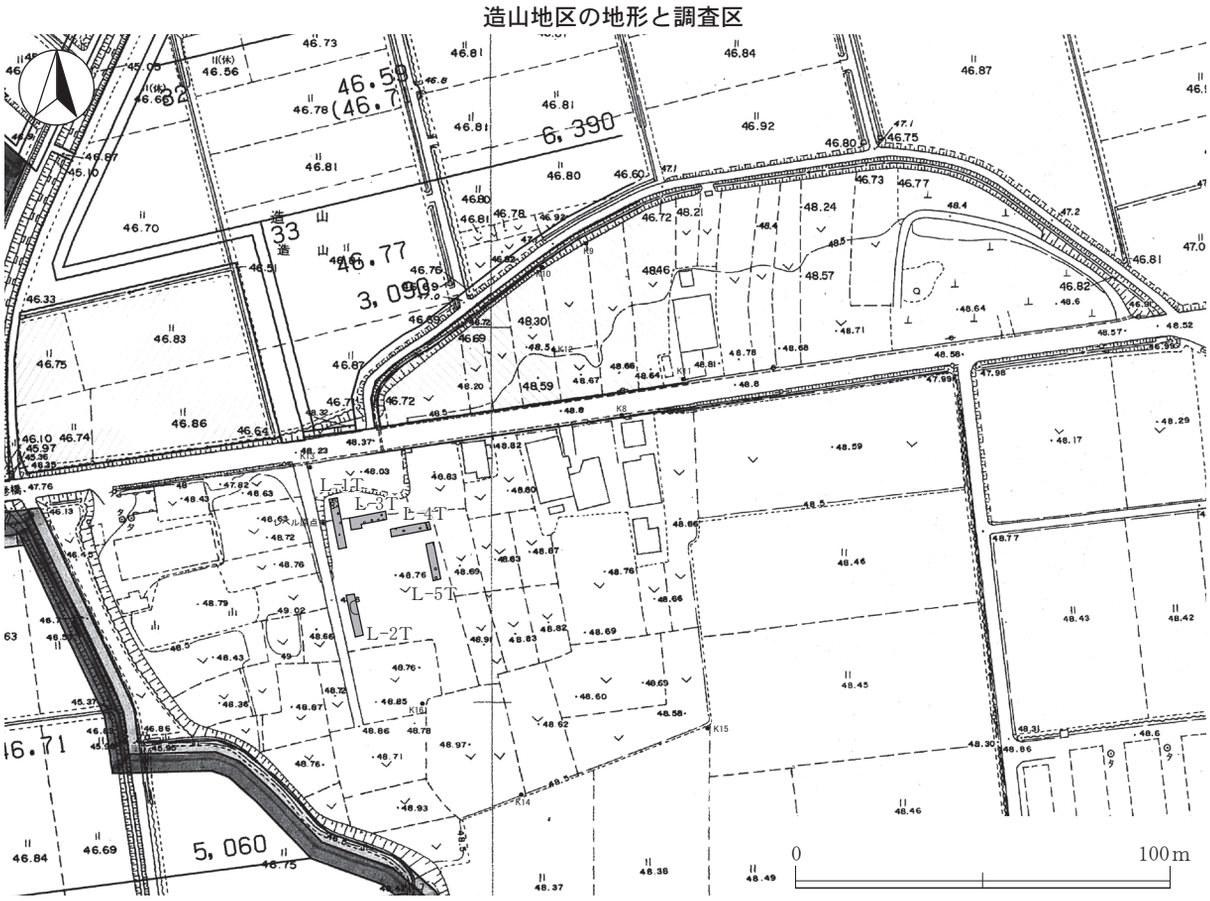
平成21年度は、再び横手市雄物川町造山地区で試掘調査を実施した。調査の結果、造山字造山地内から竪穴部の外側にカマド燃焼部を持つ竪穴建物跡を検出し、８世紀後半代の集落跡を確認した。成果は『払田柵跡調査事務所年報2009』に「関連遺跡の現況調査及び試掘調査」として報告した。また事務所による試掘調査がきっかけとなり、地元に「造山の歴史を語る会」が結成された。

平成23年度は、過去２回にわたる台地中央部の調査成果を受け、円面･二面硯を出土した東槻遺跡、丸・平瓦を出土した十三塚遺跡など、官衙との関連が想定される台地東側に対し、蝦夷塚古墳群や町屋敷遺跡にも近く､雄物川を臨む台地西側における当該期の遺跡の有無を調査することを目的とした。調査の結果、江戸時代の集落跡及び平安時代の散布地を発見し、造山Ⅲ遺跡として新規登録･周知し、『払田柵跡調査事務所年報2011』に「関連遺跡の現況調査及び試掘調査」として報告した。

平成24年度は、引き続き台地西側を対象としたが、より雄物川に近い台地西端部を調査することを目的とした。調査の結果、縄文早～前期の陥し穴のほか、８世紀末葉頃の竪穴建物跡を検出し、台地西端部に奈良時代末～平安時代初めの集落を発見し、蝦夷塚北遺跡として新規登録・周知し、『払



造山地区の地形と調査区



第18図　造山地区　調査実施位置図　トレンチ配置図

田柵跡調査事務所年報2012』に「関連遺跡の現況調査及び試掘調査」として報告した。

平成25年度は、引き続き台地西側を対象に蝦夷塚北遺跡周辺の調査を実施し、遺跡範囲の見直しを行い、『払田柵跡調査事務所年報2013』に「関連遺跡の現況調査及び試掘調査」として報告した。

今年度も引き続き台地西端の調査を進めることとしたところ、地元町内会及び造山の歴史を語る会から全面的な協力を得られることになり、造山地区西端部の休耕地を踏査し、試掘調査地点の選定にあたった。

遺跡名・所在地	蝦夷塚北遺跡隣接地 横手市雄物川町南形字葛巻　地内
調査面積	Ｌ地区 合計117㎡ 第１トレンチ（Ｌ－１）30㎡、第２トレンチ（Ｌ－２）23㎡、 第３トレンチ（Ｌ－３）22㎡、第４トレンチ（Ｌ－４）21㎡、 第５トレンチ（Ｌ－５）21㎡
調査期間	平成26年10月30日～ 11月14日（埋め戻し・補足調査を含む）
調査担当者	秋田県教育庁払田柵跡調査事務所　主任学芸主事　五十嵐一治 文化財主事　伊豆　俊祐
調査協力者	土地所有者、造山町内会・造山の歴史を語る会、横手市教育委員会文化財保護課・横手市雄物川地域局

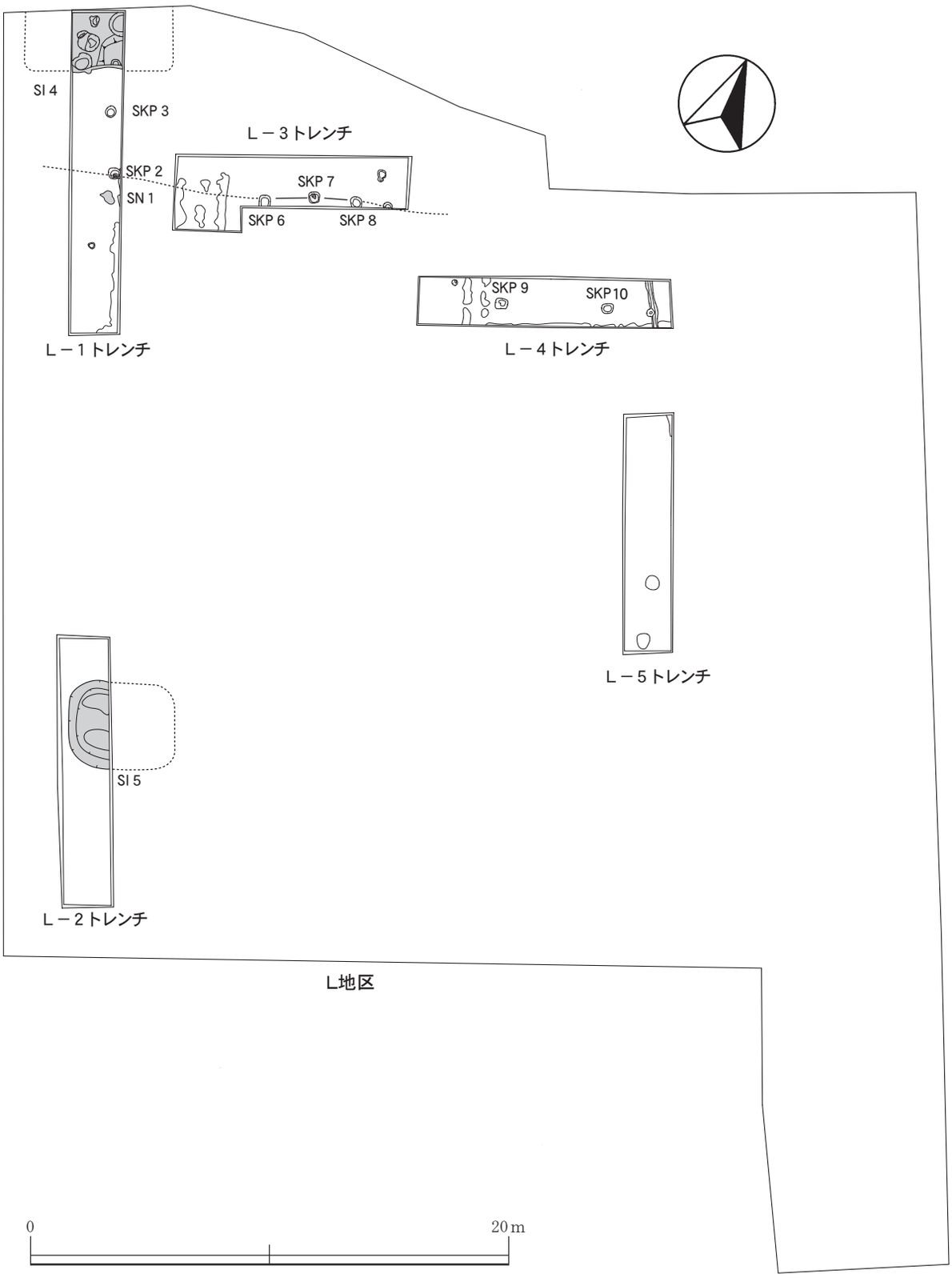
第２節　調査の概要

調査地区・トレンチには平成25年の調査時点でＡ～Ｋ地区として表記していたことから、今回も継続して一連の番号を付すことにした。その対応は以下のとおりである。

１　蝦夷塚北遺跡（第18・19図）

平成25年度に引き続き、台地の西端部を調査対象とした。Ｌ地区は造山地区から続く台地の末端にあたり、一昨年度の調査により新発見し、昨年度の調査で範囲を見直した蝦夷塚北遺跡（Ｊ・Ｋ地区）の西側に隣接し、蝦夷塚古墳群の北側に位置する。造山集落の中心を貫く国道107号の旧道（現市道）沿い台地末端の畑地で、古くから「高屋敷」と呼ばれていた。一段低い西側の段丘面には南形集落が所在し、雄物川を臨む。付近はまとまった畑地が残っており、戦後米軍が撮影した航空写真でも畑地となっている。地形的には造山字蝦夷塚地内となるＪ・Ｋ地区と連続する広く平坦な畑地となっているが、Ｌ地区は地籍上、西側に隣接する南形字葛巻地内となっており、字境が存在する。

調査の結果、第１～５トレンチ（Ｌ－１～５と表記）から、奈良～平安時代の竪穴建物跡２棟、柱穴７基、焼土遺構１基が確認された。２棟の竪穴建物跡はそれぞれトレンチ内で一部が検出されただけで、主柱穴及びかまどは確認されなかった。基本層序は一昨年の調査区と同一で、Ⅰ層が畑耕作土、Ⅱ層が鋤床層、Ⅲ層が古代の文化面、Ⅳ層が漸移層、Ⅴ層が地山となる。また第５トレンチはⅢ層まで掘り下げた段階で調査期間終了を迎え、遺構と思われるプランを確認したのみで埋め戻した。



第19図　L地区　トレンチ配置図

ＳＩ４竪穴建物跡（第19・20図）

第１トレンチの南端で確認された。Ⅲ層とした古代の遺構面から構築される。床面は概ね平坦でＰ１～３の土坑状の凹みを伴うが、覆土の観察によりＰ１・２は付帯する施設、Ｐ３は竪穴構築以前の土坑を埋め戻したものと考えられる。長方形と思われる竪穴建物跡の南辺中央の一部が検出されただけで、主柱穴やかまど等は確認されなかった。確認深さは36cmである。

遺物は縄文土器、須恵器坏・壺・甕、土師器坏・甕が出土した。出土遺物から８世紀後半代に帰属すると考えられる。

ＳＩ５竪穴建物跡（第19・21図）

第２トレンチの中央北寄りで確認された。Ⅲ層とした古代の遺構面から構築される。床面は凹凸が激しいが、隅丸長方形と思われる竪穴建物跡の西側の一部が検出されただけで、主柱穴・かまど等は確認されなかった。確認深さは66cmである。

遺物は須恵器蓋・坏・壺・甕、内黒土師器坏、土師器坏・甕、鉄製品が出土した。出土遺物から９世紀前半代に帰属すると考えられる。

ＳＫＰ２柱穴（第19・20図）

第１トレンチの中央で確認された。Ⅲ層とした古代の遺構面から構築される。一辺45cmの隅丸方形、深さは44cmで、断面観察により柱痕跡も明確である。

遺物は非ロクロ成形の土師器坏が出土した。

ＳＫＰ３柱穴（第19・20図）

第１トレンチの中央北寄りで確認された。Ⅲ層とした古代の遺構面から構築される。直径45cmの略円形で、深さは18cmである。覆土は単層で、柱痕跡は確認できなかった。

遺物は出土しなかった。

ＳＫＰ６柱穴（第19・21図）

第３トレンチの中央で確認された。Ⅲ層とした古代の遺構面から構築される。一辺46cmの隅丸方形、深さは50cmで、断面観察により柱痕跡も明確である。トレンチ南壁まで柱痕跡が広がっており、板柱を立てていたと想定される。

遺物は出土しなかった。

ＳＫＰ７柱穴（第19・21図）

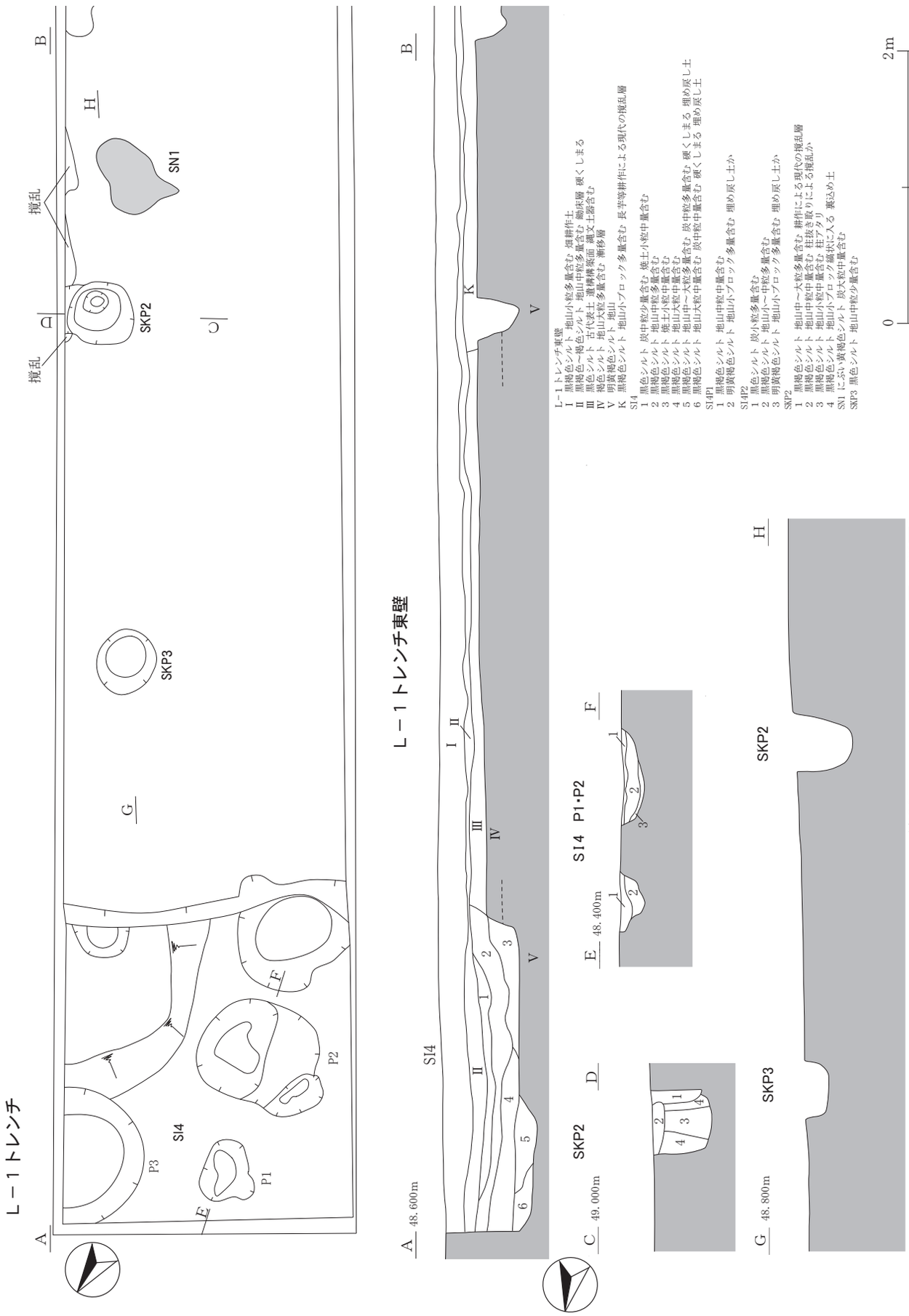
第３トレンチの中央で確認された。Ⅲ層とした古代の遺構面から構築される。一辺46cmの隅丸方形、深さは22cmであるが、本来の深さはＳＫＰ６柱穴と同程度と考えられる。断面観察により柱痕跡も明確である。

遺物は出土しなかった。

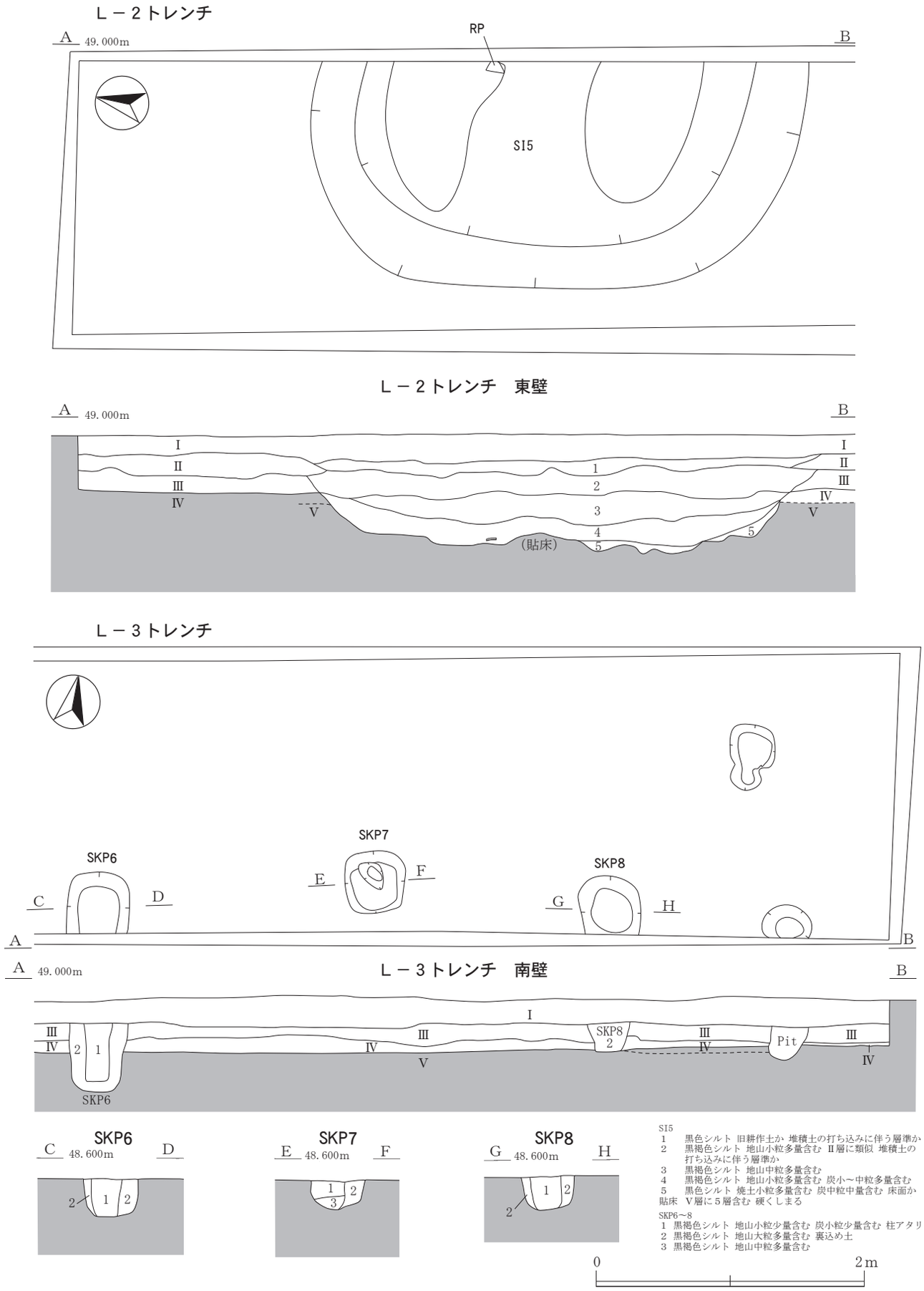
ＳＫＰ８柱穴（第19・21図）

第３トレンチの中央東寄りで確認された。Ⅲ層とした古代の遺構面から構築される。一辺46cmの隅丸方形、深さは45cmであるが、本来の深さはＳＫＰ６柱穴と同程度と考えられる。断面観察により柱痕跡も明確である。

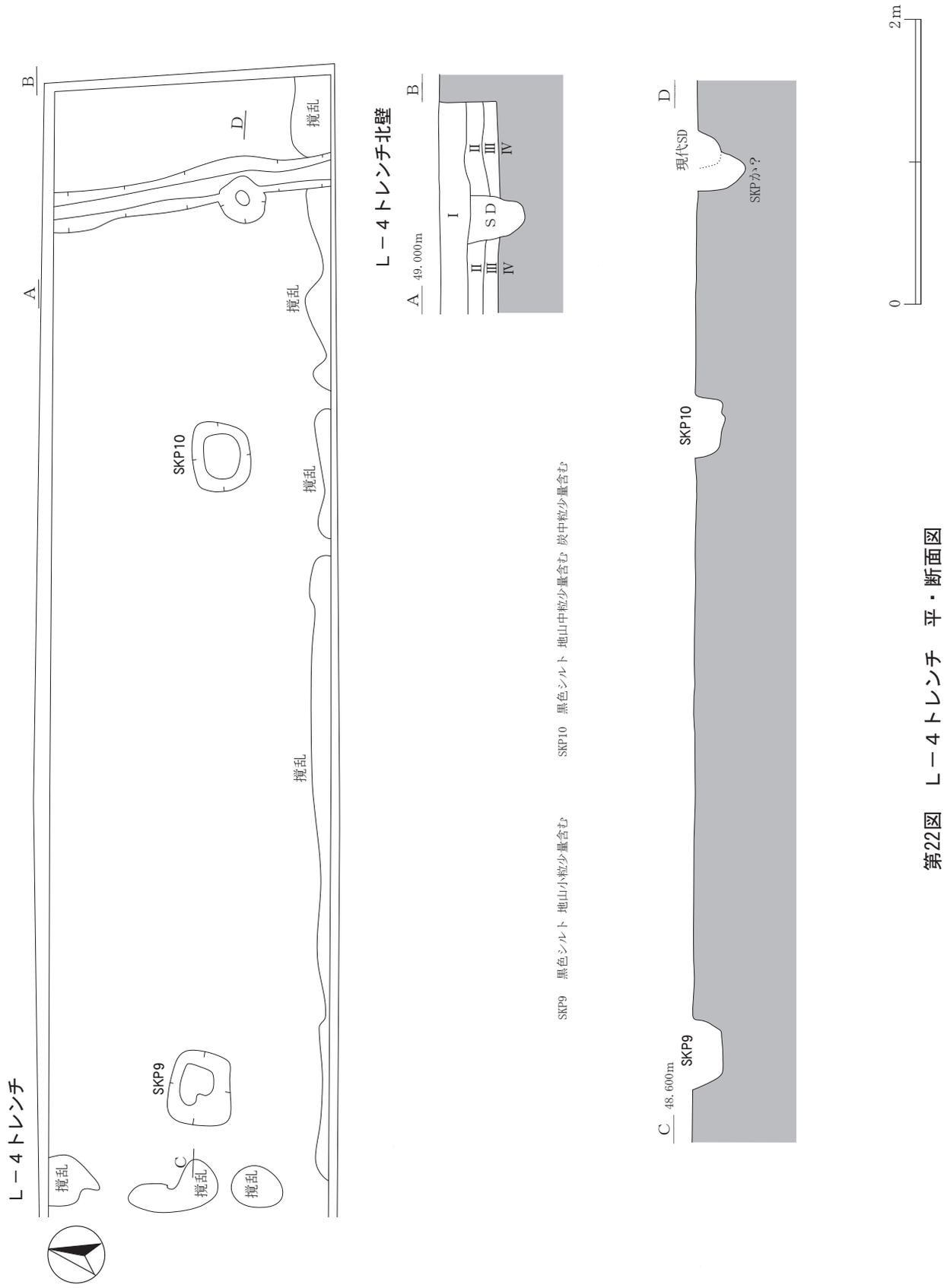
遺物は出土しなかった。



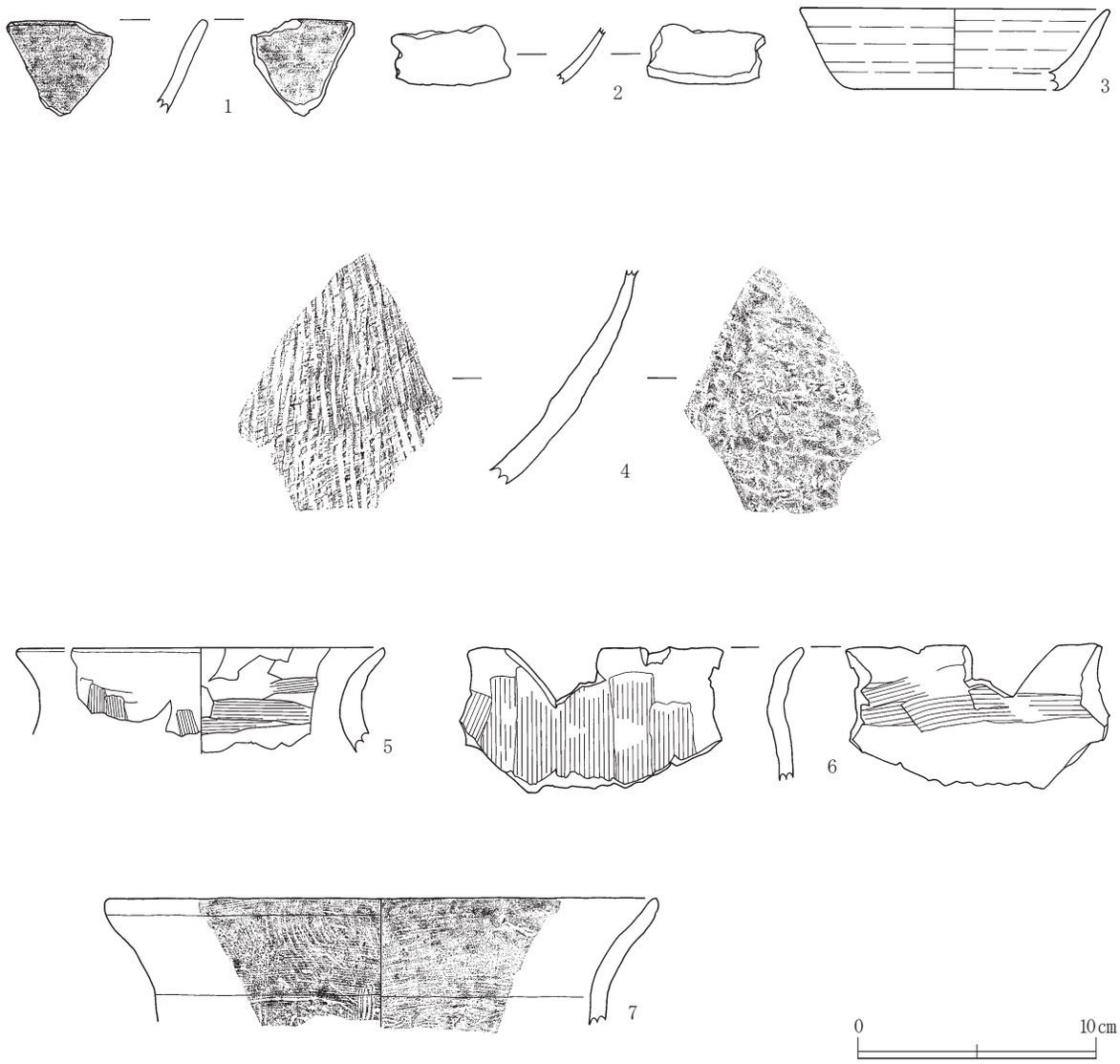
第20図　L－1トレンチ　平・断面図



第21図　Ｌ－２・３トレンチ　平・断面図



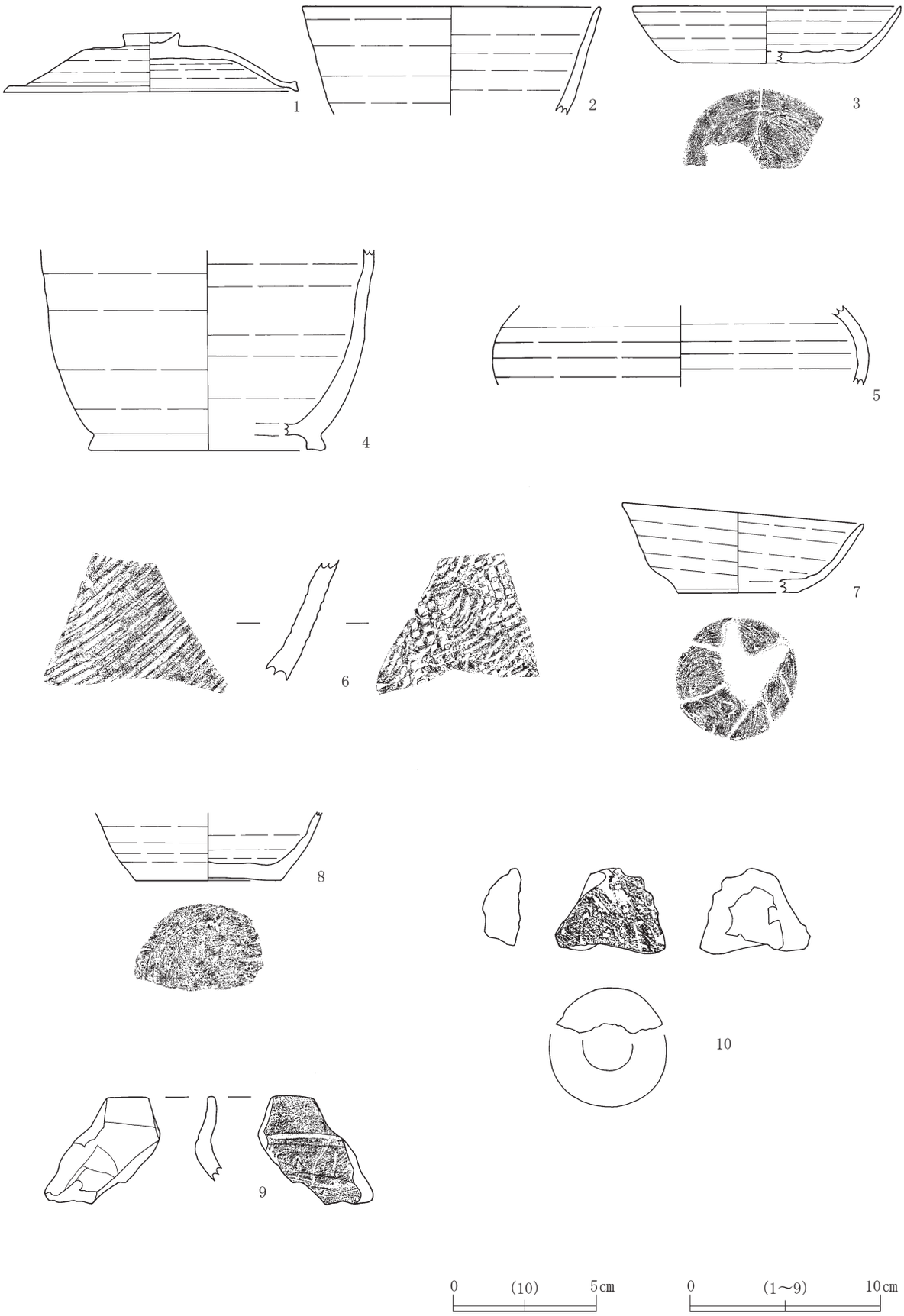
第22図　L－4トレンチ　平・断面図



第23図　Ｌ地区　出土遺物（１）

挿図No.	出土位置	層位等	種別	器種	外面調整	内面調整	底面調整	外面色調	口径	底径	器高	備考
第23図 1	SKP2	埋土	土師器	坏	ナデ	ナデ	－	灰黄褐色	－	－	－	非ロクロ成形
第23図 2	SKP2	埋土	土師器	坏	ナデ	ナデ	－	黒褐色	－	－	－	非ロクロ成形
第23図 3	SI4	埋土	須恵器	坏	ロクロ	ロクロ	－	黄灰色	(12.8)	－	－	
第23図 4	SI4	床直	須恵器	甕	平行タタキ	－	－	灰黄色	－	－	－	
第23図 5	SI4	床直	土師器	甕	ナデ→ハケメ	ナデ→ハケメ	－	灰褐色	(15.4)	－	－	非ロクロ成形
第23図 6	SI4	床直	土師器	甕	ナデ→ハケメ	ナデ→ハケメ	－	にぶい橙色	－	－	－	非ロクロ成形
第23図 7	SI4	床直	土師器	甕	ナデ→ハケメ	ナデ	－	にぶい橙色	(23.0)	－	－	非ロクロ成形

挿図No.	出土位置	層位等	種別	器種	外面調整	内面調整	底面調整	外面色調	口径	底径	器高	備考
第24図 1	SI5	埋土	須恵器	蓋	ロクロ	ロクロ	－	灰色	(15.4)	－	3.1	
第24図 2	SI5	埋土	須恵器	坏	ロクロ	ロクロ	－	灰黄色	(15.6)	－	－	高台付坏か
第24図 3	SI5	埋土	須恵器	坏	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り	にぶい黄橙色	(14.0)	(9.4)	3.0	
第24図 4	SI5	床直	須恵器	壺	ロクロ	ロクロ	－	灰色	－	－	－	
第24図 5	SI5	床直	須恵器	壺	ロクロ	ロクロ	－	灰白色	－	－	－	
第24図 6	SI5	床直	須恵器	甕	平行タタキ	青海波・格子目アテ具	－	灰色	－	－	－	
第24図 7	SI5	埋土	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	にぶい橙色	(12.6)	(6.4)	4.7	
第24図 8	L-2	Ⅲ層	土師器	甕	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	黒褐色	－	(7.4)	－	
第24図 9	L-5	Ⅱ層	土師器	甕	ナデ	ナデ	－	にぶい橙色	－	－	－	非ロクロ成形？
第24図 10	L-2	Ⅱ層	フイゴ羽口		－	－	－	－	－	－	－	フイゴ羽口



第24図　Ｌ地区　出土遺物（２）

ＳＫＰ９柱穴（第19・22図）

第４トレンチの西寄りで確認された。Ⅲ層とした古代の遺構面から構築される。一辺52cmの隅丸方形、深さは22cmである。覆土は単層で、柱痕跡は確認できなかった。

遺物は出土しなかった。

ＳＫＰ10柱穴（第19・22図）

第３トレンチの中央東寄りで確認された。Ⅲ層とした古代の遺構面から構築される。一辺50cmの隅丸方形、深さは22cmである。覆土は単層で、柱痕跡は確認できなかった。

遺物は土師器坏が出土した。

ＳＮ１焼土（第19・20図）

第１トレンチの中央で確認された。Ⅲ層とした古代の遺構面の上面に構築される。長軸78cmの不整形で薄く、掘り込みは無い。

遺物は出土しなかった。

遺構外出土遺物

遺構外からの出土遺物としては、縄文土器、須恵器坏、土師器坏・甕、鉄製品、近世陶磁器が出土した。

２　小結

今回の調査では、台地北側の縁辺近くで竪穴建物跡を確認した、Ｊ地区の南側に隣接する本調査区（Ｌ区）においても複数の竪穴建物跡が確認され、集落としての蝦夷塚北遺跡の広がりと時間幅について、新たな資料が得られたことになる。また今回、調査を承諾いただいたものの、時間の制約で着手できなかった調査区外西側の台地西側縁辺にも遺物撒布箇所が確認できるため、この付近まで集落が広がる可能性が高い。

出土した遺物から、今回確認されたＳＩ４竪穴建物跡は８世紀後半代、ＳＩ５竪穴建物跡は９世紀前半代に帰属すると考えられる。またＳＫＰ２・６～８柱穴は、平面形状及び断面観察による覆土状況が類似し、ＳＫＰ２から８世紀後半代と考えられる非ロクロ成形による土師器坏が出土したこと、そしてＳＫＰ６柱穴で確認した柱痕跡の特徴から、当該期に板塀様の施設で集落内が区画されていたことも想定される。南側に近接する蝦夷塚古墳群が造営される時期とも重なり、また遺構内外から鉄製品やフイゴ羽口が出土していることからも、８世紀後半～９世紀前半代の集落周辺における官衙関連施設の存在について、今後も調査を継続する必要性が高まったといえる。

図版7

Ｌ－１トレンチ　調査状況
（北西から）
旧国道よりのＬ－１トレンチ北端部でＳＩ４竪穴建物跡が確認された。大型の竪穴建物跡の南辺中央が検出された状況である。

ＳＩ４竪穴建物跡　精査状況
（西から）
竪穴建物跡の床面から大小の施設が確認された。写真奥の断面右側にかかる黒色土は比較的固く、床面に固着した状況であり、出入り口であった可能性がある。非ロクロ成形の土師器甕等が出土し、８世紀後半代の竪穴建物跡と考えられる。

ＳＩ４竪穴建物跡　完掘状況
（西から）
写真奥の断面左側にかかるＰ３は覆土が固く締まっており、竪穴構築前の遺構を埋め戻したものと考えられる。主柱穴やかまど等の施設は確認されなかった。

ＳＫＰ２柱穴　半截状況
（南から）
Ｌ－１トレンチ中央付近で、隅丸方形の柱穴が確認された。掘形・柱痕跡・裏込め土もしっかりした柱穴で、非ロクロ成形の土師器坏が出土し、８世紀後半代の柱穴と考えられる。東に隣接するＬ－３トレンチに類似する柱穴が並ぶ。

Ｌ－２トレンチ　遺構確認状況
（南から）
Ｌ－１トレンチの南奥にトレンチを設定したところ、竪穴建物跡のプランが検出された。広くスイカ畑として耕作されているが、耕作以外の撹乱は少なく、遺構の遺存状況は良好である。このトレンチからはフイゴ羽口も出土した。

ＳＩ６竪穴建物跡　精査状況
（南西から）
覆土中からは須恵器蓋・坏・壺・甕等が出土した。撹乱も無く覆土もきれいな自然堆積であった。

図版９

ＳＩ５竪穴建物跡　完掘状況
（南西から）
大型の隅丸方形を呈する竪穴建物跡の、西側の一部が検出された状況である。

ＳＩ５竪穴建物跡　完掘状況
（西から）
床面は若干の貼床がなされていたが、凹凸が大きい。主柱穴やかまど等の施設は確認できなかった。

ＳＫＰ６柱穴　半截状況
（北から）
Ｌ－３トレンチからはＳＫＰ６～８と、隅丸方形の柱穴が３基確認された。掘形・柱痕跡・裏込め土もしっかりした柱穴で、ＳＫＰ２柱穴に類似する。

Ｌ－３トレンチ南壁
（ＳＫＰ６柱穴）断面状況（北から）
ＳＫＰ６柱穴プランをトレンチ南壁ギリギリまで掘り下げたところ、半截位置で確認されていた柱痕跡が壁面にまでかかっていた。柱並びと直交する、南北に長いアタリを持つことから、胡桃館遺跡で確認されたような板塀様の施設が想定される。

Ｌ－３トレンチ　完掘状況
（西から）
ＳＫＰ２及び６～８柱穴は、耕作による撹乱を挟んでほぼ東西に並ぶことから、一連の柱穴列と考えられる。８世紀後半代に集落を区画した施設であろうか。

Ｌ－４トレンチ　実測状況
（南東から）
Ｌ－４トレンチからもＳＫＰ９・10柱穴が確認されたが、掘形が浅く覆土も単層で、ＳＫＰ２・６～８柱穴とは異なる様相を呈する。何らかの施設の一部である可能性は考えられるが、出土遺物から９世紀以降の柱穴と思われる。

第５章　調査成果の普及と関連活動

調査成果の普及のために、次のような関連する活動を行った。このことは、主に調査班の五十嵐一治が担当した。

１　諸団体主催行事への協力活動

発掘調査の現場や、政庁跡、外柵南門・大路周辺地域などにおいて、次の諸団体などの遺跡視察・研修・見学会に対し、払田柵跡の説明等を行った。

秋田大学（渡部教授ほか、７月31日）、学習院大学（鐘江教授ほか、８月27日）、秋田県埋蔵文化財センター（古代発見！バスツアー、10月７日）、秋田大学（渡部教授ほか、10月24日）、平成26年度「よみがえる平安の柵」払田柵再現事業参加者（大仙市立高梨小学校・横堀小学校、10月28日）

２　講演会の開催

払田柵跡調査事務所による調査40周年に際して記念講演会を開催するとともに、調査のあゆみを取りまとめた冊子を作成し参加者に配布した。

払田柵跡調査40周年記念講演会　　参加人数：340名　　実施日：平成26年９月７日

・新野直吉氏　「払田柵とともに60年」

・岡田茂弘氏　「東北の古代城柵と払田柵跡」

３　研修生・インターンシップ・職場体験生徒の受け入れ

発掘調査実習、遺物整理作業、見学実習などにおいて、次のとおり実施に協力した。

「払田柵跡」を素材にした教材作成　　参加人数：20名　　実施日：平成26年７月25日

※秋田大学教員免許状更新講習「地域を体験できる日本史」の教材作成への協力

４　平成26年度払田柵跡環境整備審議会への出席

平成26年11月11日（於：大仙市仙北庁舎）

５　後三年合戦（役）史跡検討会への出席

平成26年８月22日（於：陣館遺跡）、10月８日（於：陣館遺跡）、平成27年３月30日（於：横手市教育委員会）

６　県内市町村実施学術調査等への指導・協力

①上野Ⅱ遺跡（大仙市）　　平成26年４月15・17日、５月12日

②史跡払田柵跡（大仙市）　　平成26年９月25・26・29・30、10月１～３・７～10日

③鎧ヶ崎城跡（美郷町）　　平成26年５月17日、９月24日、11月27日

④川端山館跡（美郷町）　　平成26年５月17日

⑤陣館遺跡（横手市）　　平成26年９月29日、10月23・29日、11月26日

7　報告・発表

①秋田県教育庁払田柵跡調査事務所
『払田柵跡調査40周年記念　払田柵跡　―発掘調査のあゆみ―』
2014年９月

②五十嵐一治　　博物館教室
「払田柵跡とは何か」
平成26年９月28日　秋田県立博物館

③五十嵐一治　　放送大学面接授業
「秋田の古代を掘る」
平成26年11月２日　放送大学秋田学習センター

④五十嵐一治　　発掘！考古ゼミ
「発掘調査40周年記念　払田柵跡の発掘調査と成果」
平成26年12月５日　秋田県生涯学習センター

⑤五十嵐一治　　払田柵跡関連遺跡調査報告会
「払田柵跡関連遺跡調査の成果」
平成26年12月21日　横手市雄物川町造山公民館

⑥五十嵐一治　　「払田柵跡　－平成26年度調査の概要－」
『第41回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
平成27年２月28日～３月１日　東北歴史博物館（多賀城市）

⑦五十嵐一治　　秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会
「払田柵跡　－第148次調査の概要－」
平成27年３月８日

8　資料の貸出

【貸出資料】払田柵跡出土資料
・秋田県埋蔵文化財センター
（平成26年度企画展『払田柵跡　―巨大城柵の実像に迫る―』における遺物展示）
平成26年７月１日～平成26年３月１日　秋田県埋蔵文化財センター特別展示室

9　史跡払田柵跡の現状変更

当事務所では、史跡の管理団体である大仙市と協議・協力の上で遺構と歴史的景観の保護に努めている。しかしながら、やむなく史跡内の現状を変更する場合には、申請者及び関係機関と遺跡保護のための協議を重ね、遺跡への影響がない範囲で最小限の現状変更に伴う調査を行っている。

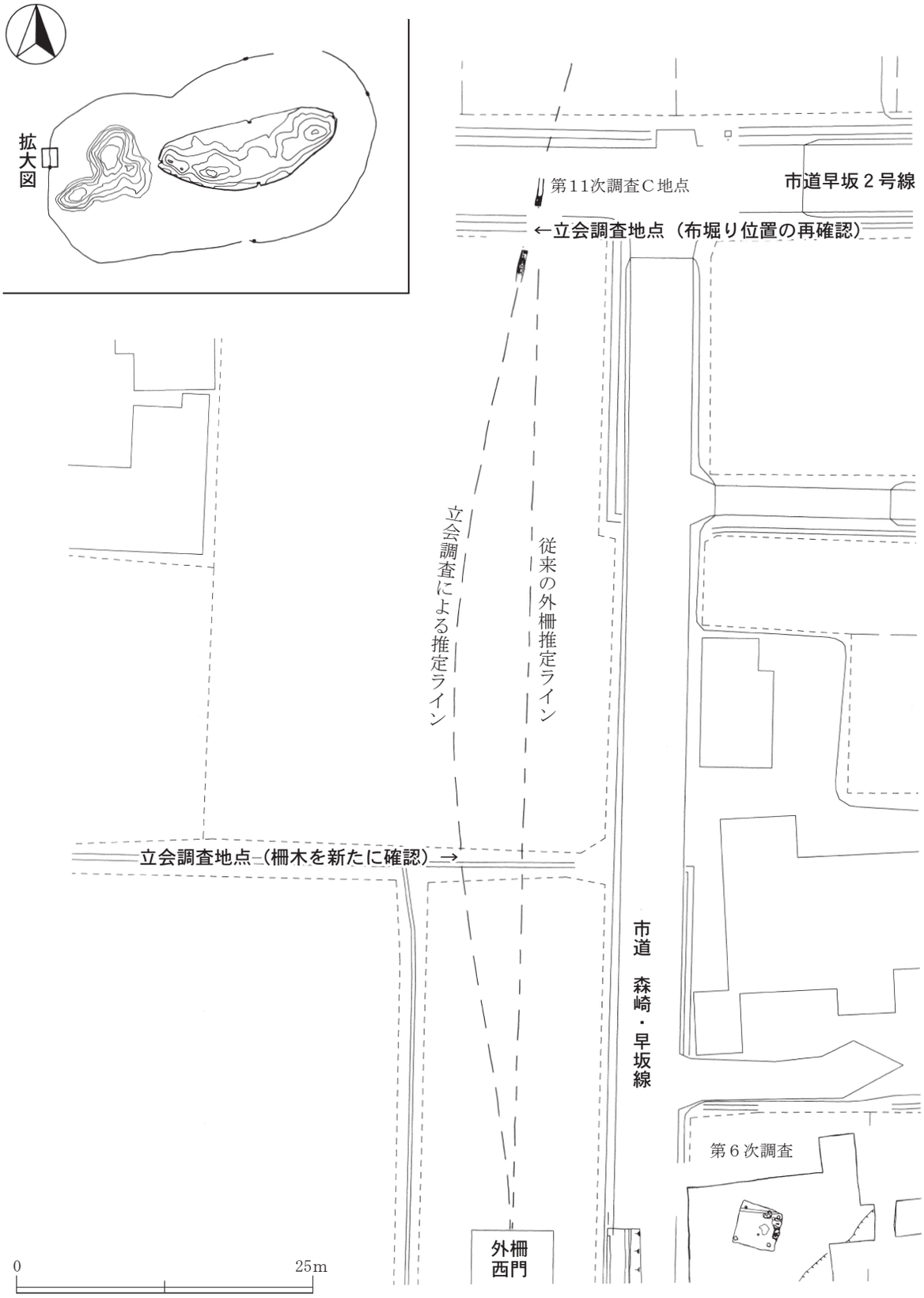
平成26年度の現状変更申請は、第148次調査を除くと16件であった。これらの対応については、立ち会いを大仙市教育委員会文化財保護課及び美郷町教育委員会生涯学習課が担当し、当事務所が適宜

番号	申請者	申請地	申請理由	申請年月日	許可年月日	対応立会日	備考
1	大仙市	大仙市払田字仲谷地地内　ほか	環境整備	平成26年４月９日	平成26年６月３日	平成26年７月14日 ほか	復元材木塀建替、材木塀平面表示、外柵南西部不陸整正
2	個人	大仙市払田字森合44−１　ほか	水田畦畔除去	平成26年４月10日	平成26年４月11日 （市許可）	平成26年４月23日	
3	秋田県	美郷町本堂城回字百目木99　ほか	暗渠排水工事	平成26年５月７日	平成26年７月18日	平成26年10月17日 ほか	
4	個人	大仙市払田字早坂131−１　ほか	暗渠排水管敷設	平成26年６月11日	平成26年７月18日	平成26年11月20日	
5	東北電力	大仙市払田字館前地内	電柱移設	平成26年６月11日	平成26年７月18日	平成26年８月11日 ほか	
6	大仙市	大仙市払田字真山１　ほか	収蔵庫等解体及び撤去	平成26年８月11日	平成26年９月19日	平成26年10月30日 ほか	
7	個人	大仙市払田字早坂51−１　ほか	暗渠排水管敷設等	平成26年８月13日	平成26年９月19日	平成26年10月24日 ほか	
8	個人	大仙市払田字早坂10　ほか	暗渠排水管敷設	平成26年８月13日	平成26年９月19日	平成26年11月10日 ほか	
9	大仙市	大仙市払田字真山１	公衆トイレ改修	平成26年８月13日	平成26年９月19日	平成27年２月12日	
10	個人	大仙市払田字森崎145	住宅撤去及び改築	平成26年８月15日	平成26年９月19日	−	発掘調査条件、外柵確認
11	高梨地区農地・水・環境保全組織	大仙市払田字早坂143−1地先　ほか	水路改修	平成26年９月11日	平成26年10月17日	平成26年12月12日 ほか	
12	大仙市	美郷町本堂城回字百目木151−１地先 ほか	電柱移設	平成26年９月12日	平成26年10月17日	平成26年10月30日 ほか	
13	秋田県	美郷町本堂城回字森崎35−２地先 ほか	水位計設置	平成26年９月18日	平成26年11月21日	平成27年２月25日 ほか	
14	大仙市	大仙市払田字館前57−１地先　ほか	水路改修	平成26年10月14日	平成26年11月21日	平成27年２月20日	
15	個人	大仙市払田字森崎145	車庫撤去	平成26年12月11日	平成27年１月16日		
16	個人	大仙市払田字仲谷地80	住宅等撤去	平成27年２月６日			

※対応・立会日は、平成27年２月末日までの状況

協力する形で実施したものである。

№10の案件は、建造物の除却等に係る現状変更とそれに伴う発掘調査であり、調査地を外柵が横切ることが確認された。調査結果の詳細については、後日大仙市教育委員会が報告する。また№４に掲げた個人農地への暗渠排水工事に係る立会調査では、第11次調査で外柵が確認された位置の再確認及び外柵西門北側における外柵位置が新たに確認され（第25図）、外柵に施工位置が及ばないよう、暗渠位置が設計変更された。



第25図　外柵西門北側における現状変更立会調査成果

払田柵跡調査事務所の沿革

年	月	事　項
昭和	49．4	「秋田県払田柵跡調査事務所」を仙北町公民館(高梨字田茂木)内に設置。 第１次５年計画調査を開始。
	49．8	調査・研究の適正な実施を図るため、顧問２名を委嘱して指導体制を確立。顧問には秋田大学教授・新野直吉氏(～調査指導委員として現在に至る)と多賀城跡調査研究所長・岡田茂弘氏に委嘱。
	50．6	岡田茂弘氏の文化庁転出に伴い、多賀城跡調査研究所長の氏家和典氏に顧問を委嘱。(～昭和52年度)
	50.10	第７次調査区(外柵南門跡北側)で「嘉祥二年」銘の木簡出土。
	52．5	第12次調査区で政庁正殿跡を検出。
	54．4	事務所を史跡内の払田字館前100番地にある独立した建物内に移設。第２次５年計画調査を開始。
	55．3	第６回古代城柵官衙遺跡検討会を仙北町で開催。
	56.10	秋田県埋蔵文化財センター開設に伴い、事務所も同所内に移転、現在に至る。
	57．8	常陸宮殿下・同妃殿下　政庁跡を御視察される。
	57.11	ホイド清水(第49次調査区ＳＥ550)から「絵馬」や第16号木簡など出土。
	58．6	国立歴史民俗博物館教授岡田茂弘氏に再び顧問を委嘱する(～調査指導委員として現在に至る)。
	59．4	第３次５年計画調査を開始。
	59．5	第55次調査区で外郭南門跡を検出、４時期であることを確認。
	60．3	正報告書第１集『払田柵跡Ⅰ－政庁跡－』を公刊。
	61．4	事務所の名称が「秋田県教育庁払田柵跡調査事務所」と改称される。
	61．5	第65次調査区で外郭南門跡に接続する石塁を検出、古代東北城柵遺跡では初見。
	62．5	第68次調査区で外郭東門跡を検出。
	63．6	史跡の追加指定がなされ、指定面積は894,600㎡となる。
平成	1．1	第73次調査で検出された外柵材木塀のうち３本の角材を年輪年代測定した結果、最外年輪測定年代が、西暦801年と特定された。このことから、外柵の成立年代すなわち払田柵の創建がこの頃であることが確実となった。
	1．4	第４次５年計画調査を開始。
	1．8	第81次調査区で外郭西門跡の柱掘形を検出、これで外柵・外郭の８門跡は全て確認。
	6．4	第５次５年計画調査を開始。
	7．2	第21回古代城柵官衙遺跡検討会を仙北町で開催。特集テーマ『払田柵跡発掘20年の成果から－城柵研究の新たな視点を求めて－』。
	7．3	『払田柵を掘る－払田柵跡調査20周年記念誌－』刊行。
	8．9	第107次調査区(外郭北門跡東側)では、木道に転用されていた角材が上下端とも残存し、全長4.6ｍであったことから、外郭材木塀の高さ(約3.6m)が明確となる。
	11．3	正報告書第２集『払田柵跡Ⅱ－区画施設－』を公刊。
	11．4	第６次５年計画調査を開始。長森丘陵部西側を主な調査対象区とする。
	13．9	第119次調査区(長森西端部)では緩斜面地を段状・平坦に整地させた面に鍛冶・鋳造関係の工房跡が複数存在することが判明。「出羽」と刻書された土器も出土。
	14．4	調査事務所に班制が敷かれ、調査班、総務班となる。
	15.10	第122次調査区(長森中央西側)で瓦質土器、第６号漆紙文書が出土。
	16．4	第７次５年計画調査を開始、真山地区を調査対象区に組み入れる。 本次計画において初めて「払田柵跡関連遺跡の現況調査」を明文化。
	16．9	第125次調査区(真山丘陵部)で古代の火葬墓を検出、古代墓は初出。
	17．4	調査研究等の事業を適正に実施するため、「史跡払田柵跡調査指導委員会」を設置し、４名の委員を委嘱。
	19.11	関連遺跡の試掘調査として、横手市雄物川町造山地区を試掘。８世紀代の集落遺跡を新発見。十足馬場南遺跡とする。
	20．7	関連遺跡の内容確認調査として、横手市町屋敷遺跡において“稲倉跡”とも推測される大型の総柱掘立柱建物跡を検出。時期は９世紀後半。
	21．3	正報告書第３集『払田柵跡Ⅲ－長森地区－』を公刊。
	21．4	第８次５年計画調査を開始。沖積地部を主な調査対象区とする。
	21．5	「秋田県重要遺跡調査事業」の一環として第139次調査を実施。
	21.11	関連遺跡の調査で、造山遺跡から８世紀中頃～後半代の竪穴住居跡を検出。カマドの構造から坂東を出自とする集団による移民集落の住居跡か。
	22．5	第141次調査を実施。
	22．8	「秋田県重要遺跡調査事業」の一環として、能代市大館跡の調査を実施。
	23．6	第142次調査を実施
	23.11	関連遺跡の調査で、造山Ⅲ遺跡を新発見。
	24.11	関連遺跡の調査で、蝦夷塚北遺跡を新発見。
	25．8	第146次調査で、94次調査以来のＳＢ1058の全容を確認。
	26．8	第148次調査で、大路西建物西側沖積地が広く盛土造成されていることを確認。
	26．9	払田柵跡調査40周年記念講演会を開催。

払田柵跡調査事務所　要項

1　組織規定

秋田県教育委員会行政組織規則（抄）

第八条　　生涯学習課の分掌事務は、次のとおりとする。

十五　　払田柵跡調査事務所に関すること。

2　　生涯学習課文化財保護室は、前項第六号に掲げる事務のうち文化財の保護に関すること及び同項第十号から十六号までに掲げる事務を分掌する。

第十三条　　払田柵跡調査事務所の名称及び位置は、次のとおりとする。

名　称	位置
秋田県教育庁払田柵跡調査事務所	大仙市

2　　払田柵跡調査事務所の分掌事務は、次のとおりとする。

一　　史跡払田柵跡の発掘及びこれに伴う出土品の調査研究に関すること。

二　　史跡払田柵跡の環境整備に関すること。

2　職員

（平成27年３月現在）

職	氏　名	備　考
所　長	京　　久夫	本務　秋田県埋蔵文化財センター所長
副主幹兼総務班長	久米　　保	本務　秋田県埋蔵文化財センター総務班長
主　査	柴田　真希	本務　秋田県埋蔵文化財センター総務班
主　任	今田　陽子	本務　秋田県埋蔵文化財センター総務班
主任学芸主事兼調査班長	五十嵐一治	（兼務　秋田県埋蔵文化財センター調査班）
文化財主事	伊豆　俊祐	本務　秋田県埋蔵文化財センター調査班

3　調査指導委員

国指定史跡払田柵跡の調査研究等の事業を適正に実施するため、史跡払田柵跡調査指導委員会を設置し、４名の委員を委嘱した。

（『史跡払田柵跡調査指導委員会設置要綱』平成 17 年４月１日実施）

史跡払田柵跡調査指導委員名簿

	氏　名	現　職　等	専門分野
委　員　長	新野　直吉	秋田大学名誉教授・秋田県立博物館名誉館長	古代史
副 委 員 長	岡田　茂弘	国立歴史民俗博物館名誉教授	考古学
委　　員	黒崎　　直	富山大学名誉教授	考古学
委　　員	熊田　亮介	秋田大学名誉教授	古代史

報　告　書　抄　録

ふ　り　が　な	ほったのさくあと　－　だい　148　じ ちょうさ　　かんれん い せき の ちょうさ がいよう　－
書　　名	払田柵跡　－第148次調査　関連遺跡の調査概要－
副　書　名	払田柵跡調査事務所年報2014
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第498集
編 著 者 名	五十嵐一治
編 集 機 関	秋田県教育庁払田柵跡調査事務所
所　在　地	〒014-0802　秋田県大仙市払田字牛嶋20番地
発 行 機 関	秋田県教育委員会
所　在　地	〒010-8580　秋田県秋田市山王三丁目１番１号
発 行 年 月 日	2015年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
払田柵跡	秋田県大仙市払田	212	53-1	39°28′06″	140°32′57″			
	仙北郡美郷町本堂城回	434	54-1	経緯度は世界測地系による政庁部での数値				
	第148次:大仙市払田字仲谷地					20140603～20140815	126㎡	学術調査
蝦夷塚北遺跡	横手市雄物川町南形字葛巻	203	60-130	39°16′44″	140°25′11″	20141030～20141114	117㎡	保存目的内容確認

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
払田柵跡第148次	城　柵	平安時代	盛土整地地業１か所、柵列１条、溝跡３条、土坑３基、柱穴様ピット７基	須恵器、土師器、木製品　外	沖積地部の調査、外郭南門東方官衙域・南西官衙域
蝦夷塚北遺跡	集落跡	縄文時代、奈良・平安時代	竪穴建物跡２軒、柱穴様ピット７基、焼土遺構１基	縄文土器・剥片、須恵器、土師器、外	関連遺跡調査（保存目的内容確認調査）

要　　約

払田柵跡第148次は、第９次５年計画の初年度であり、第８次計画に引き続き、長森丘陵南側の沖積地部を対象とした。東側調査区ではＳＢ1054Ａ・Ｂ掘立柱建物跡南側について、ＳＸ2002盛土整地地業を掘り下げて創建期の地表面を精査したところ、盛土整地の前作業として排水溝を切り、湧水を滲出・排水しながら造成を進めたことが確認された。西側調査区では水田耕作土直下に広く造成土（ＳＸ2141盛土整地地業）が確認され、丘陵裾部との境にはＳＤ2154溝跡が確認された。

関連遺跡の調査では、引き続き蝦夷塚北遺跡西側を調査し、奈良～平安時代に係る竪穴建物跡及び柱穴が確認された。同じ特徴を持つ柱穴は、板塀跡の可能性が高い。

秋田県文化財調査報告書第498集
払田柵跡調査事務所年報2014

払　田　柵　跡

－第148次調査　関連遺跡の調査概要－

印刷・発行　平成27年３月
編　　集　秋田県教育庁払田柵跡調査事務所
〒014-0802　秋田県大仙市払田字牛嶋20番地
電話（0187）69-2442　FAX（0187）69-3330
発　　行　秋田県教育委員会
〒010-8580　秋田市山王三丁目１番１号
電話（018）860-5193